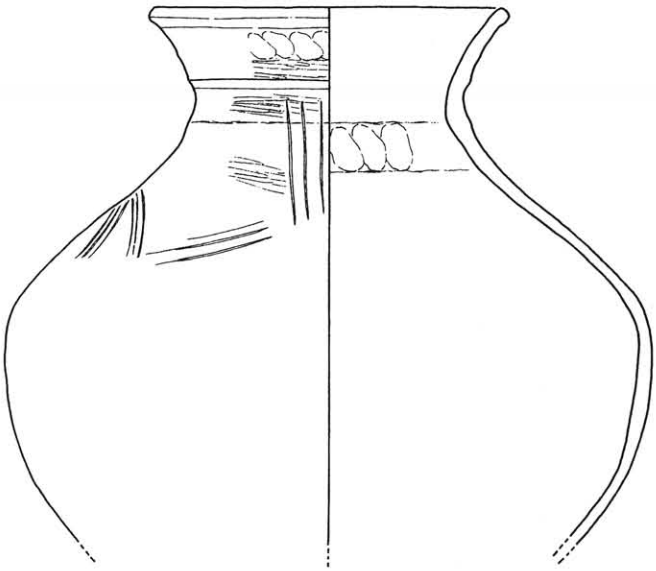
中の池遺跡

－第8次調査－

総合運動公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2003年

発行　香川県丸亀市教育委員会
編集　（財）元興寺文化財研究所

「V」字形環濠SD031全景（北西から）

「V」字形環濠SD031土層断面（南西から）

中の池遺跡

－第8次調査－

総合運動公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年

発行　香川県丸亀市教育委員会
編集　（財）元興寺文化財研究所

目次

I.　中の池遺跡の位置と周辺の弥生遺跡（橋本）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
II.　調査の経緯（東）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
III.　中の池遺跡における既往の調査（佐藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
IV.　基本土層（佐藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
V.　検出遺構（角南・佐藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　検出遺構の概要・・9
　環濠・・・10
　区画溝・・12
　その他の溝・・・13
　土坑・・・14
　柵列・・・17
　住居址・・・18
　ピット・・・18
VI.　出土遺物（佐藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　環濠出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　区画溝出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　その他の溝出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
　土坑出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
　住居址出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
　ピット出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
　その他の遺構出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
　包含層出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
VII.　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　1．遺構の変遷（佐藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　2．建物について（佐藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　3．遺構と遺物の評価（角南）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
VIII.　附論（角南）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
　弥生時代前期の蓋形土器－蓋の再発見と四国の事例－・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

例言

1. 本書は香川県丸亀市金倉町に位置する、中の池遺跡で行われた中の池遺跡8次発掘調査についての報告書である。

2. 調査は丸亀市を事業主体とし、丸亀市教育委員会と調査の委託を受けた（財）元興寺文化財研究所が執行した。

3. 現地調査は狭川真一（(財）元興寺文化財研究所)、角南聡一郎（同）が行い、平成12年10月30日～平成13年1月12までを調査期間とした。

4. 本書に使用した方位は、特に指定のない限り座標北を指し、遺跡の測量は国土調査法第IV座標系による。

5. 遺構の実測および写真撮影は主に角南が行った。

6. 遺物の実測は阿部真弓、岡本広義（(財）元興寺文化財研究所)、佐藤亜聖（同)、関野泰一、仲井光代、鉛谷曜子、長谷川義明が主に行った。

7. 遺物の写真撮影は佐藤が行った。

8. 現地調査参加者は以下の通りである。

稲田和子、小阪繁雄、獅々堀隆司、千光士更生、高木裕子、戸田富子、樋笠和子、藤沢 進、本田昌男、宮武恵美子、宮武セキ子、森崎義信、横山紀代子

9. 整理作業参加者は以下の通りである。

阿部真弓、大西美奈、小田真由美、関野泰一、武田浩子、仲井光代、鉛谷曜子、長谷川義明、三谷幸恵

10. 現地調査及び整理作業に際しては以下の方々のご協力を頂いた。記して謝意を表する。

遠藤 亮、大山眞充、片桐孝浩、蔵本晋司、笹川龍一、佐藤竜馬、武田恭彰、田崎博之、中山尚子、西村尋文、信里芳紀、乗松真也、藤江 望、藤好史郎、堀家守彦、松井一明、松本和彦、松本豊胤、松本直子、宮崎 武、宮武 進、森下英治、森下友子

11. 本書の執筆・編集は東信男（丸亀市教育委員会）の監修の元、東、角南、佐藤、橋本英将（(財）元興寺文化財研究所）が分担して行った。分担は目次に記載する。

12. 出土遺物のほか関連の図面や写真等の資料類は、すべて丸亀市教育委員会において所蔵、保管している。

序　文

考古学について、私は疎いのですが、弥生前期から中期に至る集落遺跡が、丸亀市に存在したことには密かな誇りを感じております。幾度か発掘現場を見学に行きました。ある時には、艶のある朱色の漆塗りの櫛の出土に行き合わせることができ、非常に感激しました。そして、改めて感じたのは、丸亀平野は水に恵まれ、豊穣の地であったからこそ古代の人々は定住したのだろうということです。飯ノ山から昇る太陽が西の山に沈むことのくりかえしの中で、森羅万象が生成変化し、命と文化を育み、遺し、今日に伝えてきたという、この地域の歴史の重みでした。

この度、本書にまとめられたのは、平成13年度に行われた発掘調査の報告です。まず、検出遺構ですが、環濠、柵列、住居跡などです。住居跡については、朝鮮半島に起源をもつ「松菊里型」住居を検出しております。出土遺物としては、壷、甕など土器類、石斧、石包丁、擦り石など石器類、土錘や紡錘車などの土製品です。

調査結果をまとめると、中ノ池遺跡は弥生時代前期の非常に典型的な集落といえること、また、環濠の断面に「V」字型と、緩やかな「U」字型のものがあることから、用途の違いがあるか、環濠が作られた時期に若干の時間差あるのではないかということです。そうだとすれば、これまでの環濠に関する考え方にあらたな問題を提起したものと思っております。さらに、集落内部の区画とみられる溝や内部の土地利用の様子を知る土坑、柱穴も出ております。

今後は、環濠の機能と集落の展開過程について検討を進めて行きたいと思っております。

最後に、発掘調査、報告書の作成に際して、各方面より多大なるご支援をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

丸亀市教育委員会教育長
小佐古 公士

I. 中の池遺跡の位置と周辺の弥生遺跡（Fig001）

中の池遺跡は、現在の行政区分では香川県丸亀市金倉に所在する。香川県は四国東北部に位置する四国最小の県であり、北では瀬戸内海をはさんで岡山県と相対し、南では阿讃山脈で徳島県と画されている。土地面積に占める平野の割合が高く、主な平野として西から三豊平野・丸亀平野・高松平野・志度平野などがある。このなかで中の池遺跡が位置する丸亀平野は現在西から弘田川、金倉川、土器川、大束川の4主要河川があり、善通寺市付近と坂出市付近は弘田川・金倉川・大束川の沖積作用によって形成された沖積平野であることがわかっている。中の池遺跡のある平野中央部北よりの丸亀市付近は平野の東・西部と異なり、緩扇状地形を呈した洪積台地が大半を占めている。

中の池遺跡の存在は1940年代から知られていたが、近年の開発に伴う調査によって周辺の弥生遺跡についても多くの所見が蓄積されてきている。中の池遺跡に近接する地域では、遺跡に南接する平池の東西・南において弥生時代の遺跡が確認され、それぞれ平池東遺跡、平池西遺跡、平池南遺跡と呼称されている。平池東遺跡では、弥生時代の溝状遺構が検出されている（東1996）。平池西遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を包含する河道、弥生時代前期と後期の溝状遺構が検出された（東1999）。平池南遺跡では、弥生時代前期末から後期中ごろの遺構・遺物や、中期に属する土器棺墓が検出され、後期に属するとされる集落内の溝からは青銅製鋤先が出土した。これらの遺跡はいずれも中の池遺跡と有機的な関係を持つことが期待でき、弥生時代の周辺の景観を復元するうえでも、比較検討の必要性が指摘されている（木下1995）。

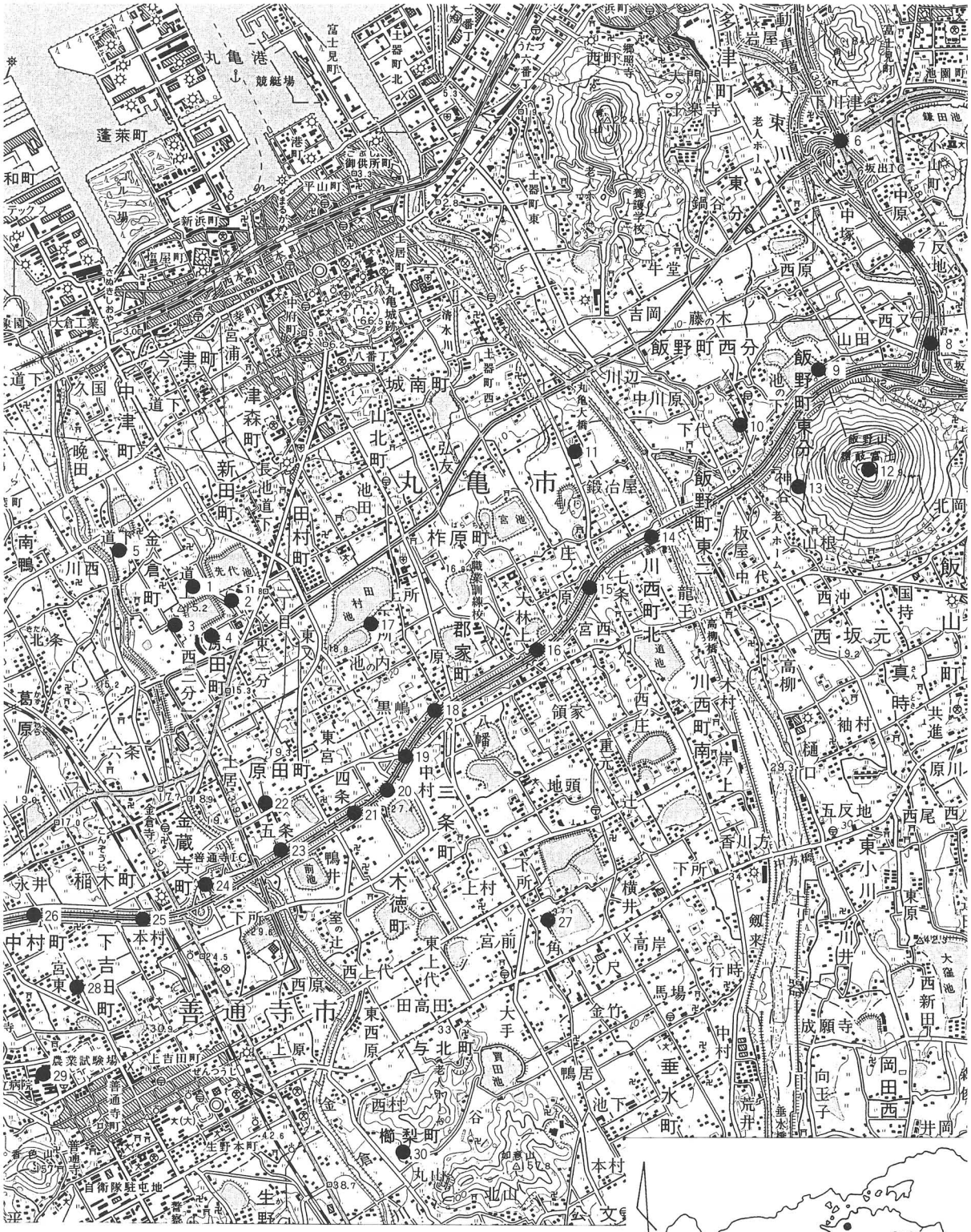
丸亀平野全体に目を転ずると、弥生時代前期には下川津遺跡、三条番ノ原遺跡、龍川五条遺跡、五条遺跡などで人間活動の痕跡が確認できる。下川津遺跡は環濠集落とはならないが、竪穴住居・溝・土坑などから前期古段階の土器が多量に出土している（藤好・西村1990）。三条番ノ原遺跡では、水量調節を目的としたと見られる杭痕を伴う溝が検出されている（片桐1992）。龍川五条遺跡では環濠を持つ集落の基本構造が完成し、円形住居、掘立柱建物、円形周溝墓や木棺墓、用水路などが確認されている（宮崎1996、森下1998）。五条遺跡はいまだその詳細は明らかでないが、前期後半から後期初頭にかけての大規模集落の存在が想定されている。中期になると平野部において確認されている遺跡数は減少し、丘陵上を指向する遺跡が増加する。山麓部において青銅器の埋納が確認されるのもこの段階からである。平野部では旧練兵場遺跡で本格的な集落形成が始まり、拠点集落としての展開がはじまる（狭川2001）。後期になると、再び平野部の遺跡が増加し始める。旧練兵場遺跡の拠点集落としての拡大はピークに達し、周辺にも稲木遺跡や九頭神遺跡などで集落が確認される。下川津遺跡では集落が再開し、また、郡家原・三条黒島・三条番ノ原などでも集落が新たに確認され、この段階で成立した集落は基本的に古墳時代初頭まで継続する傾向が指摘されている（宮崎1996）。

〔参考文献〕

東 信男1996　『平成7年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会

東 信男1999　『平成10年度丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書』丸亀市教育委員会

片桐孝浩1992　『三条番ノ原遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第11冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団



1. 中の池遺跡　2. 平池東遺跡　3. 平池西遺跡　4. 平池南遺跡　5. 道下遺跡　6. 下川津遺跡　7. 川津下樋遺跡　8. 川津一ノ又遺跡　9. 柳池遺跡　10. 藤高池遺跡　11. 土器町 B 遺跡　12. 飯野山山頂遺跡　13. 飯野山西麓遺跡　14. 川西北・鍛冶屋遺跡　15. 川西北・七条 I 遺跡　16. 郡家田代遺跡　17. 田村池遺跡　18. 郡家原遺跡　19. 三条黒島遺跡　20. 三条番ノ原遺跡　21. 龍川四条遺跡　22. 五条遺跡　23. 龍川五条遺跡　24. 金蔵寺下所遺跡　25. 稲木遺跡　26. 永井遺跡　27. 広坪桝池遺跡　28. 九頭神遺跡　29. 旧練兵場遺跡　30. 陣山遺跡

Fig001. 中の池遺跡の位置と周辺の弥生時代遺跡（S＝1/50,000）

木下晴一　1995　『平池南遺跡』陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成6年度　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

狭川真一　2001　『旧練兵場遺跡』市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　善通寺市・(財) 元興寺文化財研究所

西岡達哉　1989　『稲木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査　第6冊　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

藤好史郎・西村尋文　1990　『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

宮崎哲治　1996　『龍川五条遺跡Ⅰ』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査　第23冊　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

森下英治　1998　『龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査　第29冊　香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

II. 調査の経緯

調査区は、江戸時代に造られた溜池である平池北側に位置し、昭和51年度と56年度の調査により、丸亀市金倉町字中の池993、994‐1番地で確認された弥生時代前期の環濠集落である「中の池遺跡」の範囲内に位置する。平成５年度に平池の南側で県立丸亀陸上競技場の建設が決定し、市において平池周辺に総合運動公園の整備を行うこととなった。総合運動公園整備事業（以下「整備事業」という。）に際しての遺構保護については、関係機関の事前協議により、耕作土より下層は掘削せず、盛土造成を行なうことで遺構の保護を図り、全体発掘調査を行わないこととした。

平成12年度整備事業である水路整備及び遊水池建設に伴い、平成12年6月29日から7月3日にかけて試掘調査を実施した。調査の結果、土器を多量に包含する層が確認され、本調査が必要となり、整備事業を所管する丸亀市都市経済部都市計画課からの要請により、丸亀市教育委員会文化課（以下「文化課」という。）が関与し、香川県緊急地域雇用特別基金事業の一環として発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、財団法人元興寺文化財研究所に業務を委託し、平成12年10月30日から平成13年1月12日まで、丸亀市金倉町974‐1、977‐2、980‐１、981、992‐1、993番地、約1,500m²のうち946m²を対象とし実施した。

調査地は「中の池遺跡」の中心部分であることが明らかとなり、重要な遺構の発見もあり、文化財関係者により遺構の重要性及び遺跡の保護について市へ強い要望があった。それを受け、市において現地視察を重ね、協議した結果、すでに契約を完了していた遊水池建設の工事を中止し、予定地の遺構が保護された。

全国で多くの開発工事に伴う発掘調査により、数多くの遺跡が消失するなか、香川県内で遺跡の重要性について理解が得られ、開発より保護が優先されたということは、大変重要なことである。

III. 中の池遺跡における既往の調査（Fig002）

中の池遺跡の発見は1947年、水田地下げの際に、地元の人によって多量の土器片が採取された事に始まる。しかし本格的な発掘調査は1976年、香川県教育委員会による第1次調査を待たねばならなかった。第1次調査は90m²の小規模なトレンチ調査であったが、複数の溝が確認され、出土遺物から弥生時代前期の遺構であることが確認された。

1981年、丸亀市教育委員会によって行われた第2次調査は、調査面積が700m²と、比較的広い範囲の調査が行われた。調査の結果、弧を描いて並走する4条の溝が確認され、香川県で初めて確認された環濠集落であることが判明した。続いて第2次調査の東側付近で行われた第3次調査は、幅約2m、長さ20m程度のトレンチ3本が設定された。その結果2次調査で見つかった環濠の延長と考えられる2本もしくは3本の溝が見つかり、環濠集落の形態を推測する資料となった。また、第2区では環濠の外側と考えられる位置からも多数の柱穴等が見つかり、環濠の外側にも居住地が存在した可能性が指摘された。

続いて1998年には、丸亀市総合運動公園整備事業に伴い、丸亀市教育委員会、松本考古学研究所によって第4次・第5次調査が行われた。第4次調査はこれまでの調査区とはやや離れた、現集落の南側で行われた。推定される集落域から大きく離れているにもかかわらず、弥生前期の溝が検出され、第3次調査で指摘された環濠外における集落域の存在が確実なものとなった。第5次調査では第3次調査の調査区で多くの溝が見つかり、環濠西側の状況について検討課題を与えた。

1999年、丸亀市教育委員会によって行われた第6次調査は、第3次調査の東側で行われた調査で、範囲確認調査のため詳細は不明であるが複数の溝が複雑に切り合って検出されている。さらに同年、それまで調査の及んでいなかった南側地区で行われた第7次調査では、南へと続く溝と、暗褐色の粘土を埋土とする落ちこみが見つかっている。

これら既往の調査から得られる中の池遺跡の調査課題として、

① 環濠内側の土地利用状況の解明

② 環濠の詳細な年代

③ 環濠の形状の確認

④ 環濠西側の情報

⑤ 環濠内外の利用形態における差異の抽出

などが考えられる。今回の調査では特に①③に重点を置いて調査を行った。

IV. 基本層位（Fig003）

調査地は厚さ1m以上の造成土に覆われている。造成土直下には約20cm前後の厚さで旧耕作土である暗灰色細砂が存在する。旧耕作土直下には黄灰色シルトが厚さ約10cmにわたって存在する。弥生時代の遺構はこのシルトを除去した淡褐色シルト上面で検出したが、古墳時代や中近世の遺構も同一遺構面で検出しており、弥生時代の遺構面の残存率の悪さなどからも相当な削平が行われていると考えられる。

以下壁面土層を図示する。

Fig002．中の池遺跡における既往の調査位置図（S＝1/1,000）

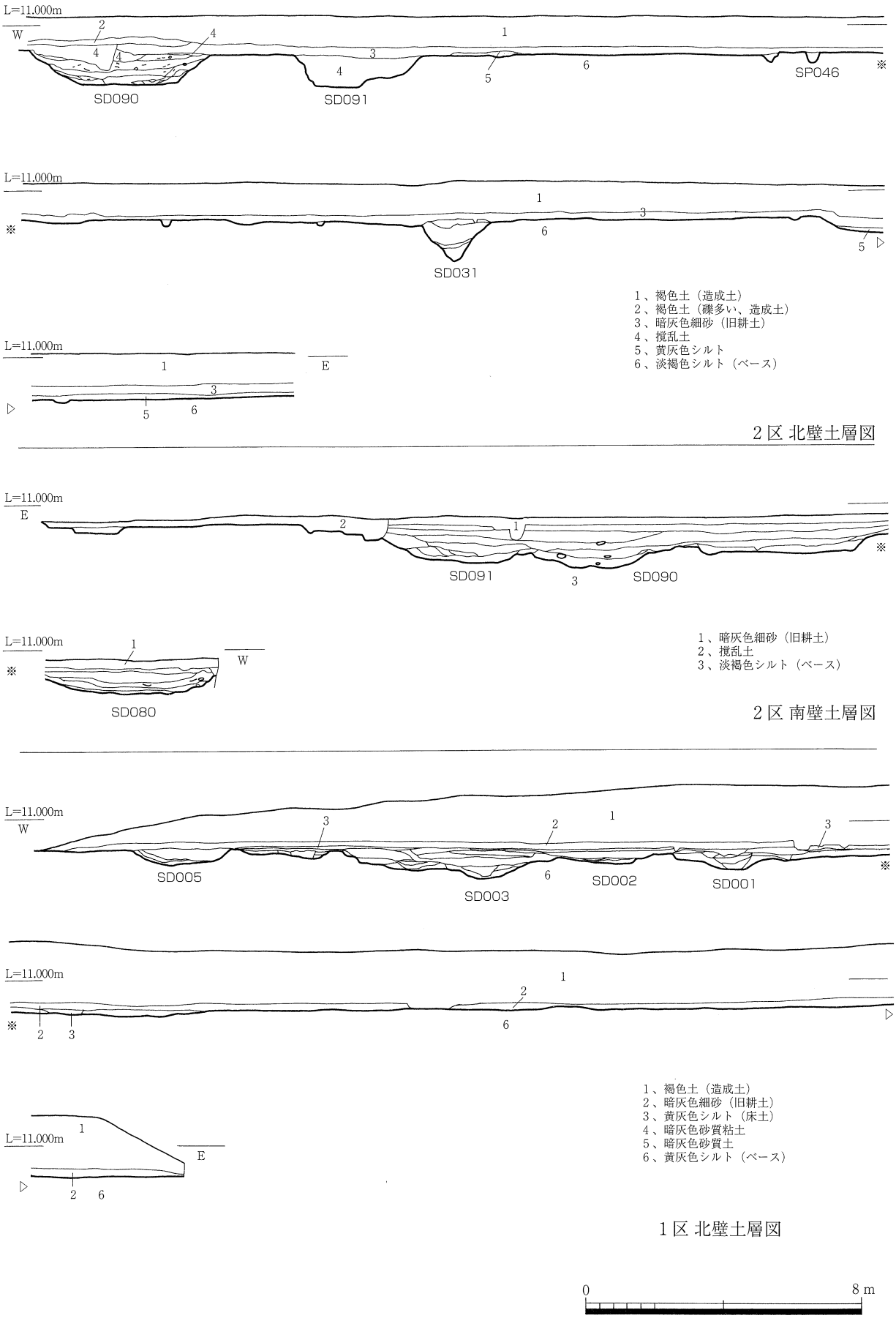


Fig003. 調査区壁面土層図（S＝1/160）

Fig004. 中の池遺跡8次調査全体平面図（S＝1/200）

V．検出遺構

検出遺構の概要（Fig004）

調査区の立地は第2・3・6・7次調査に囲まれた部分にあたり、北西部において第1次調査調査区と、北東隅において1981年に行われた2次調査の調査区と、南部において第5・6・7次調査調査区と接する。調査区中央を第7次調査の調査区が横断する。

検出遺構は溝20、土坑39、柵列2、住居址1、近世以降の野井戸8、落ちこみ1、ピット多数である。このうち溝については、これまでの調査の結果等から環濠と認定できるものを環濠として報告し、集落内を東西・南北

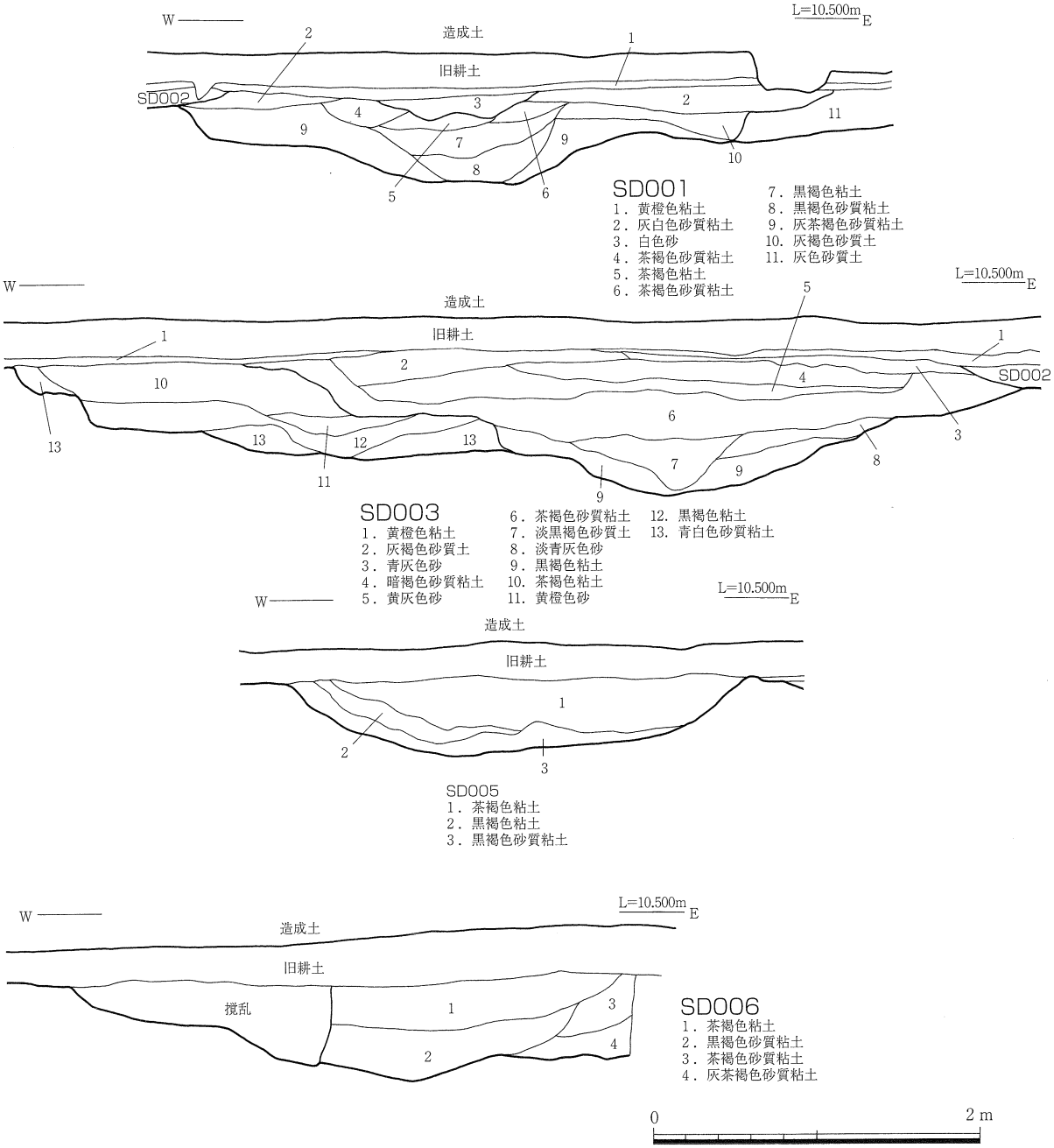


Fig005．SD001、003、005、006北壁土層断面図（S＝1/40）

に走る小規模な溝を区画溝として、正確不明の溝や中世の溝などをその他の溝としてそれぞれ報告する。

環濠

環濠は合計8本を検出した。

SD001（Fig005）

1区東側E・F12・13区に位置する溝。幅240cm、最深部深さ55cm前後を測り、SD002に切られる。最上層に灰白色砂質粘土（2層）、白色砂（3層）の層が存在するが、2001年に行われた第9次調査においてこの層が独立した古墳時代の溝であることが判明した。

埋土は上層から茶褐色砂質粘土、黒褐色粘土、黒褐色砂質粘土が堆積し、肩口には灰褐色砂質土、灰茶褐色砂質粘土が堆積する。埋土を観察する限り掘り直しの痕跡がうかがえる。

SD003（Fig005）

1区東側、E・F14・15区に位置する溝。幅300cm前後、深さ80cm前後を測る。埋土の観察からは最低一度の大きな掘り直しが観察できる。掘り直し後の埋土は上層に灰褐色砂質土、暗褐色砂質粘土、黄灰色砂が堆積、中層に茶褐色砂質粘土、淡黒褐色砂質土、下層に淡青灰色砂が堆積、掘り直し前の埋土は、上層に茶褐色粘土、以下下層に向って黄橙色砂、黒褐色粘土、青白色砂質粘土が堆積する。第2次調査SD8102と同一の溝と考えられる。

SD005（Fig005）

E・F17・18区で検出した溝。幅約290cm、最深部深さ48cmを測る。調査区を南西から北東へ横切る形で存在する。断面形態はなだらかな「U」字形を呈し、底部のレベルは標高9.6mでほぼフラットである。埋土は上層から茶褐色粘土、黒褐色粘土、黒褐色砂質粘土で、黒褐色粘土は集落内側に分布する。第2次調査SD8101と同一の溝である。

SD006（Fig005）

1区西端、E・F18・19区で検出した溝。幅約200cm、最深部深さ60cmを測る。調査区を南西から北東へ緩やかに斜行して横切る。撹乱を受けており、正確な形状・層位は不明であるが、断面形態はなだらかな「U」形を呈すると考えられる。底部のレベルは標高9.5mで、北端と南端の間に20cm程度の高低差を持ち、南側へ傾斜する。埋土は上層より茶褐色粘土と黒褐色砂質粘土からなる。第2次調査SD8105と同一の溝と考えられる。

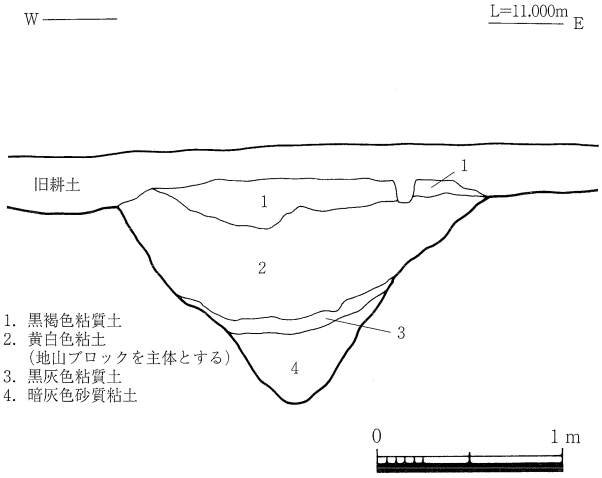


Fig006．SD031北壁土層断面図（S＝1/40）

SD031（Fig006）

2区北半を大きく弧状に横切る溝。幅94～184cm、深さ95～120cm、検出長約26mを測る。断面形態は比較的鋭角な「V」字形を呈し、底部より50cm前後上がった肩部にわずかに段を有する。埋土は下層に暗灰色砂質粘土が堆積、その上層に8～10cm程度の厚さで黒灰色粘土が堆積する。これらの上層には厚さ約60～70cmにわたり遺構のベース土のブロックと考えられる黄白色粘土ブロックで構成される土が堆積し、最上層には黒褐色粘質土が堆積する。黄灰色粘土ブロックを主体とする黒色土は人為的に投入された土と考えられるが、断面観察からはこの層は環濠

内側から投入されたと考えられる。また、最上層に黒褐色粘質土が堆積することから埋没後も浅い窪みとして残存していた事が考えられる。

溝底部のレベルは標高9.0m前後にあたり、西端と東端で30cm程度のレベル差を持って緩やかに東へと傾斜する。

SD080（Fig007）

2区南西隅I・J43・44区に位置する溝。一部のみの調査のため詳細は不明である。断面観察からSD090、091と同時期に存在する溝と考えられる。埋土は最下層に10cm前後の暗灰色砂が存在し、その上に暗灰色砂質粘土が厚さ10cm前後堆積する。さらにその上層には土器、礫、炭化物を多く含む暗褐色土が堆積し、それを黒褐色砂質粘土が覆う。この黒褐色砂質粘土はSD090、091全体を覆い、少なくとも最終埋没段階は090、091より後になると考えられる。

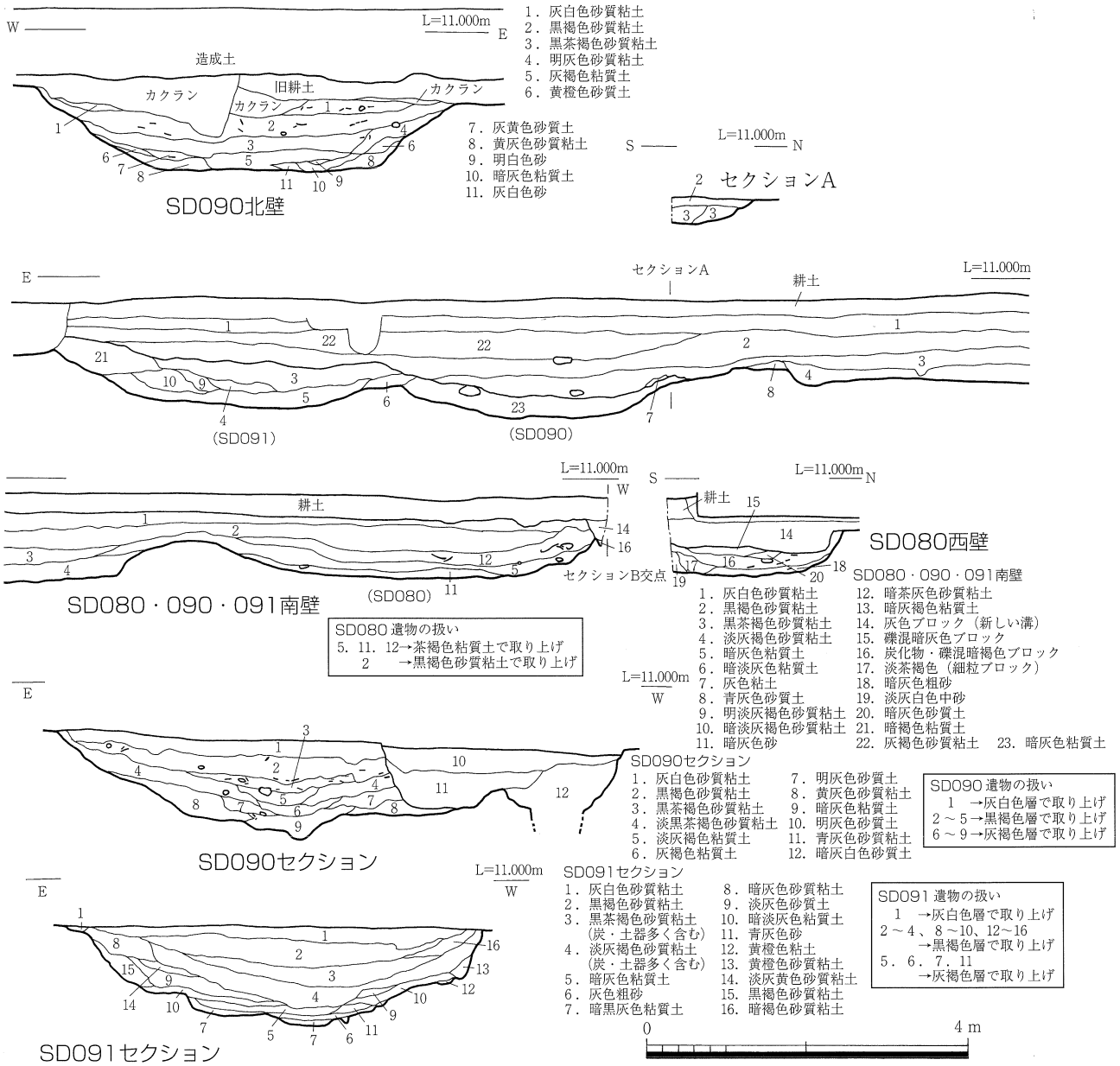


Fig007．SD080、090、091土層断面図（S＝1/80）

SD090（Fig007）

調査区西側F～L38～40区に位置する溝。大半が7次調査区の範囲にあたる。幅250～505cm、深さ約70～107cm前後を計る。SD080・091と調査区南端において合流する。断面形態は緩やかな逆台形を呈し、南端部は掘り直しに起因すると考えられる起伏が存在する。埋土は、上層に攪拌を受け遺物と礫を大量に含む灰白色砂質粘土と黒褐色砂質粘土が、下層には灰褐色粘質土や黄褐色砂質土、灰黄色粘質土、明白色砂、暗灰色粘質土、灰白色砂が複雑に存在する。底部付近にはラミナも見られ、わずかな流水があったものと考えられるが、底部レベルはほぼフラットで、流水方向は不明である。遺物はFig007に記したとおり、上層より灰白色層、黒褐色層、灰褐色層の単位で取り上げを行った。

SD091（Fig007）

調査区西側G38～M37・38・39区に位置する溝。幅310～480cm、深さ約60～120cmを測る。北端G38区付近でSD031と接するが、第一次調査区の範囲に重なっており、切り合いについては確認できなかった。また、SD090の項で述べたとおり、南端付近でSD090と接し、下層部分ではSD090を切る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、底部各所に段を有する。埋土は上層に攪拌を受け遺物と礫を大量に含む黒褐色砂質粘土が、中層には暗灰褐色砂質粘土、明淡灰褐色砂質粘土が環濠内側より流れ込む状態で堆積、下層には暗灰色粘質土が堆積する。底部のレベルは若干北側が低くなるものの、ほぼフラットで流水の方向等は不明である。遺物はFig007に記したとおり、上層より灰白色層、黒褐色層、灰褐色層の単位で取り上げを行った。

区画溝

集落内部に東西方向、南北方向に存在する多数の溝を区画溝として扱う。いずれも検出長4～10mと短いもので、埋土内に流水痕跡のあるものは見られない。

SD020（Fig008）

調査区東側E25区～H26区に位置する。検出長850cm、幅20～76cm、深さ7～15cmを測る。底部形態は緩やかな「V」字形や浅い皿型など不定形で、起伏に富む。埋土は黒茶褐色砂質粘土の単一層で、炭化物を少量含む。

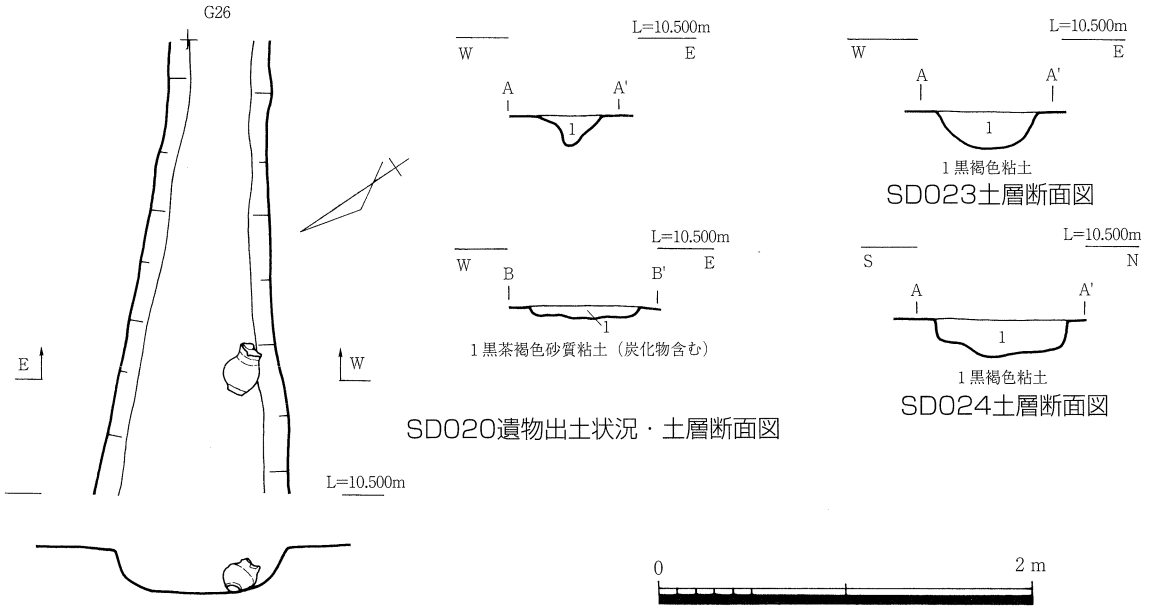


Fig008．SD020、023、024遺物出土状況・土層断面図（S＝1/40）

南側G26区付近から小型壷がほぼ完形で出土した。

SD023（Fig008）

調査区東側E・F28区に位置する溝。検出長520cm、幅18～56cm、深さ8～20cmを測る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、底部の起伏は少ない。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

SD024（Fig008）

調査区東側F29、G28区に位置する溝。検出長816cm、幅24～80cm、深さ2～20cmを測り、断面形態は緩やかな箱型を呈する。北端はSD031と20cm程の間隔を残す。底部は南端で高低差10cm程度の段を有する。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

SD027

調査区南東部H26区に位置する溝。SD024の延長上に位置し、検出長144cm、幅16～24cm、深さ6cm前後を測る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、底部の起伏は少ない。

SD035（Fig009）

調査区中央付近G30、H31区に位置する溝。検出長440cm、幅32～80cm、深さ6～10cmを測る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、埋土は黒褐色粘土の単一層である。

SD067（Fig009）

調査区南側N34区に位置する溝。大半は調査区外である。検出長192cm、幅36～40cm、深さ20cm前後を測る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、埋土は黒灰白色砂質粘土の単一層である。

その他の溝

SD002（Fig010）

1区東側、E・F12～14区に位置する溝。幅140cm、深さ30～40cmを測り、調査区を南西から北西へと斜行して横切る。SD001、003を切る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、埋土は上層から灰褐色粘土、青灰色砂質粘土、青灰色砂、黄褐色砂礫が堆積する。埋土は環濠埋土とは明らかに異なり、須恵器が出土している事などから古墳時代の溝と考えられる。

SD033（Fig011）

調査区南側H28区に位置する溝。SK032に切られる。検出長400cm、幅28～72cm、深さ12～20cmを測る。断面形態は緩やかな「U」形を呈し、底部の起伏は少ない。埋土は明茶褐色土の単一層である。

SD039（Fig010）

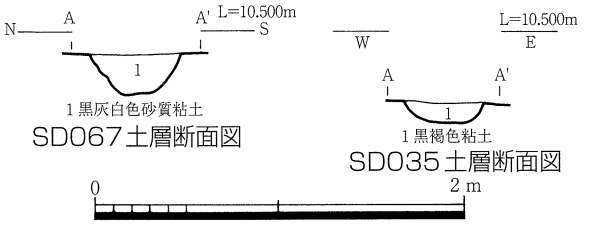
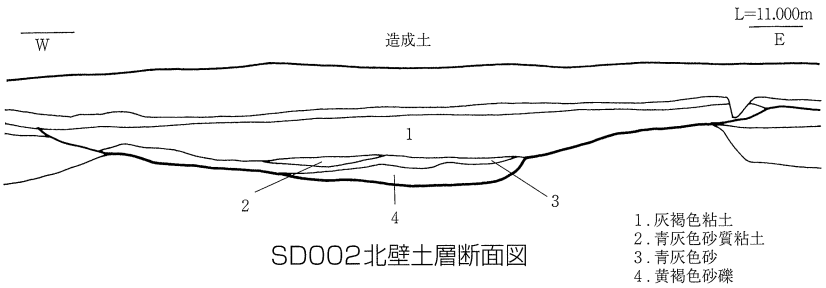


Fig009．SD035、067土層断面図（S＝1/40）



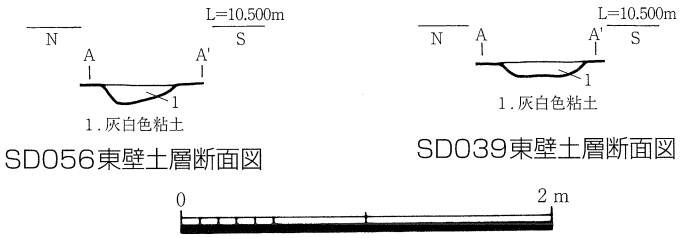


Fig010．SD002、039、056壁面土層断面図（S＝1/40）

2区南半、I・J29・30区に位置する溝。検出長560cm、幅44cm前後、深さ8cm前後を測る。埋土は灰白色粘土を主体とし、暗褐色粘土を主体とする弥生時代の遺構とは一見して埋土が異なる。現状の条里地割と方位が一致する事から、後述するSD056と同様条里関連の溝と考えられる。

遺物は弥生土器の砕片やサヌカイト剥片が出土しているのみであるが、SD056から土師器釜が出土している事から、中世の遺構と考えられる。

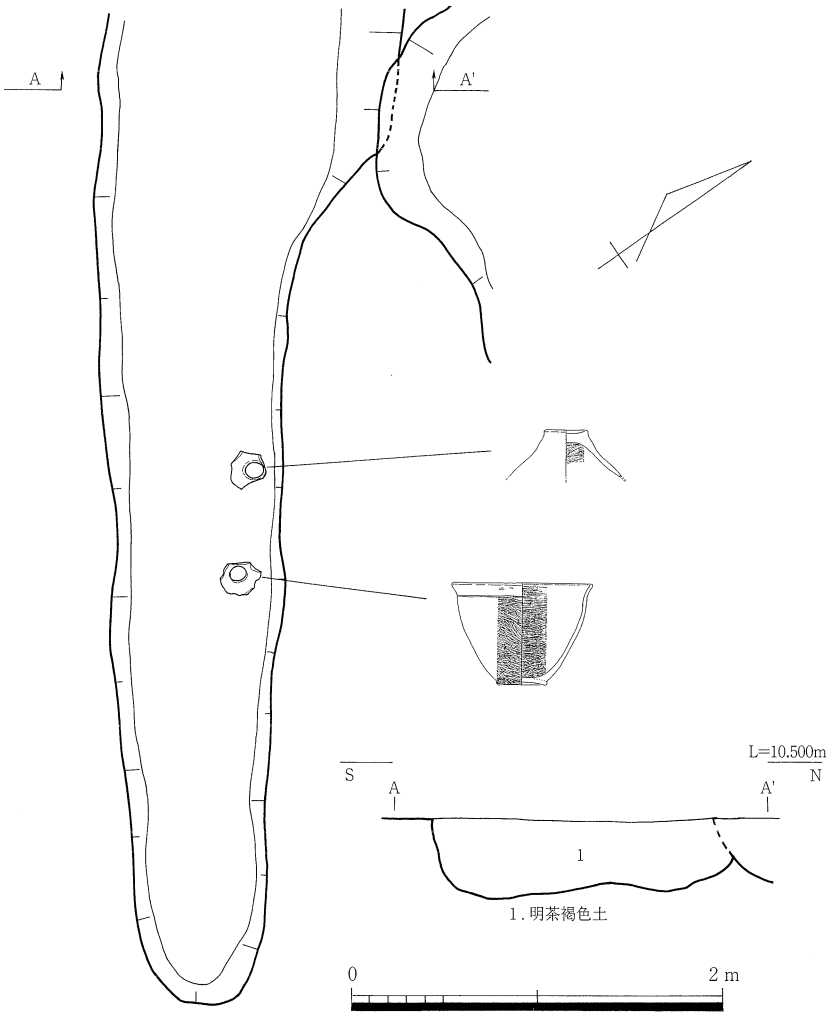


Fig011. SD033遺物出土状況、土層断面図（S＝1/40）

SD056（Fig010）

2区南半、H～K31～35に位置する溝。検出長16m、幅40cm前後、深さ9cm前後を測る。埋土は灰白色粘土を主体とし、SD039同様弥生時代の遺構とは埋土が異なる。方位からSD039同様条里関連の溝と考えられる。SD039との心々間の距離は295cmを測り、ほぼ10尺に相当する。

埋土内から土師器釜の砕片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

SD081

2区西端、I～K42・43区に位置する。SD080を切り、近世の野井戸に切られる。大半が調査区外のため詳細は不明であるが、灰褐色の埋土の状況等より中世の条里関連の溝と考えられる。

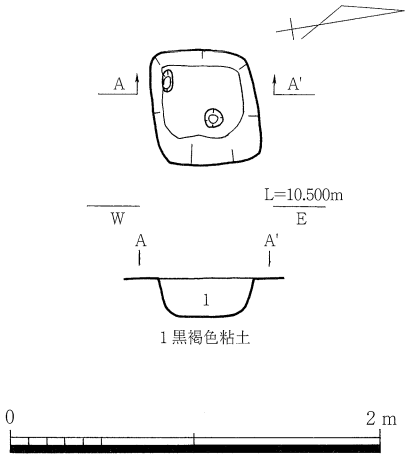
土坑

SK018（Fig012）

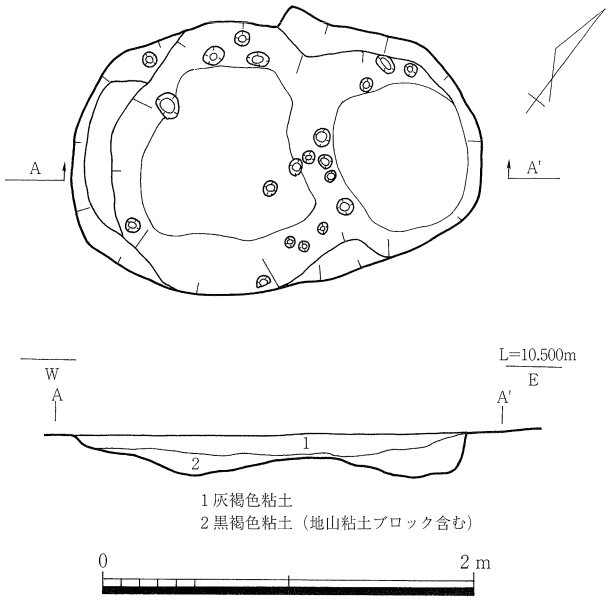
2区東半、G25・26区に位置する土坑。1辺56cm程度の隅丸方形を呈し、深さ20cm前後を測る。断面形態は箱形を呈し、埋土は黒褐色粘土の単一層で、遺構底部に若干の起伏がある。

SK025（Fig012）

2区北側E29区、SD031の際に位置する土坑。長軸220cm、短軸160cm、深さ12～22cmを測り、底部は起伏に富む。埋土は上層が灰白色粘土、下層は地山ブロックを含む黒灰色粘土である。遺構底部には径5cm前後の杭跡が多数存在するが、規則性は認められず、性格については不明である。



SK018平面・土層断面・遺物出土状況（S=1/40）



SK025平面・土層断面・遺物出土状況（S=1/40）

SK032平面・土層断面・遺物出土状況（S=1/20）

Fig012．SK018、025、032平面・土層断面・遺物出土状況図

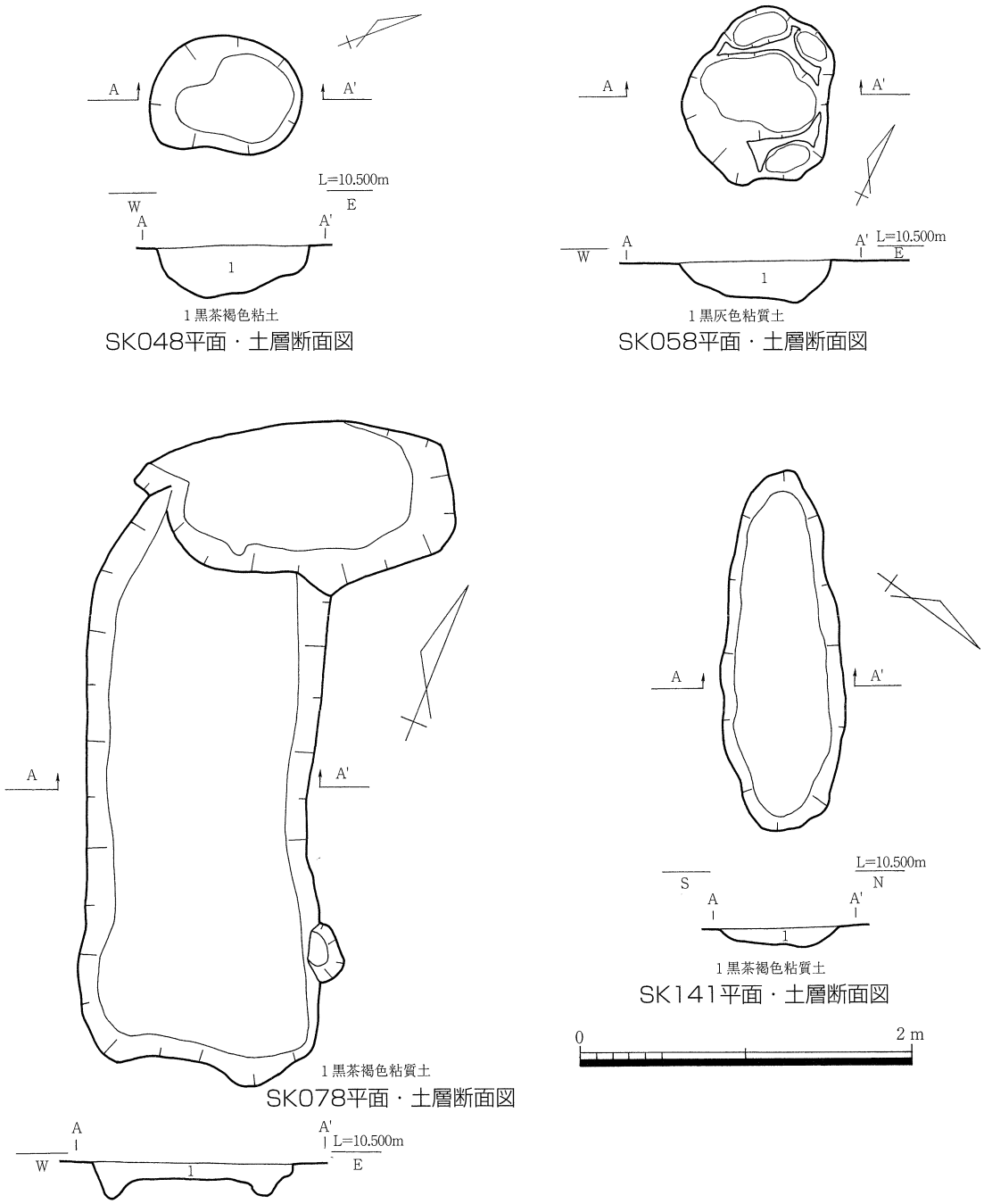


Fig013．SK048、058、078、141平面・断面図（S＝1/40）

SK032（Fig012）

2区東半、H27・28に位置する土坑。SD033を切る。長軸259cm、短軸125cm、深さ20cm前後の不整形な楕円形を呈する。埋土は黒褐色粘土の単一層で、底部はフラットである。埋土内から多量の土器と1点の獣骨が出土した。遺物の配置に規則性はみられず、また土器の完形率も低い。

SK048（Fig013）

2区北半G33・34区に位置する土坑。長軸96cm、短軸64cm、深さ18～30cmのややいびつな楕円形を呈し、底部は若干の起伏を有する。埋土は黒茶褐色粘土の単一層である。SD031の内側に位置し、SD031とは40cmの隔

たりがある。削平を受ける以前は切り合いを有していたと考えられる。

SK058（Fig013）

2区南端M35・36に位置する土坑。形90cm前後の不整円形を呈し、深さ25cm前後を測る。埋土は黒灰色粘質土の単一層で、底部は起伏に富む。

SK078（Fig013）

2区中央部K・L34区に位置する土坑。長軸352cm、短軸132cm、深さ8～22cmを測る。平面形態若干隅丸の長方形を呈し、底部は起伏を有する。埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。一見木棺墓のようにも見えるが、側板・小口板の痕跡はなく、多量の土器片が出土している事などから土坑と考えられる。

SK141（Fig013）

2区南半K41区に位置する土坑。長軸216cm、短軸68cm、深さ12cm程度を測り、平面形態長楕円形を呈する。断面形態いびつな「U」字形を呈し、底部にはやや起伏を有する。埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。

柵列

SA050（Fig014）

2区北端、SD031の内側に存在する柵列。a～kの11基のピットから成る。各ピット間の距離は、a－b間、b－c間j－k間のそれぞれの距離は順に、196cm、196cm、172cm、164cm、220cm、200cm、208cm、200cm、188cm、216cmを測る。ピットの直径は14～40cmとややばらつきがあり、深さも7～40cmの幅を持つ。ほとんどのピットは柱痕跡を持たないが、aにのみ残っていた柱痕跡からは、径20cm程度の柱の存在が推定できる。埋土は黒灰色粘質土を主体とする。柵列とSD031北岸との間の距離は、おおよそ216～248cmを測り、削平の状況等より検討すると当初は溝肩と柵列の間には100～150cm程度の間隔を有していたものと考えられる。

SA052（Fig014）

2区西半、SD091の内側に存在する柵列。a～eの5基のピットからなるが、調査後柵列の可能性のあるピットf、gを抽出した。ピットeはSD031の内側に存在し、ピットaの間にもう1基のピットが存在したと考えられるが、調査段階では認識できなかった。各ピット間の距離はa－b間、b－c間、c－d間、d－f間、f－g間で、順に156cm、124cm、160cm、200cm、176cmを測る。ピットの直径は12～28cm、深さは12～24cmを測る。柱痕跡などは見られず、埋土は黒灰色粘質土が主体である。柵列とSD091東岸との距離は120cm前後を計り、削平の状況等より検討すると、当初は溝肩と柵列の間には50cm程度の間隔を有していたものと考えられる。

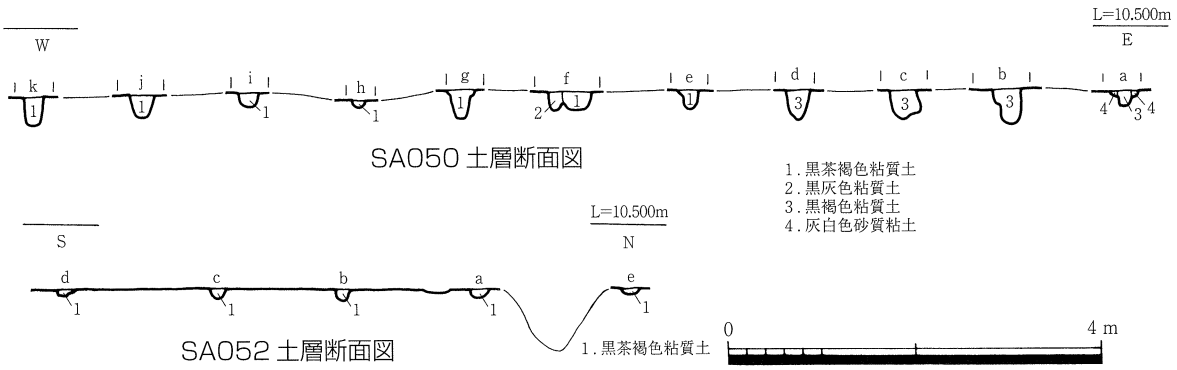


Fig014．SA050、052土層断面図（S＝1/80）

住居址

SH051（Fig015）

2区中央付近、H～C36・37区に位置する住居址。削平のため掘り方は不明であるが、5基の主柱穴、1基の中央土坑、4基の副柱穴を持つ「松菊里型」住居址である。主柱穴配置は、やや不整形な五角形を呈し、a‐b間e‐a間のそれぞれの距離は、256cm、240cm、248cm、288cm、240cmを測る。主柱穴は径32～48cm、深さ16～48cmを測り、ややばらつきがある。埋土はいずれも黒灰色粘質土を主体とし、柱痕跡は見られない。副柱穴は柱間172cmを計り、いずれも中央土坑端から23cm前後の間隔を有する。直径はいずれも30cm、深さは16～34cmを測る。ピットfに残る柱痕跡からは径8cm前後の柱の存在が想定できる。中央土坑は長軸90cm、短軸60cm、深さ20cmを測り、断面形態は緩やかな「U」字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土の単一層で、埋土内より台石が出土した。

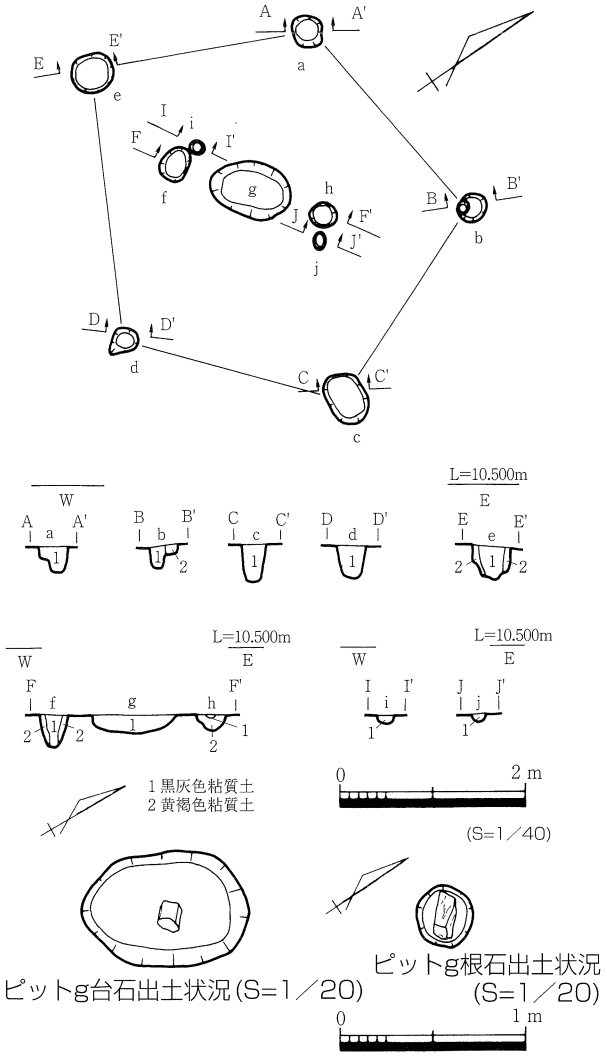


Fig015. SH051平面・土層断面図

ピット

120基以上を検出した。その分布は2区東側と2区西側、SD091東側付近に集中する。西側の一群は、大きさ、深さともにやや規模が大きく、底部に根石を持つものが多くみられる。残念ながら建物に復元できるものはほとんど見られず、その性格については不明な部分が多い。

紙面の都合上全てについて解説することはできないので、特徴的な12遺構について解説する。

SP046（Fig016）

2区北端、F34区に位置するピット。平面形態はほぼ円形を呈し、深さ24cmを測る。断面形態「U」字形を呈し、埋土は黒茶褐色粘土の単一層である。埋土内より弥生土器壷、甕が出土した。

SP085（Fig016）

2区西側、J36区に位置するピット。長軸35cm、短軸28cm前後の楕円形を呈する。深さ8cmを測り、埋土は黒褐色砂質粘土の単一層である。ピット底部付近には河原石と石斧が安置されていた。石斧は使用不可能なほど刃部を欠損しており、根石として転用されたと考えられる。

SP092（Fig016）

2区西側、K36区に位置するピット。径38cm前後を測り、平面形態円形を呈する。深さ20cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と考えられる河原石3個を検出した。

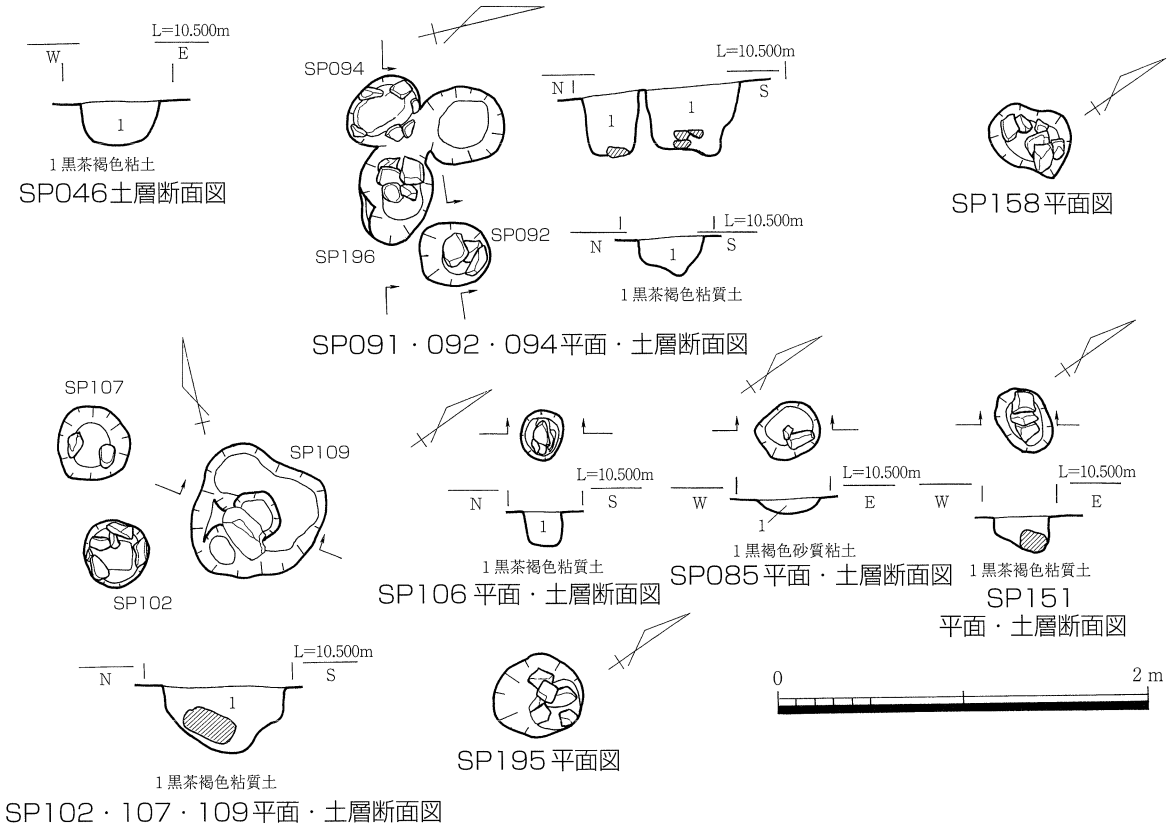


Fig016. ピット平面・土層断面図（S＝1/40）

SP094（Fig016）

2区西側、K36区に位置するピット。長軸42cm、短軸35cm前後の楕円形を呈する。深さ34cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と、根固めの石と考えられる河原石6個を検出した。河原石の配置は柱痕跡を取り巻くように配置される。

SP102（Fig016）

2区西側、J36区に位置するピット。径34cm前後を測り、平面形態は円形を呈する。深さ20cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と、根固めの石と考えられる河原石7個を検出した。河原石の配置は、平坦な大型の石を底部に置き、その他の右は柱痕跡を取り巻くように配置する。

SP106（Fig016）

2区西側、J36区に位置するピット。径26cm前後を測り、平面形態は円形を呈する。深さ18cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と考えられる河原石が存在し、埋土内からはほぼ1個体分の弥生土器甕が出土した。甕は破片を丁寧に重ねて埋設しており、柱等の抜取の後意図的に埋設されたものと考える。

SP107（Fig016）

2区西側、J36区に位置するピット。径40cm前後を測り、平面形態は円形を呈する。深さ22cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と考えられる河原石2個を検出した。

SP109（Fig016）

2区西側、J36区に位置するピット。長軸77cm、短軸67cm前後を測るやや不整形な円形を呈する。深さ35cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と考えられる河原石1個を検出した。

SP151（Fig016）

2区西側、K37区に位置するピット。長軸44cm、短軸30cmのやや不整形な楕円形を呈し、深さ16cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土の単一層で、ピット底部には根石と考えられる河原石7個を検出した。

SP158（Fig016）

2区西側、K37区に位置するピット。長軸36cm、短軸24cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土の単一層で、ピット底部には根石と考えられる河原石3個を検出した。

SP195（Fig016）

2区西側、L37区に位置するピット。径46cm前後を測る円形を呈する。埋土は黒茶褐色粘質土の単一層で、ピット底部には根石と考えられる河原石3個を検出した。

SP196（Fig016）

2区西側、K36区に位置するピット。SP094を切る。長軸55cm、短軸40cm前後の楕円形を呈する。深さ33cmを測り、埋土は黒茶褐色粘質土の単一層である。ピット底部には根石と考えられる河原石5個を検出した。

VI. 出土遺物

環濠出土の遺物

SD001出土遺物（Fig017）

壷（3）、甕（1・2・4）が出土した。

壷

3は壷口縁部である。ラッパ形に開く形態を有し、口縁部直下には2条の削り出し突帯を有する。内外面ナデ調整であるが、ヘラミガキの存在も考えられる。

甕

1は直線状の体部を有し、貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。口縁部直下にはヘラ描きによる7条の沈線を有し、口唇部には刻み目を有する。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を行う。2はやや厚手で如意状の口縁部を持つものである。口唇部に刻み目、口縁直下にヘラ描きの2条沈線を有する。内外面丁寧なナデ調整を行う。4は底部である。復元底径2.6cmを測り、やや上げ底状を呈する。内外面ナデ調整を行い、見込み部には指頭圧痕を有する。

2・4は最下層からの出土である。

SD003出土遺物（Fig017、018）

甕（5）、石器（11～13）が出土した。

甕

底部が出土した。復元底径7.0cmを測り、平坦な平底を有する。内外面ナデ調整を行う。

石器

11は打製石包丁である。刃部の一部を折損する。残存長10.6cm、幅6.0cm、最大厚1.2cmを測る。両極打法で成形の後左右に抉りを入れ、背面の一部に自然面を残す。材質はサヌカイトである。12は打製石鏃である。半分を折損し、残存長6.9cm、幅5.0cm、最大厚0.9cmを測る。素材剥片獲得後、両極打法で調整する。材質はサヌカイトである。13は楔形石器である。長さ3.0cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmを測り、上端に打痕、下端に階段状の微細剥離を有する。材質はサヌカイトである。

SD005出土遺物（Fig017、018）

壷（8～10）、甕（6・7）、石器（14）が出土した。

壷

8は体部の破片である。肩部の破片と考えられ、ヘラ描きの有軸木葉文を有する。外面ヘラミガキを施すと考えられるが表面劣化のため不明瞭である。9は復元底径7.6cmを測る底部である。胎土は黄褐色を呈し、2mm程度のやや大きめの砂礫を含む。10は復元底径7.4cmを測る底部である。底部と体部の境界は鋭く立ち上がり、内面ナデ調整、外面粗いヘラミガキを施す。

甕

6は復元底径6.0cmを測る底部である。表面劣化のため調整等は不明である。7は如意状を呈する口縁部である。口唇部には刻み目を有し、外面ナデ調整を行う。内面調整は表面劣化のため不明である。

石器

14は楔形石器である。長軸5.5cm、短軸5.3cm、最大厚1.2cmを測る。下端に階段状の微細剥離、上端に打痕を

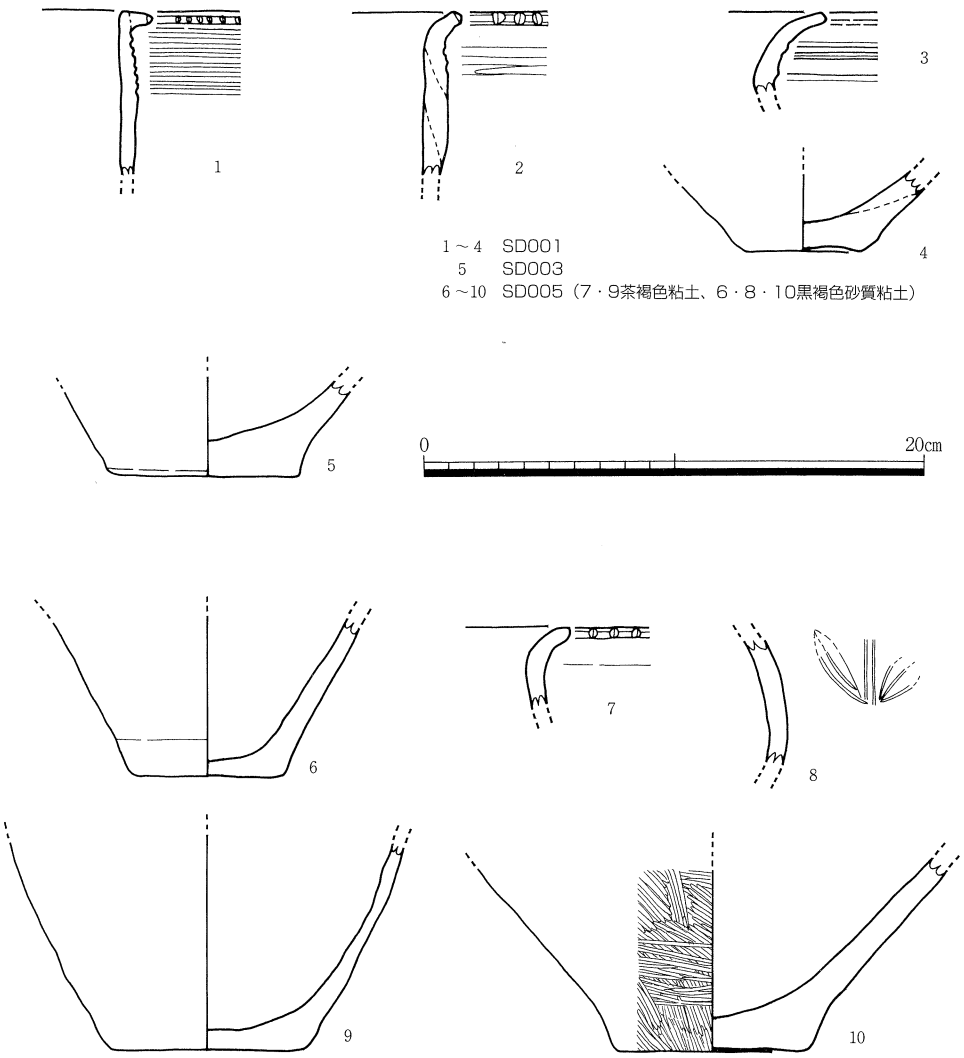


Fig017. SD001、003、005出土遺物（1）（S＝1/3）

有する。側縁部は両端とも折損する。材質はサヌカイトである。

7・9が茶褐色粘土、6・8・10・14が黒褐色砂質粘土から出土した。

SD006出土遺物（Fig019～021）

茶褐色粘土出土遺物（Fig019～021）

壷（1～3）、甕（4・5・8～15）、壷蓋（6・7）、石器（29・30）が出土した。

壷

1は復元底径5.5cmを測る底部である。底部外面はユビオサエによりやや深く窪み、外面にヘラミガキを施す。2は復元底径7.6cmを測る底部である。底部外面はユビオサエにより窪む。内面は表面劣化のため不明であるが、外面にはナデ調整を施す。3は復元底径6.6cmを測り、底部と体部の境界付近は稜を持たず滑らかである。内外面表面劣化のため調整等不明である。

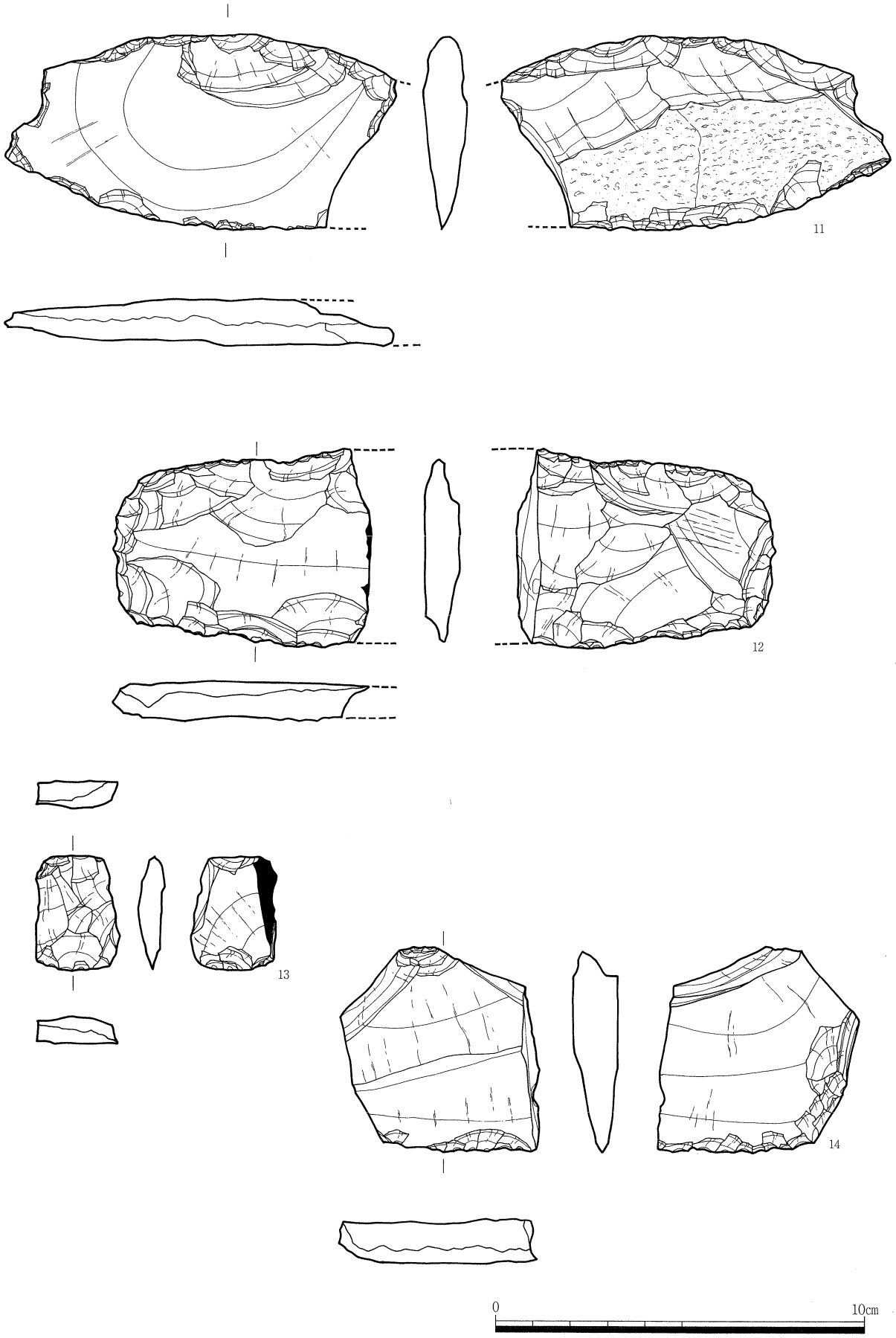


Fig018．SD003、005出土遺物（2）（S＝2/3）

甕

4は復元底径6.2cmを測る底部片である。平坦な底部と直立気味の体部を有する。内外面表面劣化のため調整不明であるが、底部外面にはユビオサエの痕跡を有する。5は復元底径6.8cmを測る底部片である。やや窪んだ底部と緩やかに開く体部を有する。内面は剥離する。表面劣化のため調整等は不明である。8は口縁部の砕片である。如意状の口縁部を有し、口縁部直下に最低6条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整は不明である。9は復元口径21.6cmを測る。直線的な体部と、貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を有する。器壁は3～4mmと薄く、表面劣化のため調整は不明である。10は復元口径22.2cmを測る。直線的な体部と、断面三角形の貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。内面ナデの後縦方向の粗いヘラミガキを施し、外面調整は表面劣化のため不明である。11は復元口径23.4cmを測る。湾曲する体部と斜め上方に開く口縁部を有する。口唇部には刻み目を持ち、口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。12は復元口径22.2cmを測る。直線的な体部と、断面三角形の貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。器壁は3mm程度と薄い。表面劣化のため内外面調整不明である。13は復元口径22.0cm、器高29.0cmを測る。直線的な体部と貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有し、底部には焼成後穿孔を有する。表面劣化のため内外面調整は不明であるが、内面には掌圧痕を有する。胎土は赤褐色を呈し、2～3mmの長石粒を多量に含む。14は復元口径22.7cmを測る。直線的な体部と逆「L」字状の口縁部を有する。表面劣化のため内外面調整は不明である。15は復元口径24.6cmを測る。やや湾曲する体部と、貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有し、口唇部には刻み目を有する。内面調整は表面劣化のため不明であるが、外面は縦方向のハケ調整を施す。

壷蓋

6は口径7.6cm、器高3.3cmを測る。滑らかに開く皿形の体部を有し、天井部外面にてづくねによる1対の突起を有する。天井部には焼成前穿孔を有する。内面調整は表面劣化のため不明であるが、外面はユビオサエの後ナデ調整を行う。7は復元口径11.8cm、器高3.7cmを測り、ラッパ形に開く皿形を呈する。口縁部に2つの穿孔を有する。外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面には比較的密なヘラミガキを施す。

石器

29は磨製石包丁である。欠損が多く遺存状況は良好でない。残存長8.7cm、最大幅4.6cm、厚さ0.7cmを測る。紐部は両面穿孔で、内孔径0.8cmの孔が2.0cmの間隔で穿たれる。材質は泥岩と考えられる。30はサヌカイト製剥片である。長軸9.1cm、短軸8.4cm、最大厚2.1cmを測る。側縁部に両面から剥離が行われ、一部自然面も残す。大きさ、形状等から板状の素材剥片と考えられる。

黒褐色砂質粘土出土遺物（Fig020）

壷（25）、甕（16～18・20～24・26～28）、鉢（19）が出土した。

壷

25は復元底径8.0cmを測る底部である。平坦な底部を持ち、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内面ナデ調整、外面表面劣化のため調整不明である。

甕

16は湾曲する体部と、断面三角形の貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。口縁部直下外面には6条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。17は直線的な体部と断面三角形の貼り付けによる逆「L」字状の口縁を有する。口縁部直下外面には6条のヘラ描き沈線を有する。内面ナデ調整、外面は劣化のため調整不明である。18は「く」字状に外反する口縁部を有し、口縁部直下外面には2条のヘラ描き沈線を

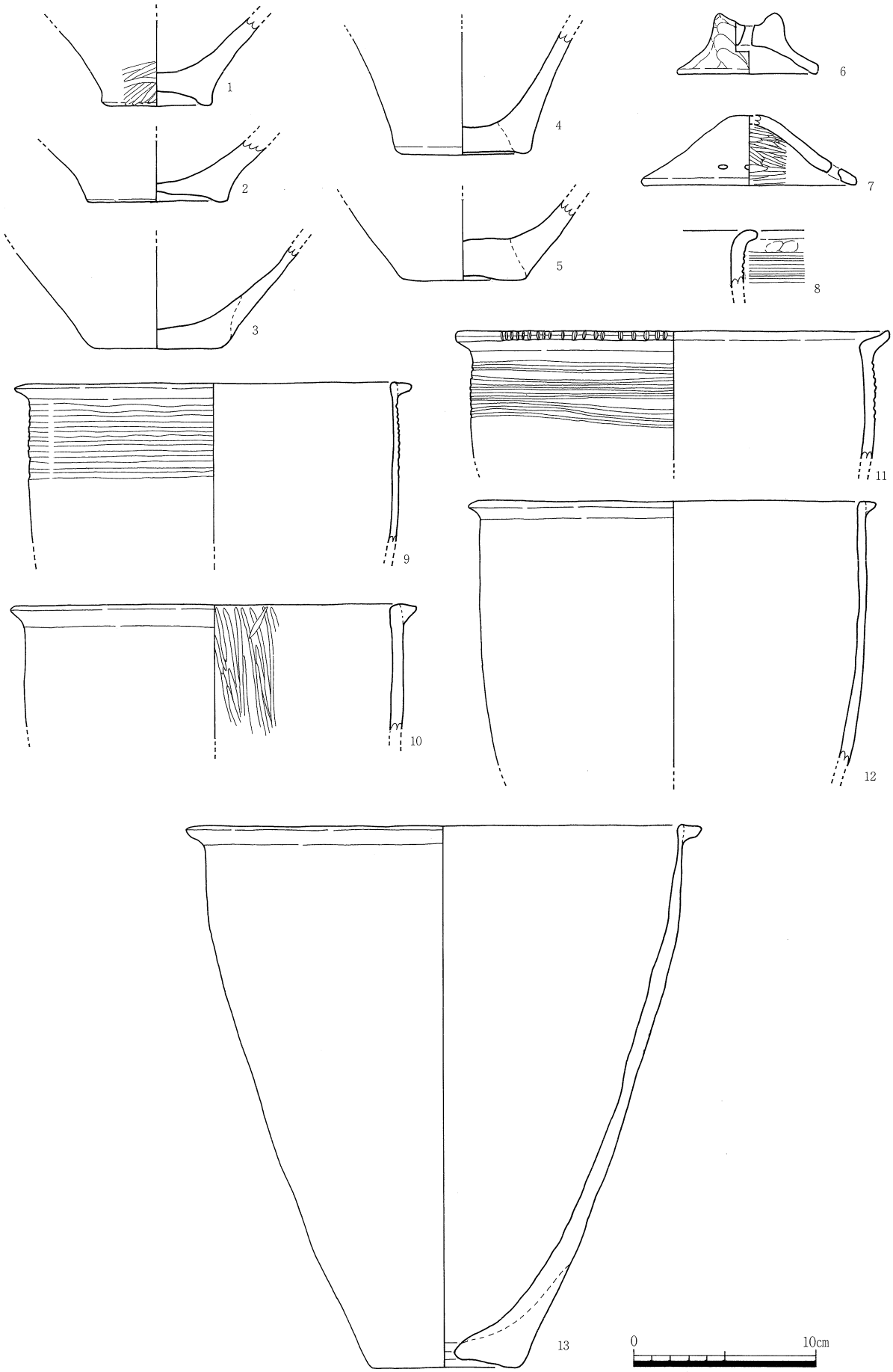


Fig019．SD006出土遺物（1）（S＝1/3）（1～13茶褐色粘土）

有する。表面劣化のため調整等は不明である。20は直線的な体部と断面三角形の貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。口縁直下外面には6条と4条のヘラ描き沈線が2段にわたって施される。器壁は2mm程度と薄い。表面劣化のため、内外面調整は不明である。21は緩やかに屈曲する如意状口縁を有する。口縁直下外面には3条のヘラ描き沈線を有する。器壁は3mm程度と薄い。表面劣化のため内外面調整は不明である。22は弱く「く」字状に屈曲する如意状口縁と、直線的な体部を有する。内外面ナデ調整を行う。23は22に比して強く屈曲する

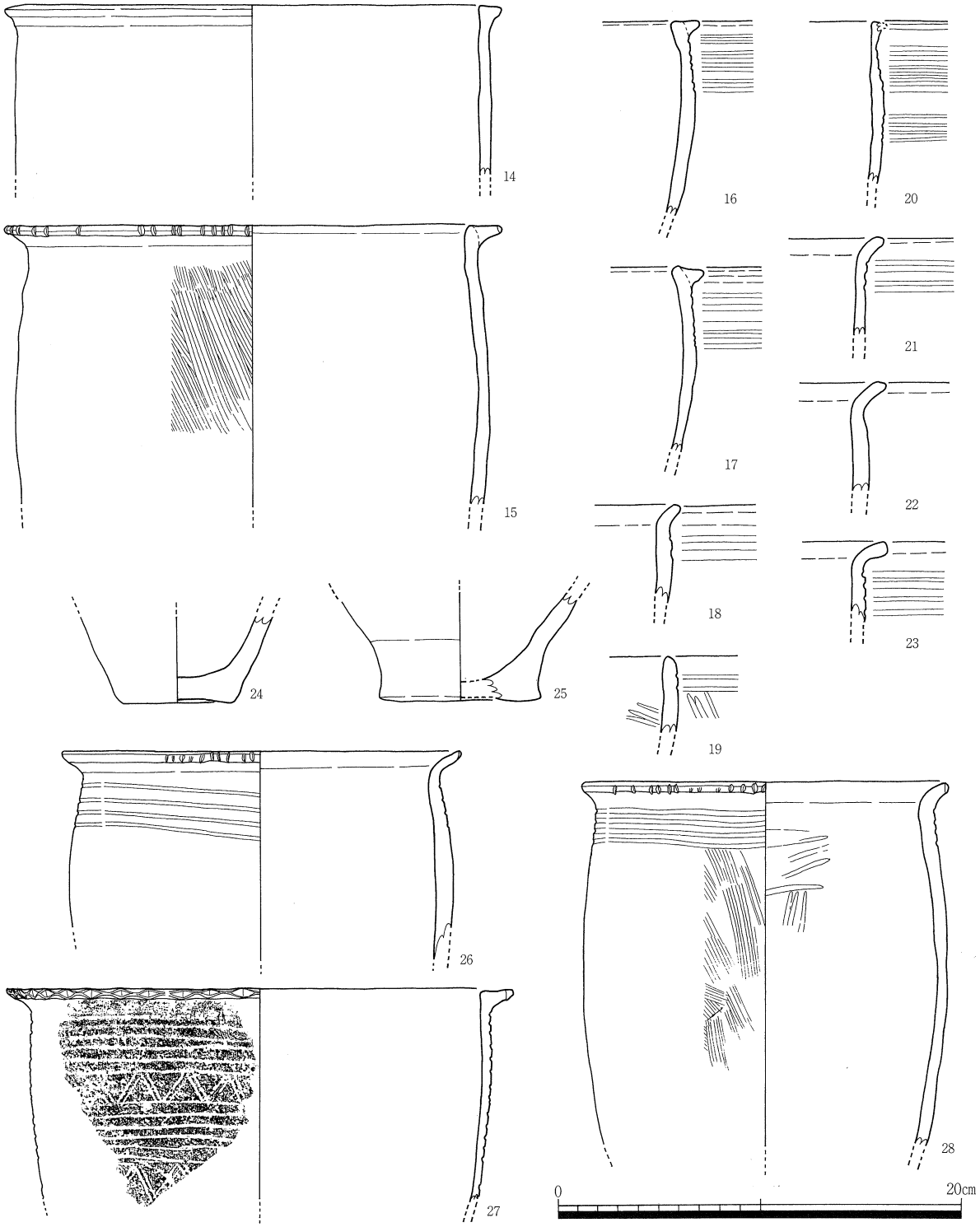


Fig020．SD006出土遺物（2）（S＝1/3）（14・15茶褐色粘土、16～28黒褐色砂質粘土）

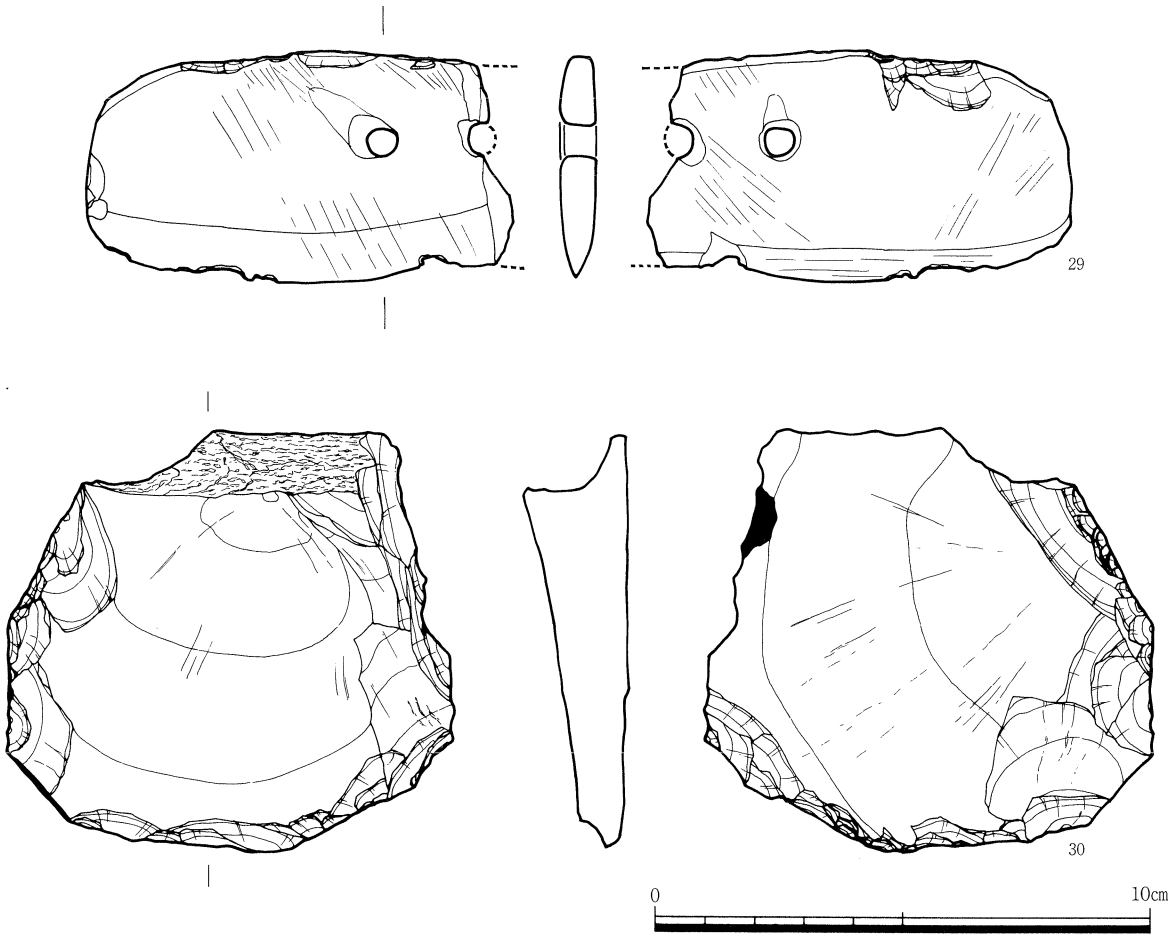


Fig021．SD006出土遺物（3）（S＝2/3）（29・30茶褐色粘土）

如意状口縁を有する。口縁部直下外面には最低4条のヘラ描き沈線を有する。口唇部はやや肥厚し面を持つ。内外面表面劣化のため調整不明である。24は復元底径5.6cmを測る底部である。平坦な底部と、わずかに屈曲する体部を有する。内外面表面劣化のため調整不明である。26は復元口径19.4cmを測る。緩やかに張る体部と、滑らかに屈曲する如意状口縁を有する。口縁直下外面には4条のヘラ描き沈線と、口唇部には刻み目をそれぞれ有する。口縁部は器厚3mm程度であるが、胴部付近は9mm程度に肥厚する。内外面表面剥離のため調整等は不明である。27は復元口径24.0cmを測り、わずかに湾曲する体部と断面三角形の逆「L」字状口縁を有する。口唇部には幅の広い波状の刻み目を施し、体部上半外面には6条沈線と山形文を交互に2段以上施す。口縁部付近にナデ調整の痕跡が残るが、それ以外は表面劣化のため不明である。28は復元口径17.8cmを測り、緩やかに湾曲する体部と、如意状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を、口縁直下外面には4条のヘラ描き沈線を有する。内面上半には縦方向と横方向のヘラミガキを、外面には縦方向のハケ調整を施す。

鉢

直交する口縁を持つもので、鉢と断定するのは難しい。内外面ヘラミガキを施し、口縁直下外面には2条のヘラ描き沈線を有する。

SD031出土遺物（Fig022～024）

黒褐色粘質土出土遺物（Fig022、024）

壷（1、2、6）、甕（3～5）、石器（28）が出土した。

壷

1は外反する口縁部の砕片である。器厚は5mm前後を測り、口唇部に面を有する。表面劣化のため内外面調整は不明である。2はやや強く屈曲する口縁部の砕片である。表面劣化のため内外面調整は不明である。6は復元底径9.6cmを測る底部である。平坦な底部と緩やかに開く体部を有する。内面表面劣化のため調整不明、外面はいくつかの単位に別れた比較的密なヘラミガキを有する。胎土中に砂粒は少なく、比較的精良である。

甕

3は復元底径7.0cmを測る底部である。平坦な底部と直線的な体部を有し、内外面表面劣化のため調整は不明である。胎土中には径2mm前後の砂粒を多く含む。4は復元底径6.0cmを測る底部である。3と同様平坦な底部と直線的な体部を有し、表面劣化のため調整等は不明である。胎土中には径2mm前後の砂粒を多く含む。5は復元口径17.9cmを測る。緩やかに湾曲する体部と如意状に屈曲する口縁部を有する。口縁直下外面には3条のヘラ描き沈線を、口唇部には刻み目を有する。内外面表面劣化のため調整は不明である。

石器

28は楔形石器である。残存幅4.4cm、長さ3.6cm、厚さ7mm前後を測る。上端に打痕、下端に階段状剥離を有し、両極からの打撃で成形されたことがわかる。材質はサヌカイトである。

黄白色粘土出土遺物（Fig022、024）

壷（7～9）、甕（10・11）、石器（29）が出土した。

壷

7は壷肩部の破片である。肩部上端には2条の沈線に挟まれた列点文を有する。内面をナデ調整、外面をヘラミガキする。胎土は白色を呈し、径2mm程度の長石粒を多く含む。8はやや窪んだ底部と直線的な体部を有する。復元底径6.5cmを測り、外面やや幅広のヘラミガキを施す。9は平坦な底部とややすぼまった後広く開く体部を有する。復元底径7.4cmを測り、表面劣化のため調整等は不明である。

甕

10は復元口径24.2cmを測り、如意状に外反する口縁部と、直線的な体部を有する。口縁部直下に2条のヘラ描沈線と、口唇部に刻み目を有する。内面は表面劣化のため調整不明であるが、体部外面を板状工具によりナデ調整する。11は平坦な底部と直線的な体部を有し、復元底径は7.4cmを測る。底部には焼成後の穿孔を有する。表面劣化のため調整は不明である。

石器

29は叩き石である。残存長7.0cm、最大幅6.4cmを測り、断面楕円径を呈する。全面にわずかに打痕を有し、使用による手擦れがみられる。先端部は使用時の打撃による剥離が複数みられる。材質は凝灰岩である。

暗灰色砂質粘土出土遺物（Fig022～024）

壷（21～23・25）、甕（12～20）、壷蓋（24）、石器（26、30、31）、焼土塊（27）が出土した。

壷

21は復元底径8.3cmを測る。平坦な底部とやや湾曲して開く体部を有する。22は復元底径6.2cmを測り、平坦な底部と湾曲して広く広がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明であるが、胎土は他に比してやや白い。23は頸部直下から胴部中央付近までが残存する。復元胴部最大径は34.2cmを測り、やや下膨れの形状を呈するものと推定される。内面上半にやや幅の広いヘラミガキを、外面全面に幅の狭いヘラミガキをそれぞれ密に施す。肩部には3条のヘラ描き沈線を有する。25は復元口径14.4cmを測り、やや直口気味に立ち上がる口縁部と、肥厚して丸く収める口縁端部を有する。内外面ヘラミガキが施されているものと考えられるが表面劣化のため詳細は不明である。

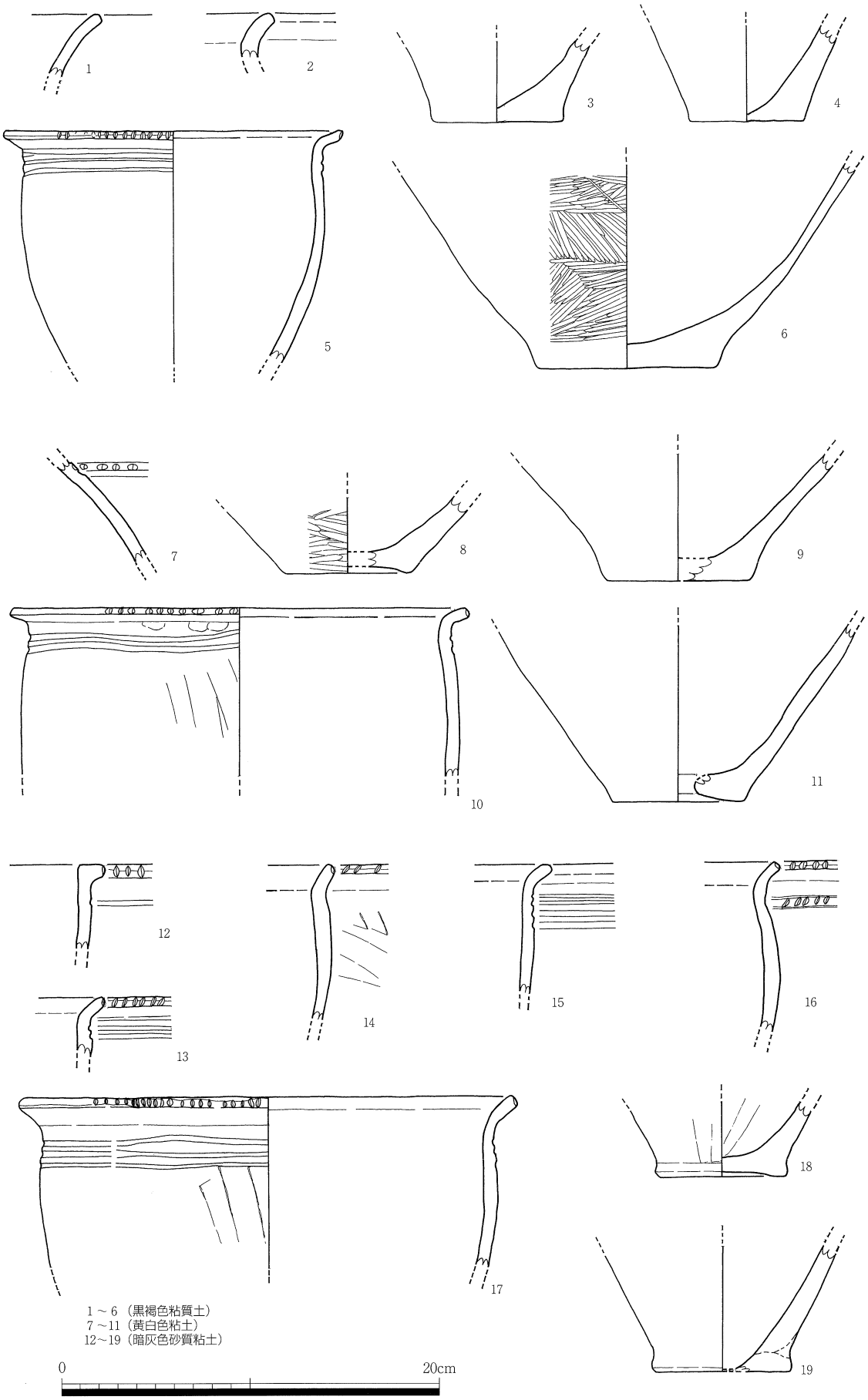


Fig022．SD031出土遺物（1）（S＝1/3）

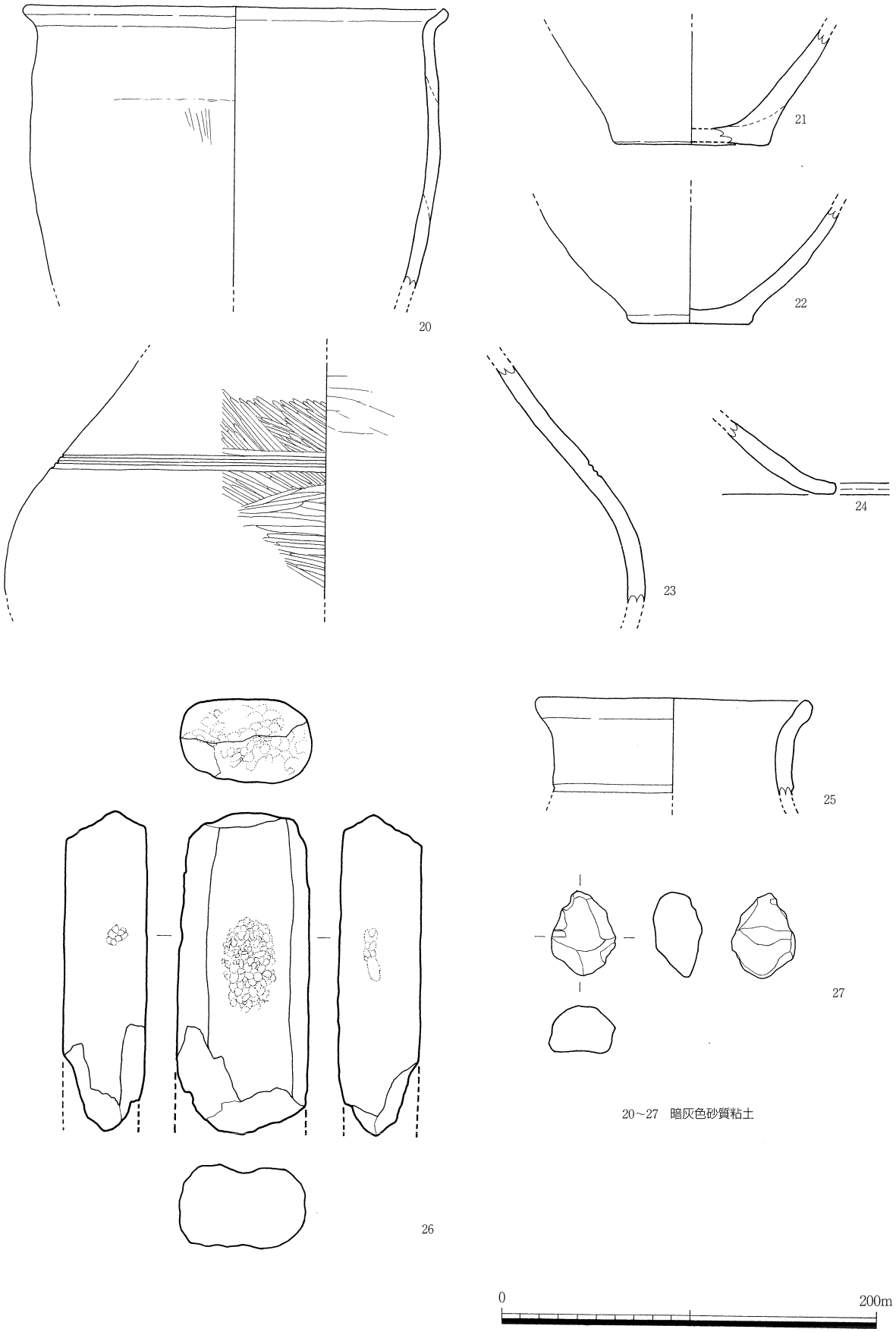
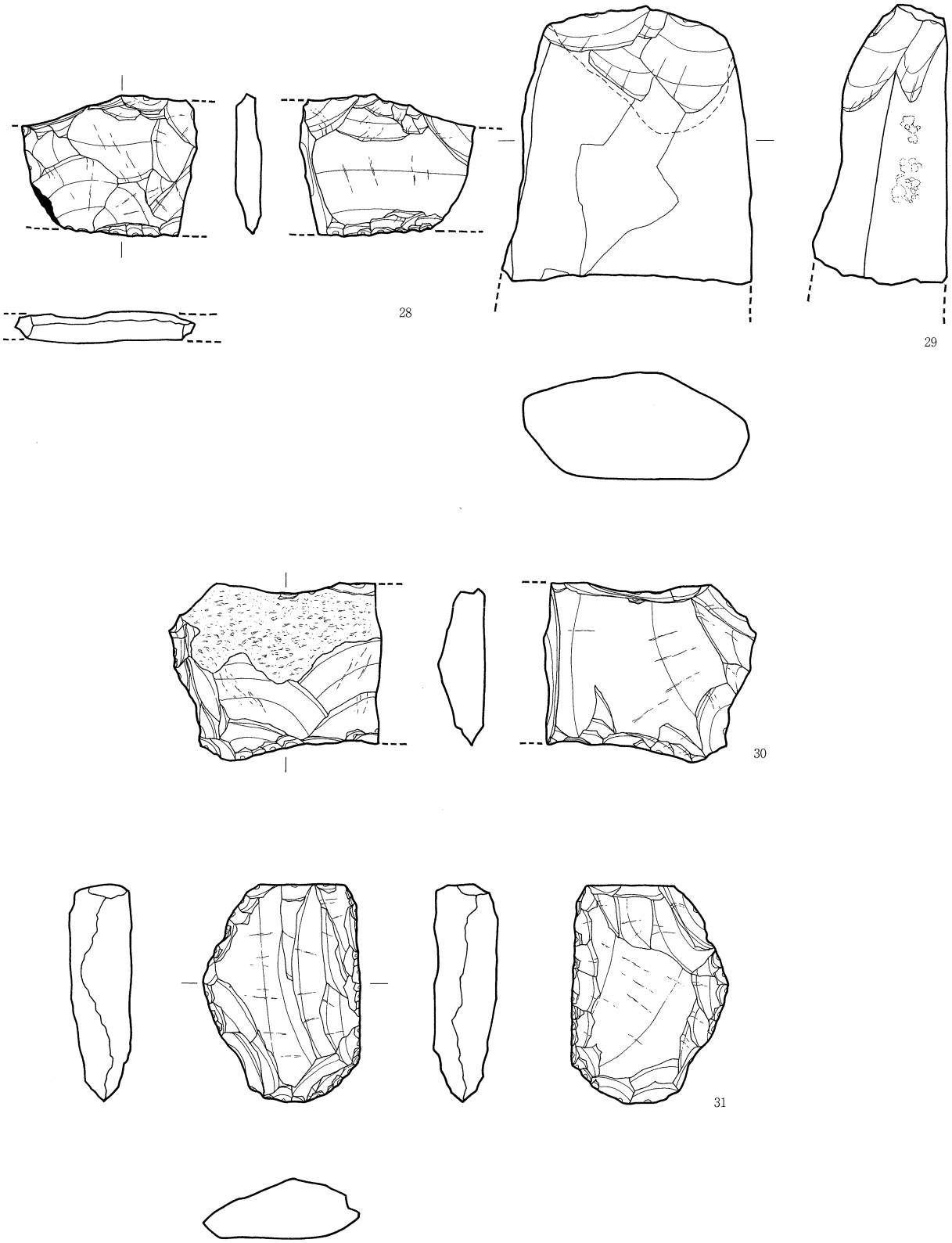


Fig023．SD031出土遺物（2）（S＝1/3）



28　黒褐色粘質土
29　黄白色粘土
30・31　暗灰色砂質粘土

0　10cm

Fig024．SD031出土遺物（3）（S＝2/3）

甕

12は逆「L」字状の口縁部を有する破片である。口縁部は厚手で、口唇部に刻み目を有する。口縁部直下には1条のヘラ描き沈線を有し、内外面ナデ調整を施す。13は如意状の口縁部を有し、口唇部に刻み目を施す。口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。14は屈曲の弱い如意状の口縁部を有し、口縁部直下がやや肥厚する。外面板状工具によるナデ調整、内面ナデ調整を行う。15はやや薄手で、丸く如意状に外反する口縁部を有する。口縁部直下に4条のヘラ描き沈線を有する。16は如意状に外反する口縁部とやや広く張る体部を有する。口唇部は面を持ち、刻み目を施す。口縁部直下に2条の沈線に挟まれた刺突文を有する。17は復元口径26.3cmを測り、如意状に緩やかに外反する口縁部を有し、口唇部に刻み目を施す。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施し、内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。18は底径7.0cmを測る。底部と体部の境界の稜は鋭く、底部外面はやや窪む。内面ナデ調整、外面縦方向の板状工具によるナデを施す。19は復元底径7.3cmを測り、平坦な底部と直線的に開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は明確である。20は復元口径22.6cmを測り、短く外反する如意状の口縁部と緩やかに湾曲する体部を有する。表面劣化のため調整の詳細は不明であるが、体部外面にわずかに縦方向のヘラミガキが残る。

壷蓋

24は鋭角に立ち上がる体部を有し、口縁端部には若干面を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

石器

26は石棒を窪み石に転用したものである。全長16.9cm、最大幅7.0cmを測り、下端を折損する。上端（基部側）には打痕を多く残し、中央部付近両面に連続した打撃による窪みを有する。また、両側縁部中央付近にも打痕が集中する部分がみられる。石材は片岩と考えられる。30は楔形石器である。最大長4.5cm、最大幅5.5cm、刃部幅4.7cmを測り、背面側には自然面を残す。刃部には階段状剥離を、上端には打撃による潰れを有する。石材はサヌカイトである。31は掻器である。最大長5.5cm、最大幅4.0cm、最大厚1.6cmを測り、刃部は上端の折損部を除きほぼ全周する。あるいは直刃の根刈具としての使用も考えられるが、現状では掻器としておく。石材はサヌカイトである。

焼土塊

27は最大長4.4cm、最大幅3.4cmを測り、てづくねで整形される。色長は淡橙色を呈し、2次焼成を受けている。

SD080出土遺物（Fig. 025、026）

茶褐色粘質土出土遺物

壷（3～5）、甕（1・2）、石器（9）が出土した。

壷

3は復元口径16.0cmを測り、水平方向へ強く屈曲する口縁部を有する。口縁端部は丸く収まり、内外面ナデ調整を行う。4・5はいずれも底部片である。4は平底で広く広がり、5はやや急に直線的に立ち上がる形態を有する。いずれも表面劣化のため調整等は不明である。

甕

1は復元口径18.2cmを測り、やや下側へ伸びる張り付けによる逆「L」字状の口縁部を呈し、口唇部には刻み目を施す。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。内面表面劣化のため調整不明、外面縦方向のハケ調整を施す。2は復元口径21.0cmを測り、如意状に強く屈曲する口縁部と緩やかに湾曲する体部を有する。口唇部には刻み目を、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内面調整不明だが、外面は縦方向のハケ調整を行う。

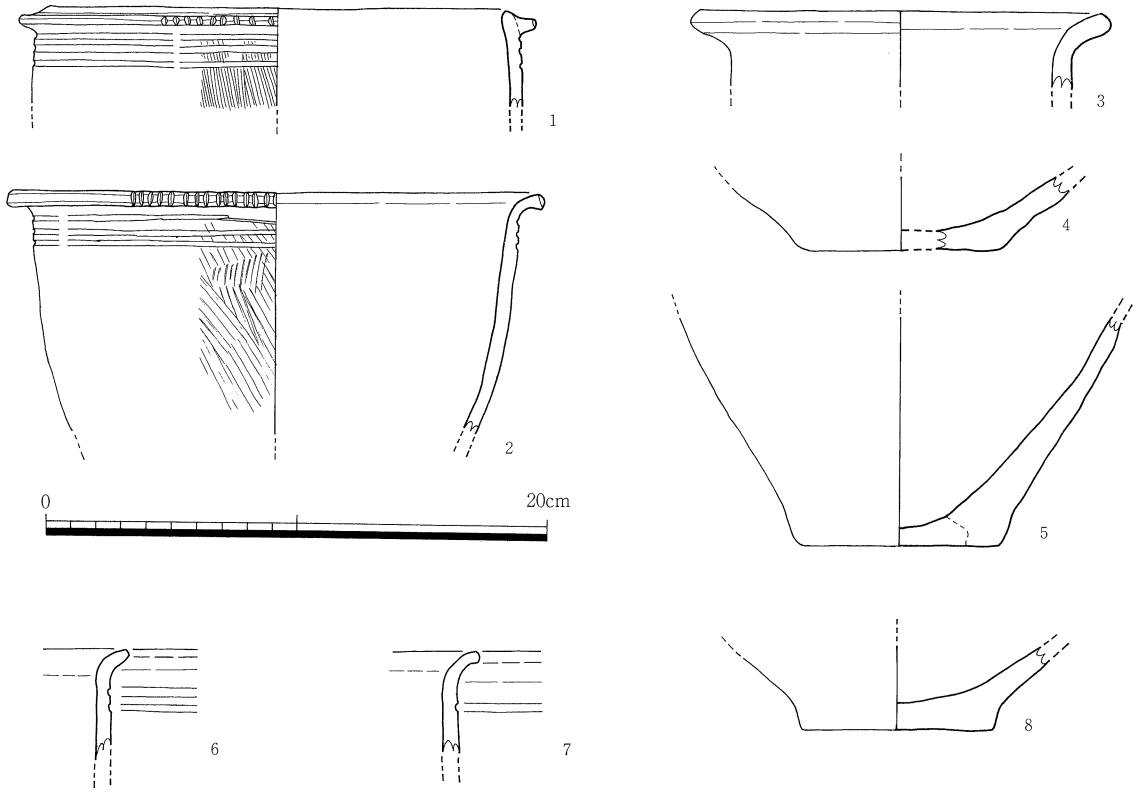


Fig025．SD080出土遺物（1）（S＝1/3）

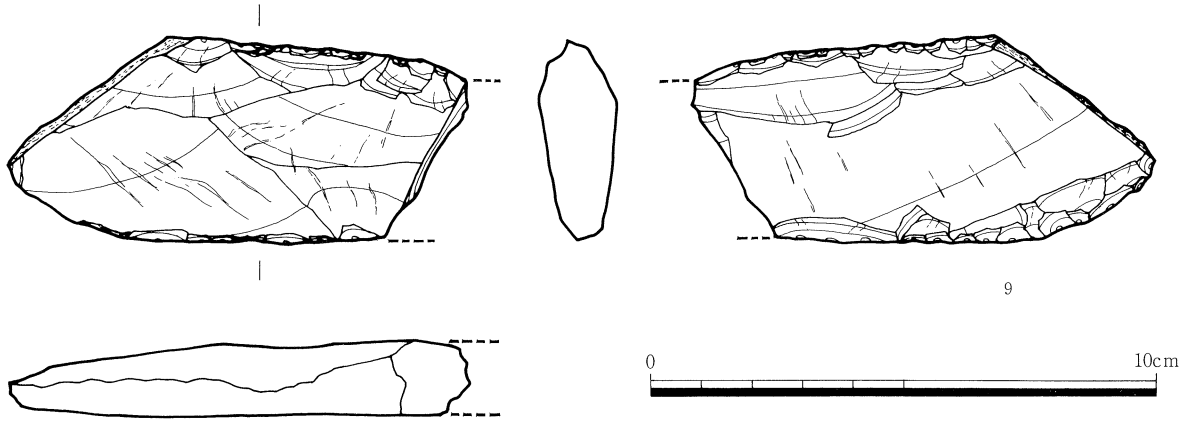


Fig026．SD080出土遺物（2）（S＝2/3）

石器

9は掻器である。短軸4.1cm、長軸9.2cmを測り、一部を折損する。上下端に微細な連続剥離を有し、上端部は打痕が見受けられる。側縁部には自然面も残り、石包丁の未成品である可能性も残る。材質はサヌカイトである。

黒褐色砂質粘土

壷（8）、甕（6・7）が出土した。

壷

8は復元底径7.4cmを測り、平坦な底部と強く開く体部を有する。底部と体部の境界の稜は明瞭である。表面劣化のため内面調整は不明であるが、外面には縦方向のヘラミガキがかすかに残る。

甕

6・7いずれも如意状を呈する口縁部の破片である。ともに直線的でやや薄手の体部を有し、口縁部直下に6は2条、7は1条のヘラ描き沈線を有する。ともに表面劣化のため調整等は不明である。

SD090出土遺物（Fig027～036）

灰白色層出土遺物（Fig027、028）

壷（2）、甕（1）、鉢（3）、石器（4～6）が出土した。

壷

2は復元口径27.4cmを測り、ラッパ状に広く広がる口縁部を有する。口縁部内面には4条の貼付突帯を持つ。口唇部は四角くおさまり、板状工具による刻み目を施す。表面劣化のため内外面調整は不明である。

甕

1は復元口径18.1cmを測り、如意状の口縁部を有する。口縁部はやや薄手で、刻み目等は施さない。口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内面調整は不明であるが、外面は縦方向のハケ調整を施す。

鉢

3は復元口径47.6cmを測る大型の鉢である。如意状に屈曲する口縁部を有し、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内面調整は不明であるが、外面は縦方向のハケ調整等を施す。

石器

4は凹石である。全長17.2cm、最大幅9.4cm、厚さ3.5cmを測る。表裏面、上下端面に打痕を有し、特に表面の打痕が著しい。打痕はランダムなものが多いが、詳細に観察すると溝状に抉れる部分が多数存在する。これらはいずれも強い衝撃によって形成されており、両極打法で石器を製作する際の台石として使用された可能性が高い。石材は溶結凝灰岩である。

5は掻器である。短軸4.5cm、長軸7.2cmを測る。両端を折損し、短軸は両側を剥離する。石包丁の未成品である可能性もある。石材はサヌカイトである。

6は打製石鍬と考えられる。短軸6.4cm、長軸9.6cmを測り、下端を折損する。側縁部よりの丁寧な打撃によってややバチ形を呈する。

黒褐色層出土遺物（Fig029～035）

壷（7～19）、ミニュチュア土器（20）、甕（21～35、38・39）、鉢（36・37）、土錘（40）石器（41～61）が出土した。

壷

7は復元口径13.3cmを測り、やや厚手のものである。口縁部の開きは緩やかで、頸部に1条のヘラ描き沈線を有する。口縁端部内面には2条の沈線状の窪みを有する。外面の沈線が多条になるかどうかについては判断できない。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面は密なヘラミガキを施す。8は復元口径12.6cmを測り、やや厚手のものである。口縁部の開きは緩やかで、頸部には1条の削り出し突帯を有する。内外面密なヘラミガキを施すが、内面のヘラミガキは表面劣化のため不明瞭である。9は復元口径16.4cmを測り、薄手で長く伸びる口縁部を有する。口縁部はやや広く広がり、頸部には貼り付けの指頭圧突帯を有する。内外面表面劣化が著しいが、わずかに横方向のヘラミガキが残る。10は復元口径15.8cmを測り、やや広く広がる口縁部と比較的直に立ち上がる頸部を有する。頸部には2条の刻み目突帯を貼り付け、内外面密なヘラミガキを施す。突帯は幅広の1重突帯を分割して2重突帯にし、突帯がはがれた部分の観察からは、外面ヘラミガキの前にハケ調整を施すこと、突帯貼り付け時に2条の割りつけ線を施すことがわかる。11は「く」字状に外反する口縁部を有する無頸壷であ

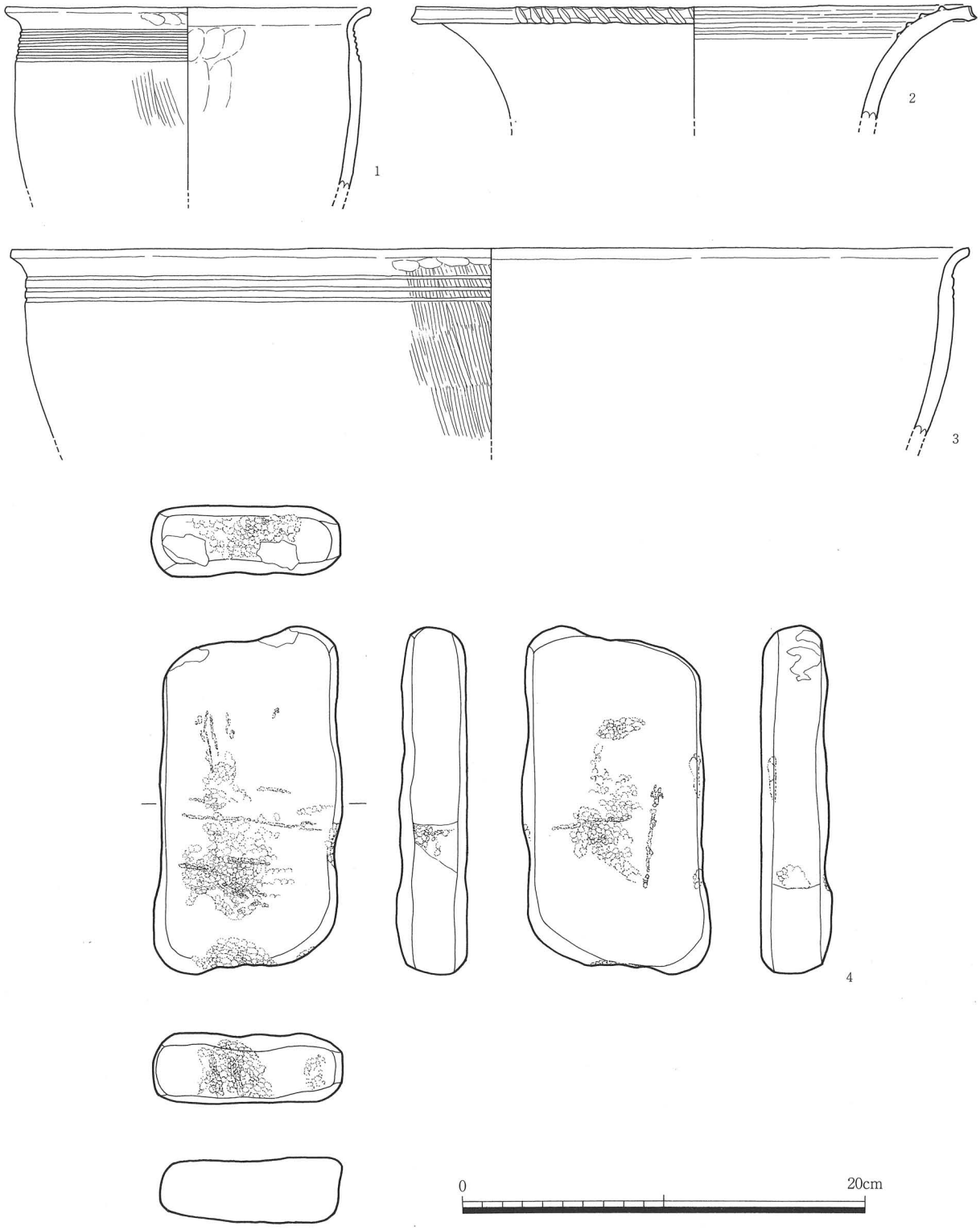


Fig027．SD090灰白色層出土遺物（1）（S＝1/3）

る。口縁端部は面を持ち、刻み目を有する。肩部上端には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため外面調整不明だが、内面ユビオサエの後ナデ調整を行う。12は水平に広く広がる口縁部の破片である。内外面ヘラミガキを行い、内面8条、外面6条のヘラ描き沈線を有する。口縁端部は面を持ち、1条の沈線を施す。13は内面に突帯を有する口縁部の破片である。2条の貼り付け突帯の直上にはそれぞれ刺突文を有する。表面劣化のため調

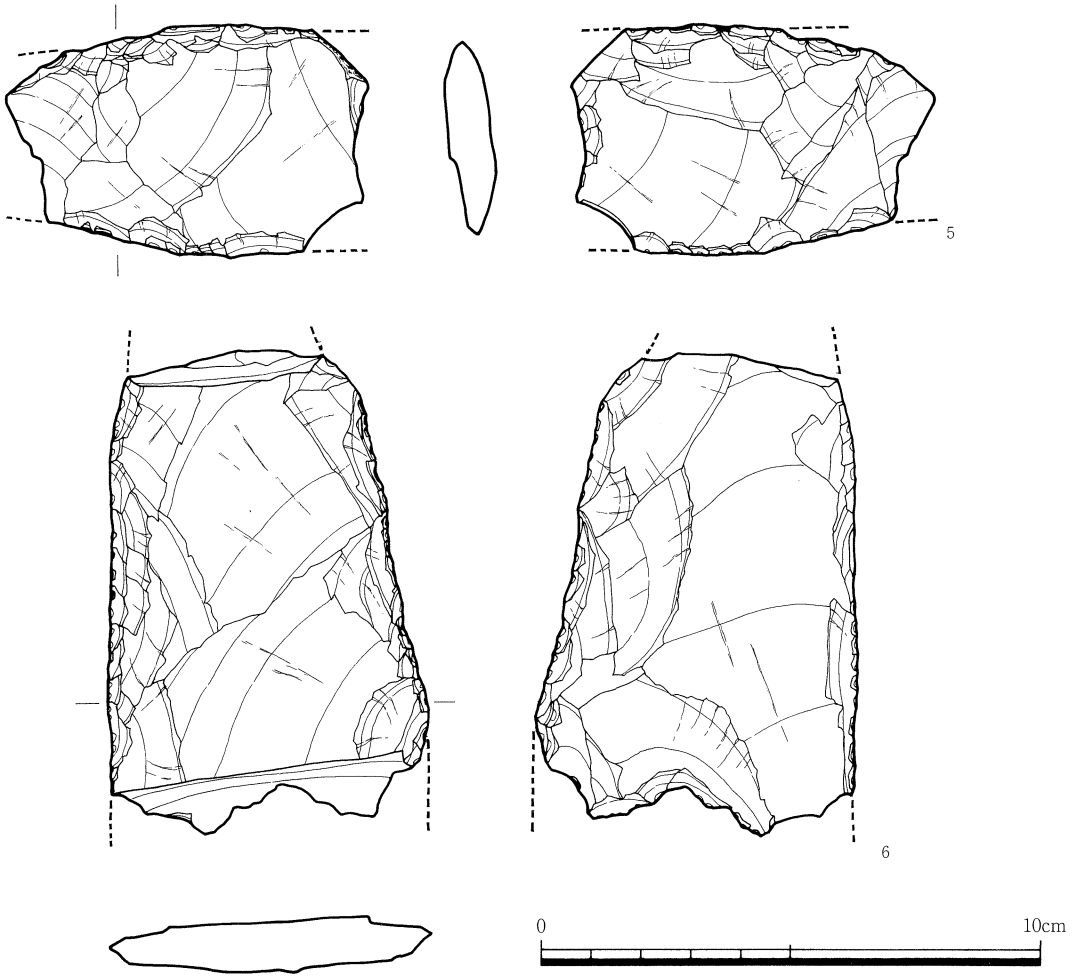


Fig028．SD090灰白色層出土遺物（2）（S＝2/3）

整等は不明であるが、わずかにヘラミガキの痕跡が残る。14は復元口径23.2cmを測る。やや広く広がる口縁部を有し、内面に2条の貼り付け突帯を有する。口縁端部には面を持ち、1条の沈線と刻み目を有する。頸部には最低5条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。15は復元口径20.2cmを測り、ラッパ状に広く広がる口縁部を有する。口縁端部には面を有し、頸部には最低4条のヘラ描き沈線を有する。16は復元底径9.0cmを測り、やや上げ底を呈する。外面目の細かいハケ調整の後ヘラミガキ、内面ヘラ状工具によるナデ調整を行い、底部外面にもヘラ状工具によるナデ調整を行う。17は底部復元径7.0cmを測り緩やかに湾曲する体部を有する。表面劣化のため内外面調整不明である。18は大型の壷である。底径18.8cmを測り、平坦な底部を有する。外面ヘラ状工具の痕跡が残るが、表面劣化のため調整等は不明である。19は胴部最大径11.0cmを測る小型の壷である。頸部以上を欠損するが、これについては人為的な打ち欠きが行われたものと考える。肩部に4条の沈線を有し、内面ナデ調整、外面ヘラミガキを施す。

ミニュチュア土器

底部径3.0cmを測り、てづくねで成形する壷のミニュチュアである。内外面には指頭圧痕が多量に残る。胎土は大型品と同様褐色で径2mm前後の長石粒を多量に含む。

甕

甕には如意状に外反する口縁部を有するものと、逆「L」字状の口縁部を有するものがあり、量的には前者が主体的である。また、逆「L」字状の口縁部を有するものの中にも、肉厚で口縁部断面四角形のものと、薄手で

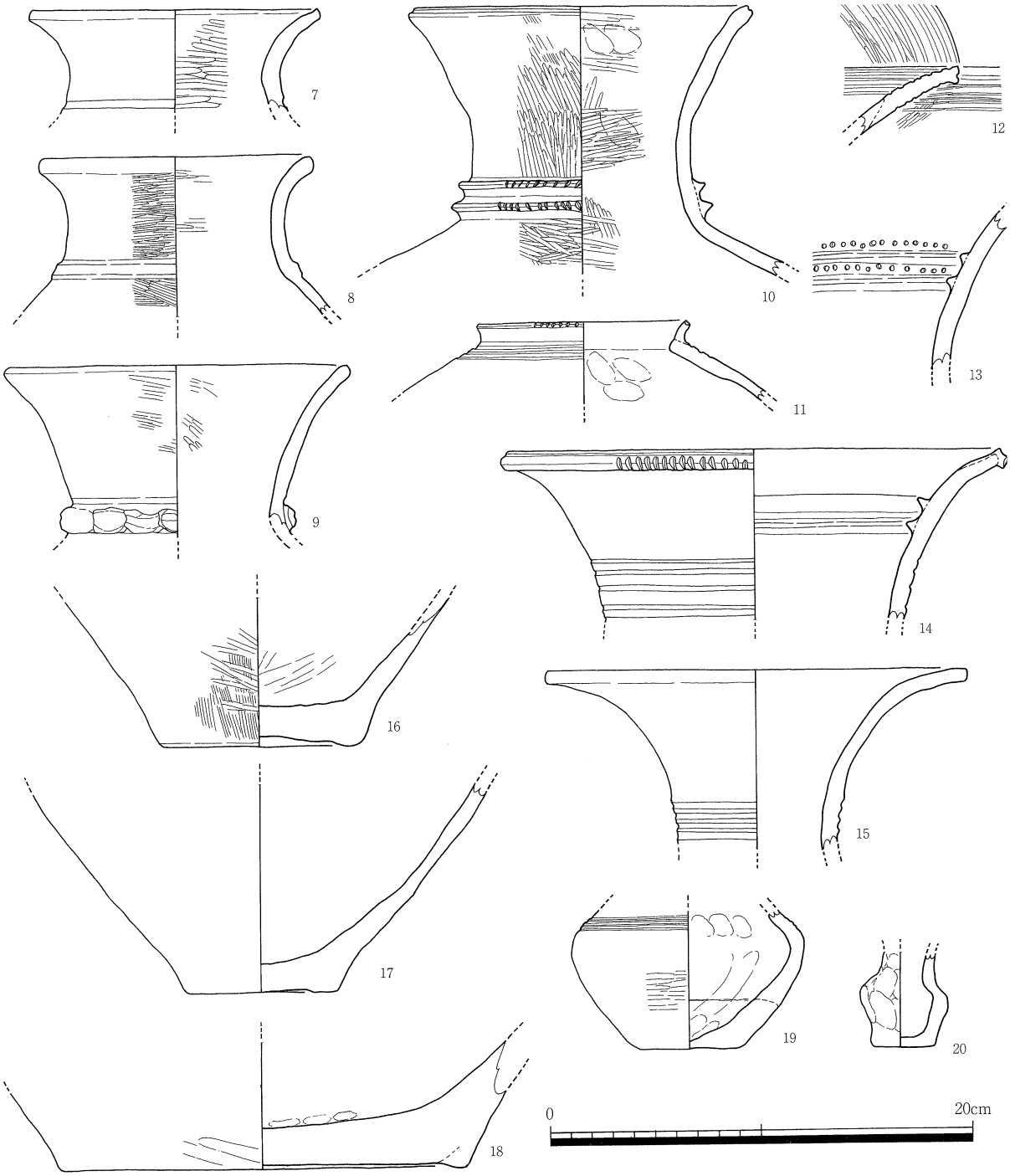


Fig029．SD090黒褐色層出土遺物（1）（S＝1/3）

口縁部断面断面三角形のものがある。21は如意状の刻み目を持つ口縁部を有し、推定口径17.8cm前後を測る。体部はやや厚く、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を有する。外面縦方向のハケ調整、内面ナデ調整を行う。22は復元口径20.0cmを測る。如意状の口縁部を有し、口唇部には刻み目を施す。口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を有し、外面縦方向のハケ調整、内面ユビオサエの後ナデ調整を行う。23は復元口径21.4cmを測る。如意状の口縁部を有し、器壁は4mm前後と薄い。口唇部には刻み目を有し、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。24は復元口径24.0cmを測る。如意状の口縁部を有し、器壁はやや厚手である。口唇部に1条の沈線と刻み目を、口縁部直下に7条のヘラ描きの沈線を有する。内面板状工具によ

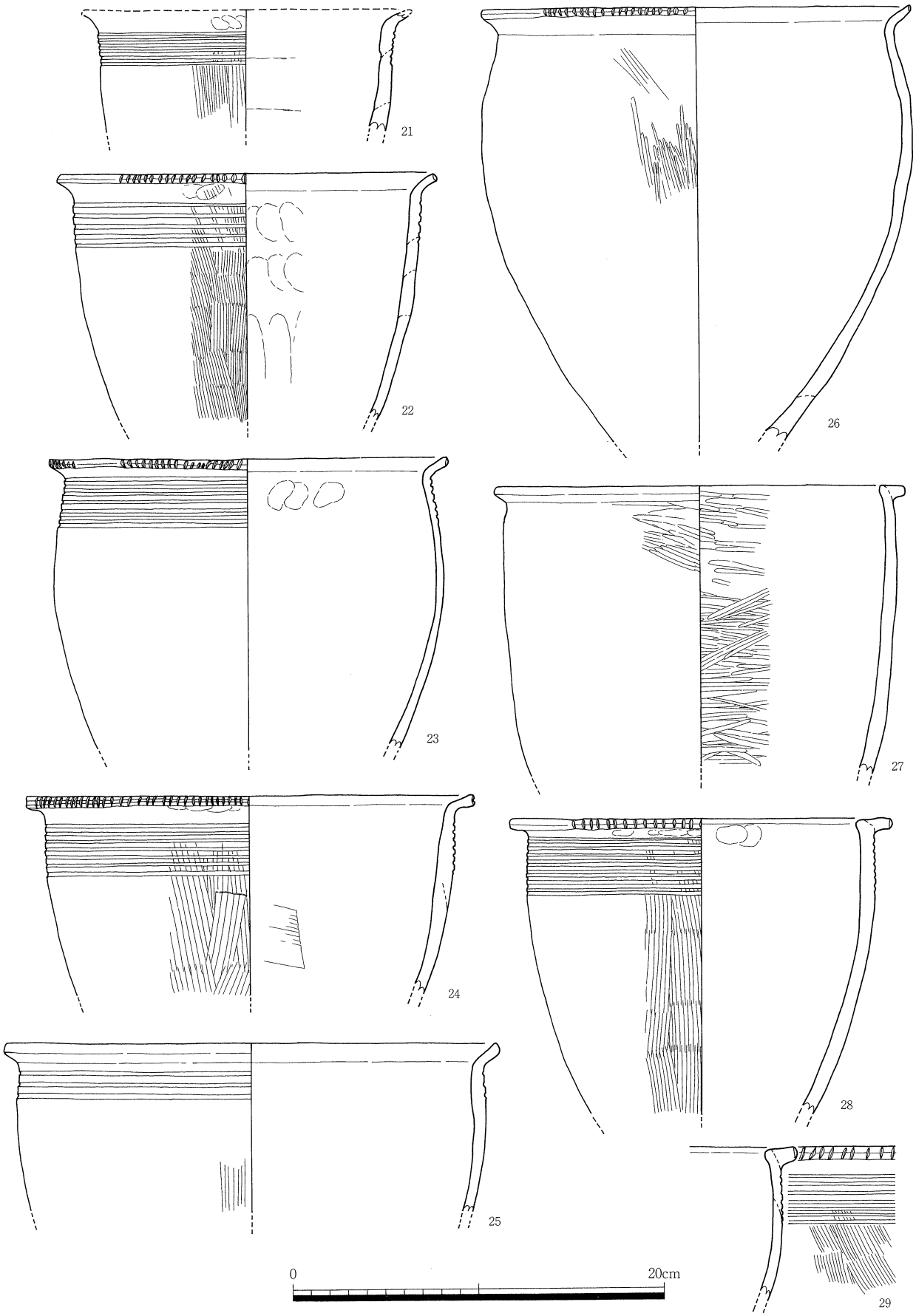


Fig030．SD090黒褐色層出土遺物（2）（S＝1/3）

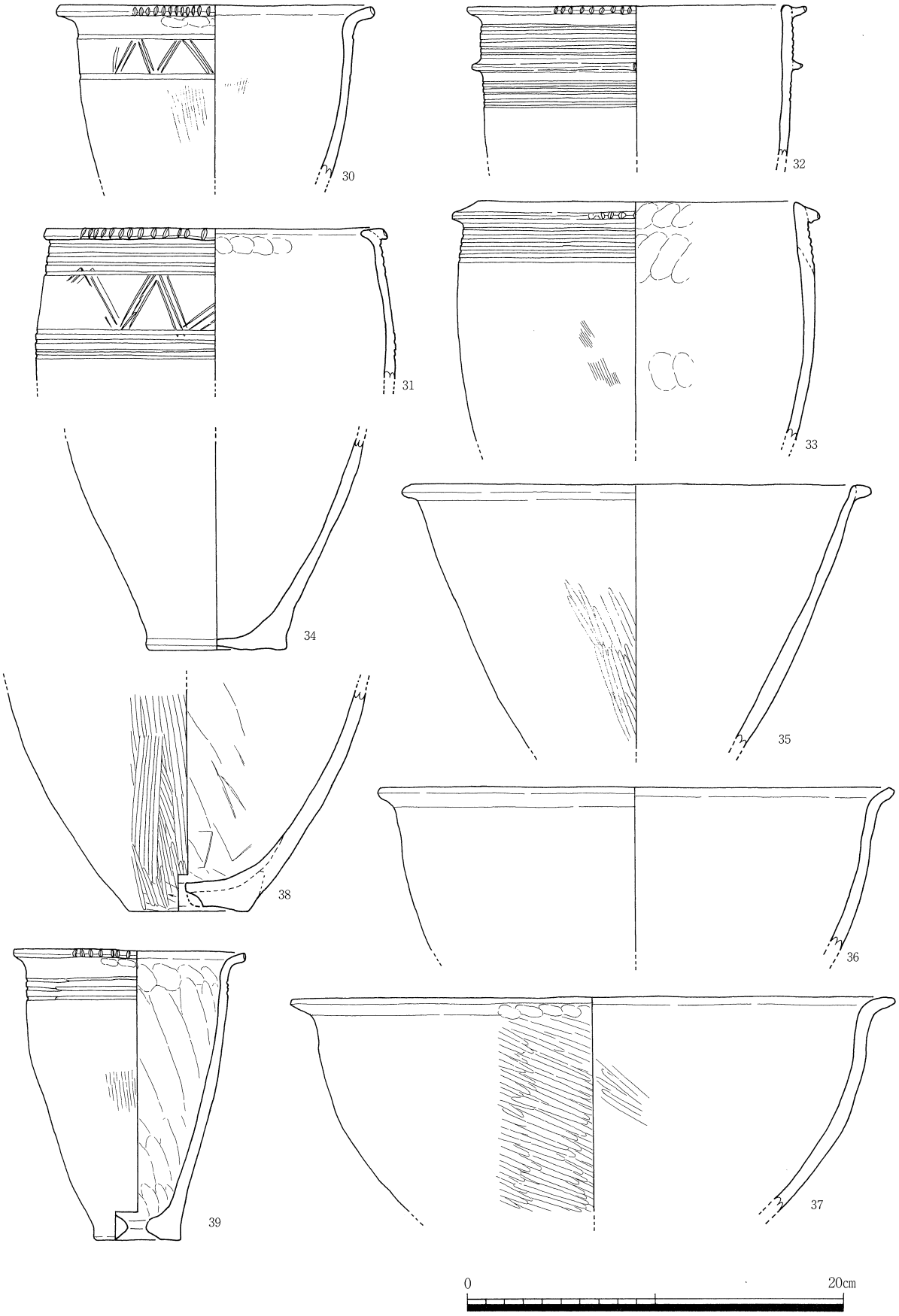


Fig031．SD090黒褐色層出土遺物（3）（S＝1/3）

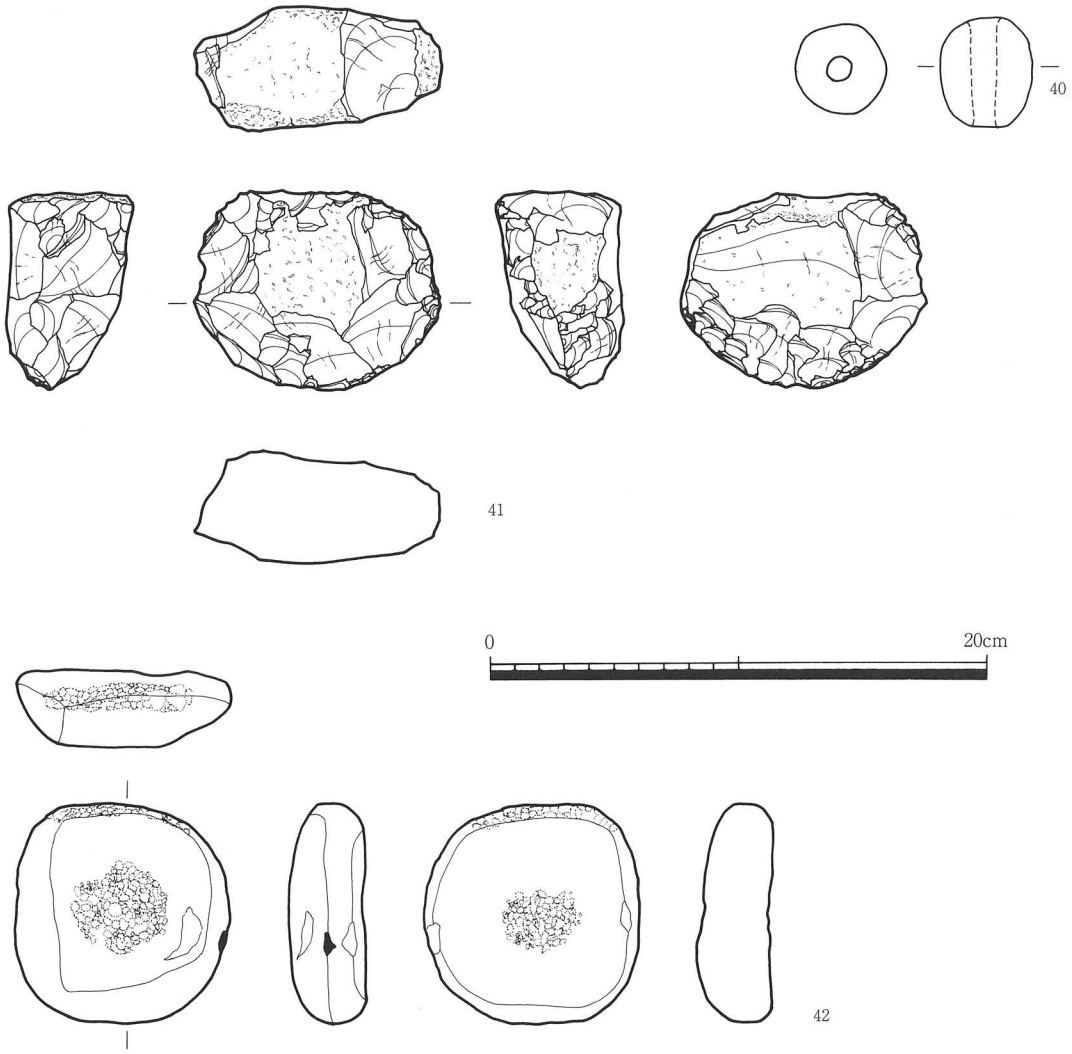


Fig032．SD090黒褐色層出土遺物（4）（S＝1/3）

るナデ調整を、外面縦方向のハケ調整を行う。25は復元口径26.4cmを測り、屈曲部内面には稜を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有し、口縁端部はわずかに上方へ摘み上げる。26は復元口径23.0cm、復元胴部最大径23.2cmを測り、緩やかに「く」字状に外反する口縁部を有し、口縁から1/3に胴部最大径が位置する。口唇部に刻み目を有し、外面縦方向のヘラミガキがわずかに残るものの、表面の劣化が著しく、内外面ともに調整等は不明瞭である。27は復元口径22.0cmを測り、直線的な体部と、貼り付けによる逆「L」字状の口縁部を有する。表面劣化のため調整等は不明瞭だが、内外面にはヘラミガキの痕跡残る。28は復元口径20.2cmを測り、やや厚手の逆「L」字状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を有し、口縁部直下には9条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため内面調整は不明だが、外面は縦方向のハケ調整を行う。29は肉厚の逆「L」字状の口縁部を有する。太鼓状に張る体部を有し、口唇部に刻み目を、口縁部直下に7状のヘラ描き沈線を施す。内面調整は表面劣化のため不明であるが、外面は縦方向のハケ調整を行う。30は復元口径16.4cmを測り、如意状の口縁部を有する。口縁部直下には2条の沈線と、沈線間にヘラ描きの山形文を施す。31は復元口径17.8cmを測り、太鼓状に張る胴部と内側に引き出した後、水平に外側へ引き出す口縁部を有する。口縁部内側には明瞭な指頭圧痕を有する。口唇部には刻み目を、口縁部直下には4条1単位のヘラ描き沈線を施す。沈線間にはヘラ描きの山形文を有する。内面ナデ調整、外面縦方向の板状工具によるナデ調整を行う。32は復元口径18.0cmを測り、断面三

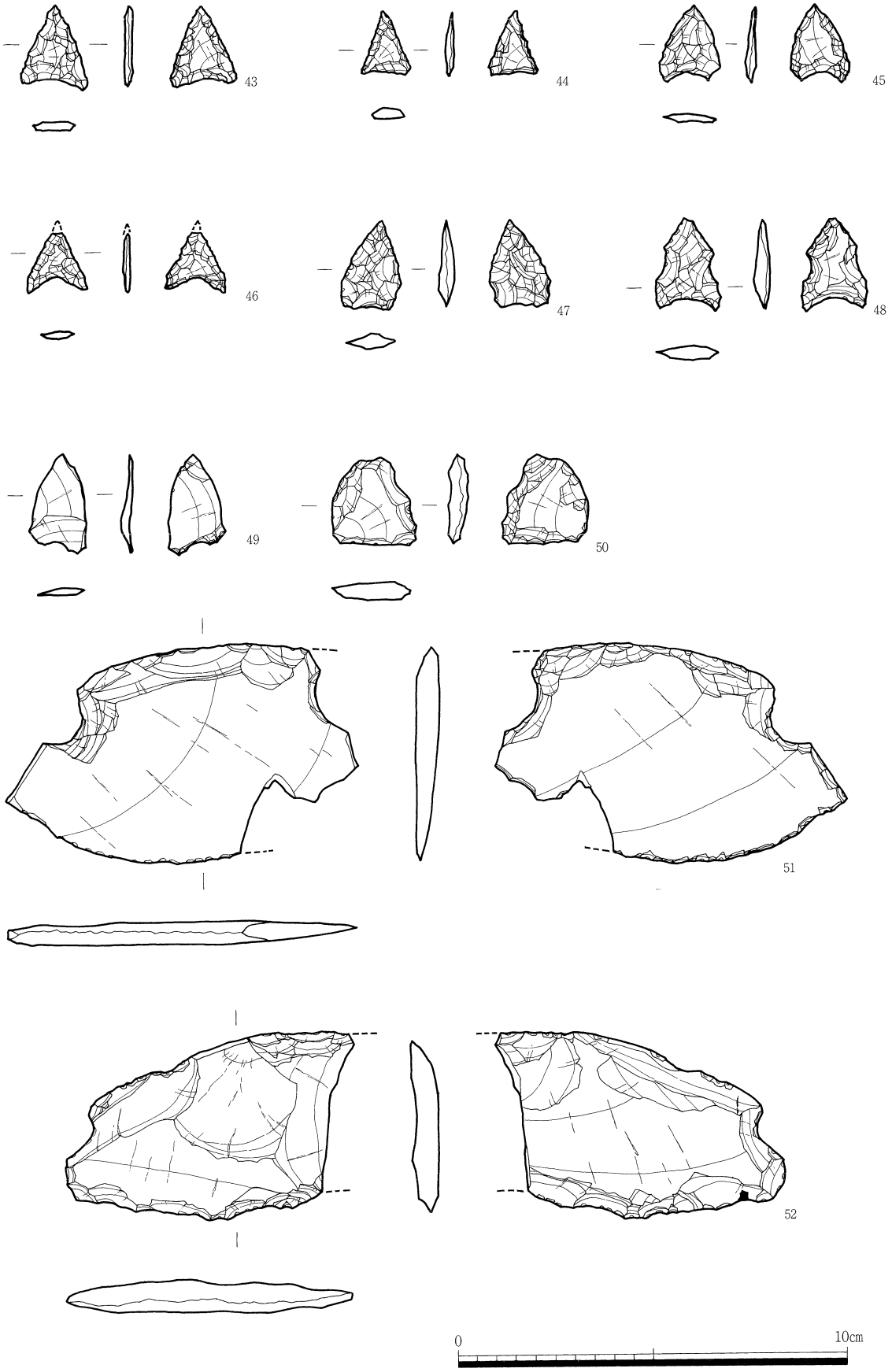


Fig033．SD090黒褐色層出土遺物（5）（S＝2/3）

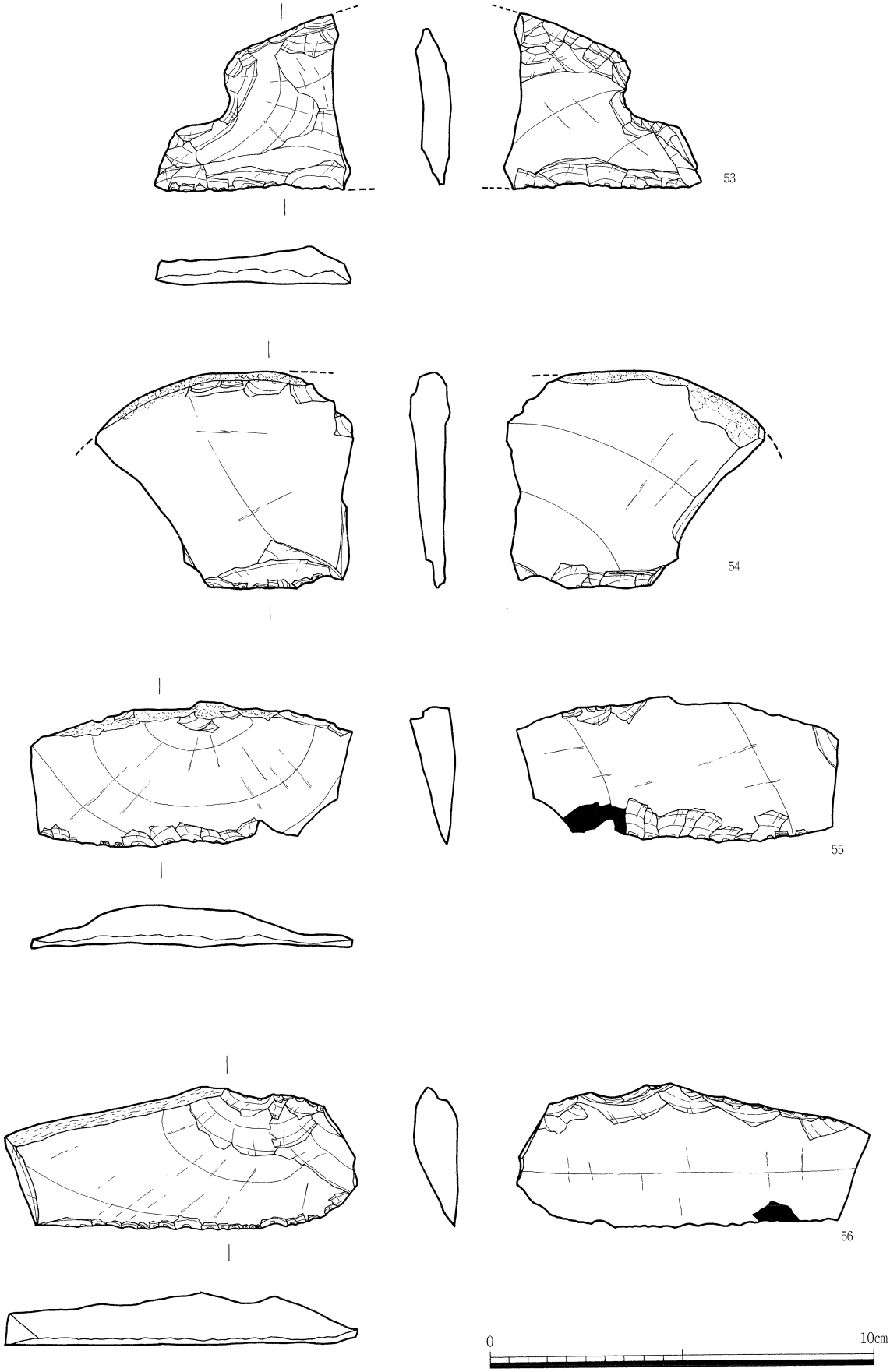


Fig034．SD090黒褐色層出土遺物（6）（S＝2/3）

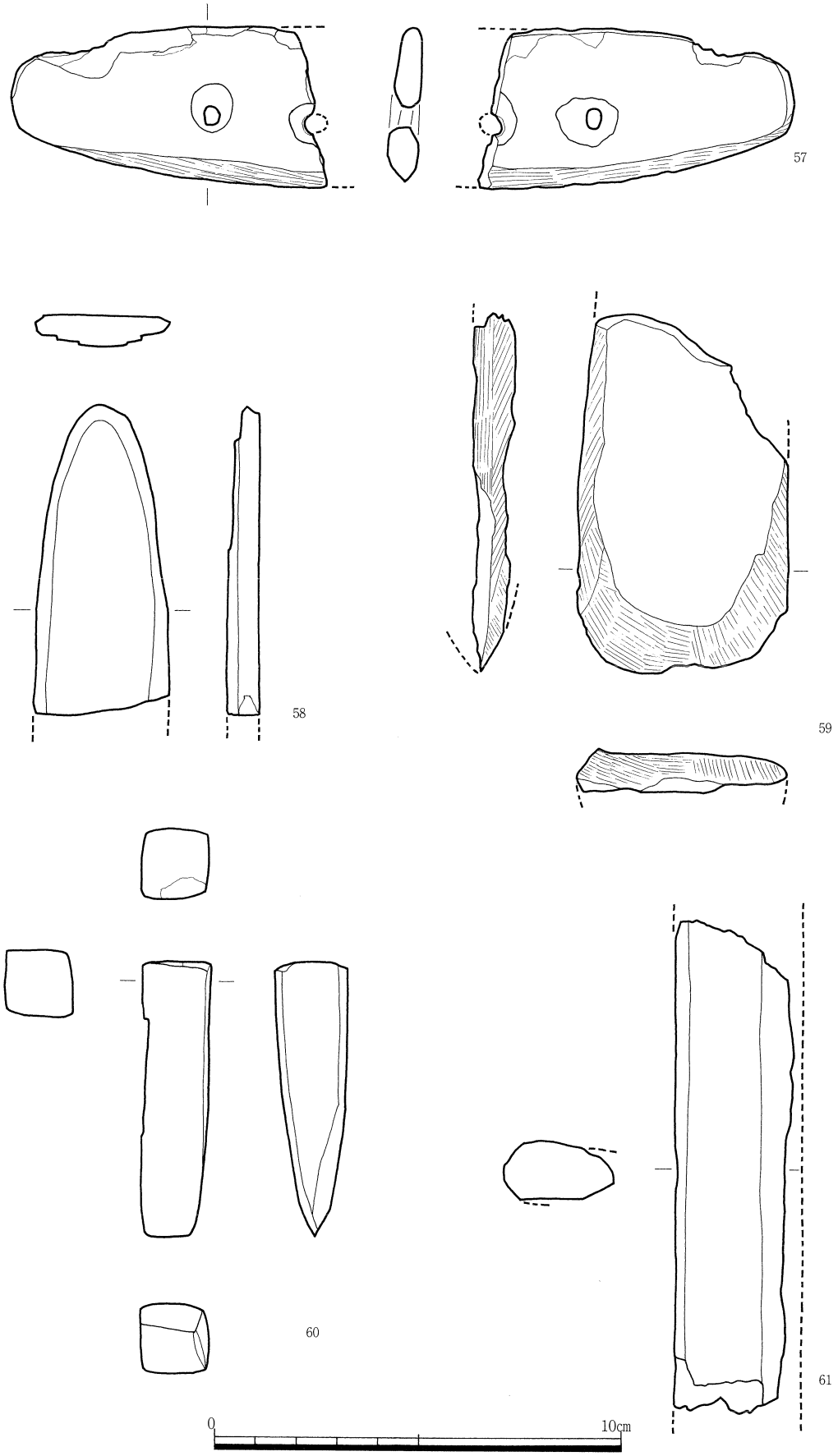


Fig035．SD090黒褐色層出土遺物（7）（S＝2/3）

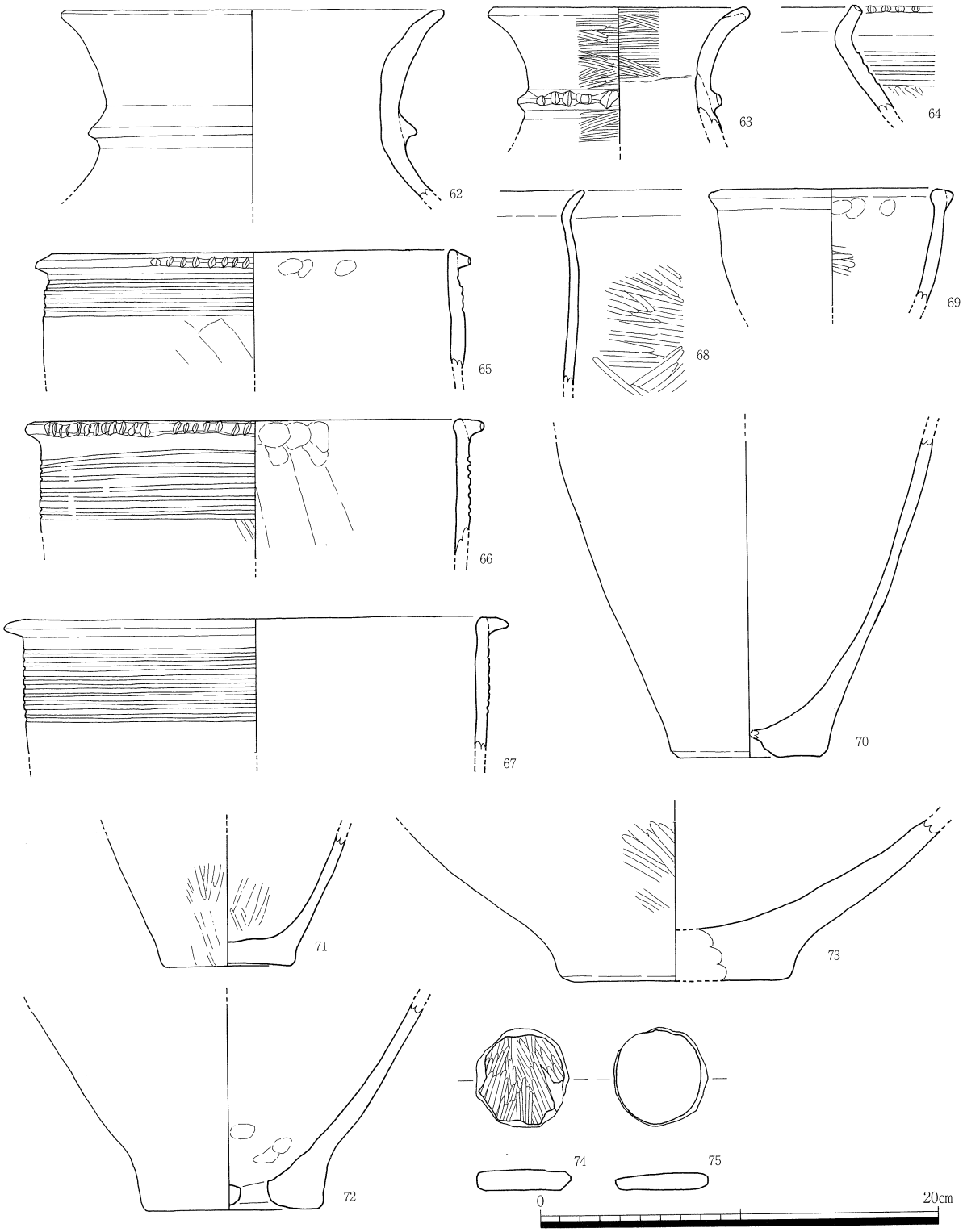


Fig036．SD090灰褐色層出土遺物（S＝1/3）

角形の貼り付け逆「L」字状を呈する口縁部を有する。突帯は口縁部直下にも存在し、両者共に刻み目を有する。口縁部直下には10条のヘラ描き沈線が存在するが、沈線は突帯の剥離した部分にも見うけられ、沈線を施した後に突帯を貼り付けた事が窺える。33は復元口径17.0cmを測り、断面三角形の逆「L」字状を呈する口縁部を貼り付ける。胴部は太鼓状に張り、口唇部に刻み目を、口縁部直下に5条のヘラ描き沈線を有する。内面ナデ調整、外面縦方向の板状工具によるナデを施す。34は復元底径7.7cmを測る。平坦な底部と、やや湾曲する体部を有する。内面ナデ調整、外面表面劣化のため調整不明である。35は復元口径24.8cmを測り、直線的な体部と、断面三角形の逆「L」字状口縁を貼り付ける。外面左上がりのヘラミガキを施すが、内面調整は表面劣化のため不明である。38は復元底径6.2cmを測り、やや湾曲する体部を有する。底部には焼成後に穿孔を施し、甑として使用した事が窺える。内面斜め方向の板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整の後底部付近をヘラミガキする。39は口径12.2cm、器高15.3cm、底径4.6cmを測る。如意状を呈する口縁部と口縁部直下に3条のヘラ描き沈線を有する。底部には焼成後の穿孔が見られ、甑として使用した事が窺える。内面丁寧なナデ調整、外面縦方向のハケ痕跡が残る。

鉢

36は復元口径27.4cmを測り、如意状に外反する口縁部を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。37は復元口径32.0cmを測り、如意状の口縁部を有する。器壁は6mm前後とやや厚く、内外面左上がりのやや太いヘラミガキを施す。

土製品

40は土錘である。長軸4.5cm、短軸3.7cmを測る楕円形を呈し、長軸方向に孔が通る。穴は直径8mm程度を測り、重量は54.8gを測る。

石器

（叩き石）

41は叩き石である。長軸9.9cm、短軸8.0cmを測り、ほぼ全周からの打撃によって整形する。側面数カ所に自然面を残し、自然面の一部は手擦れにより摩滅する。重量496.6gを測り、石材は溶結凝灰岩である。

（凹石）

42は凹石である。直径8.5cm前後を測る円形を呈し、表裏中心部付近と上則縁付近に打撃痕が集中する。重量347.3gを測り、石材は砂岩である。

（石鏃）

43は長さ2.1cm、基端幅1.6cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量0.7gを測る。44は長さ1.6cm、基端幅1.2cm、厚さ3mmを測る凹基式のものである。重量0.5gを測る。45は長さ1.9cm、基端幅1.5cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量0.8gを測る。46は長さ1.5cm、基端幅1.5cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量0.4gを測る。47は長さ2.2cm、基端幅1.6cm、厚さ3mmを測る平基式のものである。重量0.9gを測る。48は長さ2.3cm、基端幅1.7cm、厚さ3mmを測る凹基式のものである。全体の形状は五角形を呈し、先端付近に翼状の張り出しを有する。重量1.3gを測る。49は長さ2.5cm、基端幅1.5cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量0.8gを測る。素材面を多く残し、未製品の可能性もある。50は長さ2.2cm、基端幅2.1cm、厚さ5mmを測る平基式のものである。重量2.4gを測る。素材面を多く残し、不安定な形状から未製品と考えられる。いずれも石材はサヌカイトである。

（打製石包丁）

51は幅5.2cm、厚さ5.5mmを測り、中央付近で折損する。抉りはやや端部寄りに位置し、端部には打撃痕を多

く有する。52は幅4.5cm、厚さ6mmを測り、中央付近で折損する。抉りは比較的大きな剥離で形成され、端部には打撃痕を多く有する。53は刃部が平坦になるタイプである。抉りは端部側に寄り、厚さ10mm前後を測る。大半を折損する。

いずれも石材はサヌカイトである。

（掻器）

54は幅5.6cm、厚さ8mm前後を測り、両端を折損する。端部は丁寧な打撃によって整形され、刃部の剥離はやや粗い。石材は溶結凝灰岩である。55は幅3.7cm、厚さ8mm前後を測る。両端を折損し、端部には自然面を残す。端部側からの剥離も若干みられるが、刃部を形成する程ではない。石材はサヌカイトである。56は幅3.7cm、厚さ1.1cm前後を測り、両端を折損する。端部には自然面を残す。55と同一母岩である可能性がある。

（磨製石包丁）

57は幅3.9cm、厚さ7mmを測り、半分を折損する。破損が著しく、表面研磨の方向等は詳らかでない。紐部は両面穿孔により形成され、外孔径1cm前後、内孔径4.5mm前後を測る。石材は粘板岩と思われる。

（磨製石剣）

58は幅3.2cm、厚さ10mm前後を測る。風化のため摂理面で剥離し、また表面の情報もほとんど失われている。石材はシルト岩かと思われ、他地域からの搬入品である可能性が高い。

（磨製石斧）

59は幅5.2cmを測る。太型蛤刃石斧と思われるが、破損が著しく詳細は不明である。石材は粘板岩である。60は柱状片刃石斧である。1辺1.6cm前後の方柱形を呈し、基部を折損する。破損後何らかの再利用が行われたと考えられ、折損部も研磨を行う。石材は暗灰色のシルト岩と考えられる。

（石棒）

61は断面長軸2.7cm、短軸1.4cmの楕円形を呈し、全面研磨を行う。上端と下端を欠損するため、本来の形状等は不明である。石材は片岩である。

灰褐色層出土遺物（Fig036）

壷（62～64、73）、甕（65～72）、土製円板（74、75）が出土した。

壷

62は復元口径19.2cmを測り、ラッパ状に広く広がる口縁部と、頸部に1条の突帯を有する。突帯は断面鋭い三角形で、貼り付け前に体部に1条の沈線を施す。所々赤変する部分があり、2次焼成を受けた痕跡が見られる。表面劣化のため調整等は不明である。63は復元口径13.2cmを測り、ラッパ状に開く口縁部と頸部に1条の突帯を有する。突帯にはやや大ぶりな刻み目を施す。内面には粗い粘土の継目が明瞭に認められる。内外面密なヘラミガキを施す。64は「く」字状に屈曲する口縁部を有する壷である。断面四角形の口縁部を有し、口唇部には刻み目を有する。肩部には4条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため内外面調整等不明であるが、外面にはわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。73は復元底径11.4cmを測る大型の壷底部である。表面劣化のため内面調整は不明であるが、外面にはヘラミガキがわずかに残る。胎土は灰褐色でチャート片を含み、他とやや異なる。

甕

65は復元口径21.8cmを測り、断面三角形でやや肉厚な逆「L」字状の口縁部を貼り付ける。口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。66は復元口径23.0cmを測り、断面四角形で肉厚の逆「L」字状口縁部を貼り付ける。口唇部には刻み目を有し、口縁部直下には7条のヘラ描

き沈線を施す。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を行う。65は復元口径25.4cmを測り、断面三角形で逆「L」字状の口縁部を貼り付ける。口縁部直下には9条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整は不明瞭だが、内外面ナデ調整と考えられる。68は如意状の口縁部を有する。胎土中に大粒の赤色酸化土粒を多く含む。外面にヘラミガキを施し、鉢である可能性がある。69は復元口径12.2cmを測る。厚手の逆「L」字状の口縁部を有するが、歪みが大きい粗製のものである。表面劣化のため調整等は不明であるが、内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。70は復元底径7.8cmを測り、底部から肩部付近まで残存する。体部は直線的に開き、底部には焼成後の穿孔を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。71は底径6.2cmを測り、内外面と外底面にヘラ状工具によるナデ調整を行う。72は底径8.4cmを測り、やや垂直気味に立ち上がった後広めに開く体部を有する。平坦な底部には焼成後の穿孔が見られるが、孔は底部中心から大きくずれる。表面劣化のため調整等は不明である。

土製円板

74は長軸4.9cm、短軸4.7cm、厚さ1.0cm、重量28.1gを測る。壷体部を再利用したものと考えられ、外面密なヘラミガキを施す。75は長軸4.9cm、短軸4.6cm、厚さ8mm、重量20.1gを測る。表面劣化のため調整等は不明である。

SD091出土遺物（Fig037～044）

灰白色層出土遺物（Fig037）

壷（2）、甕（1）、石器（3、4）が出土した・

壷

2は底径19.0cmを測る大型の壷底部である。底部は肉厚で厚さ4.0cmを測る。外面にはわずかにハケ調整の痕跡が、外底面にはヘラミガキが残る。胎土中には径5mm前後の長石粒を多く含む。

甕

1は如意状を呈する口縁部を有する。口縁端部は面を持って収まり、口唇部に刻み目を施す。口縁部直下には3条の沈線を施す。

石器

3は長さ11.2cm、幅8.6cmを測る板状の素材剥片と考えられる。上端には自然面を残し、多くの部分を折損する。石材はサヌカイトである。4は磨製石斧を転用した凹石である。長さ9.8cm、幅7.6cm、厚さ4.1cmを測る。もともと磨製石斧の基部であったものを、折損後凹石に転用したものである。中央表裏面と上端部、則縁部の一部にそれぞれ打撃痕が残る。表面の打撃の一部には溝状に窪むものがみられ、両極打法の台石として使用されたものと考えられる。

黒褐色層出土遺物（Fig038～041）

壷（5～18）、甕（19～28）、鉢（29）、蓋（30、31）、土錘（32、33）、土製紡錘車（34）、ミニチュア土器（35）石器（37～43）が出土した。

壷

5は口径12.6cmを測る。直行する頸部と、やや強く外反する口縁部を有し、頸部には刻み目突帯を貼り付ける。刻み目は丸い棒状工具で深く刻む。口縁部には焼成前の穿孔が穿たれるが、穿孔が2個1単位であったのか単体であったのかは欠損のため不明である。調整についても表面劣化のため不明である。6は大型壷の口縁部である。内面には1条の突帯を貼り付ける。表面劣化のため調整等は不明である。7も大型壷の口縁部である。肉厚で口縁端部は四角く収まる。内外面密にヘラミガキを行い、口唇部には1条のヘラ描き沈線を施す。8は復元口径

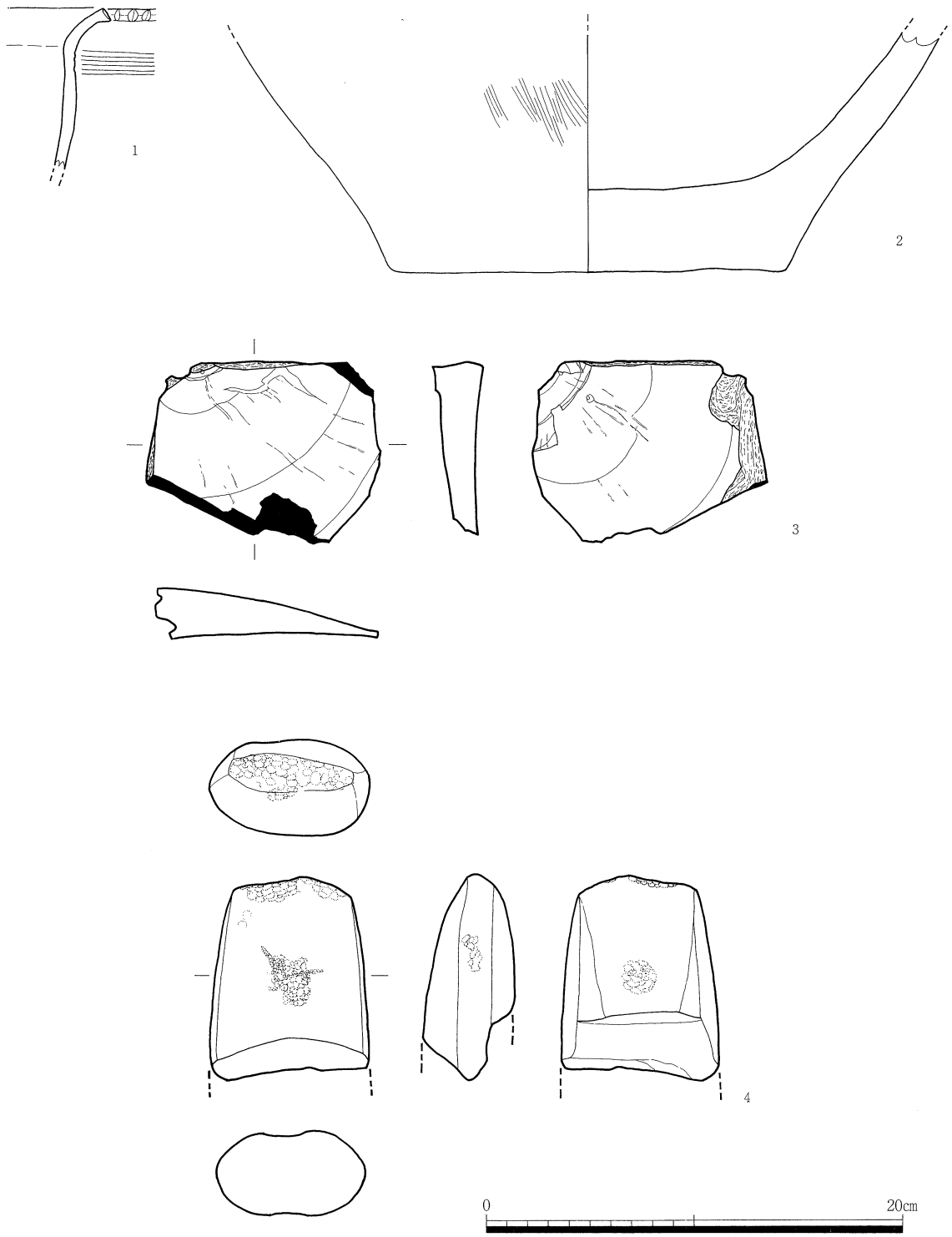


Fig037．SD091灰白色層出土遺物（S＝1/3）

13.6cmを測り、口縁部は直下で屈曲する。屈曲部から若干下がった位置に1条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明瞭であるが、外面には横方向のヘラミガキがわずかに残る。9は復元口径16.2cmを測り、口縁から胴部中央付近まで残存する。胴部最大径は胴部中央付近にくるものと考えられ、口縁部から頸部の屈曲はなだらかである。外面全面と、口縁部内面に横方向のヘラミガキを行う。11は復元口径27.8cmを測り、直行気味の口縁部を持つ厚手のものである。外面表面劣化のため調整不明、内面横方向のヘラミガキを行う。12は底径11.6cmを測り、平坦な底部と直線的にひらく体部を有する。体部は薄手で、表面劣化のため内面調整

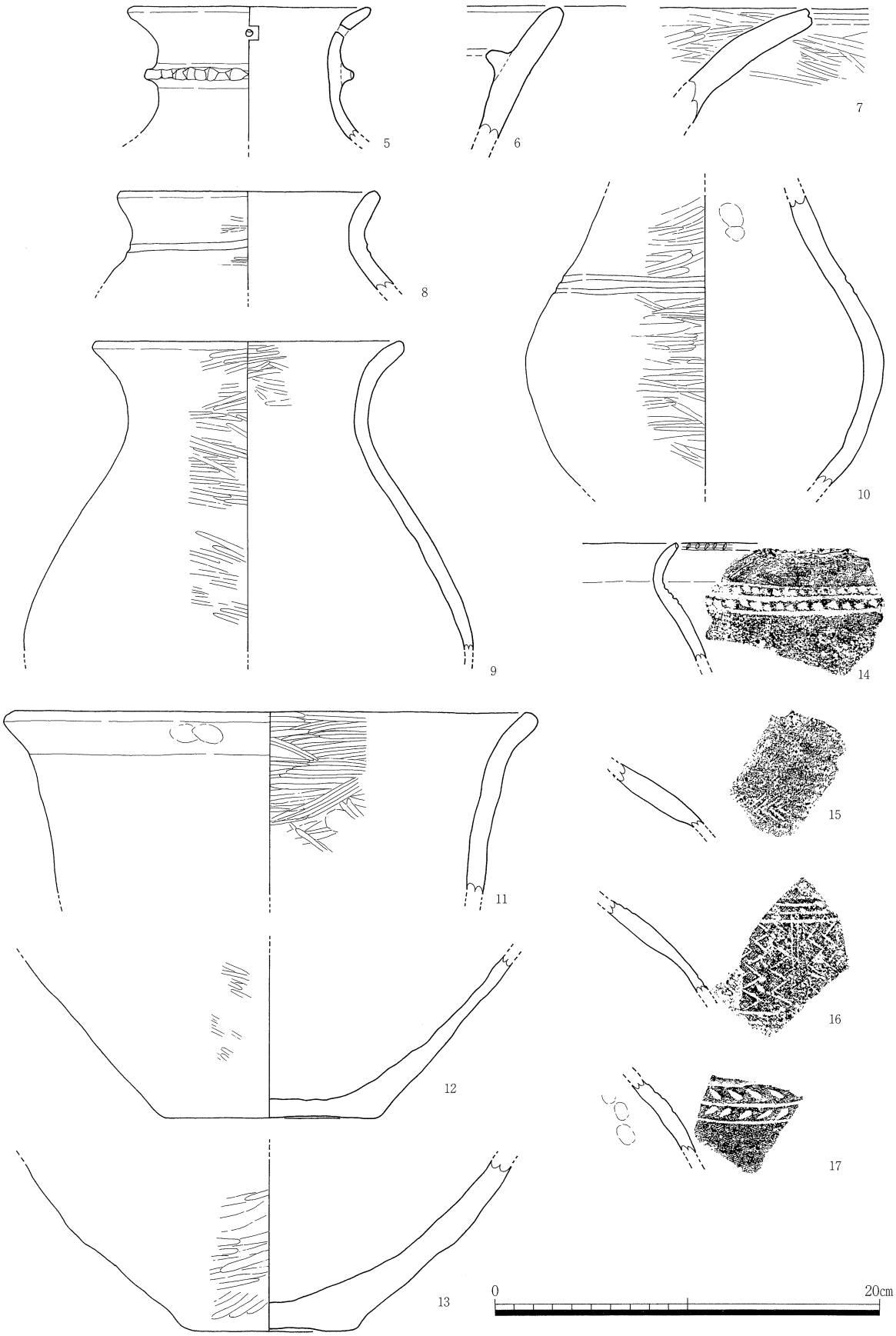


Fig038．SD091黒褐色層出土遺物（1）（S＝1/3）

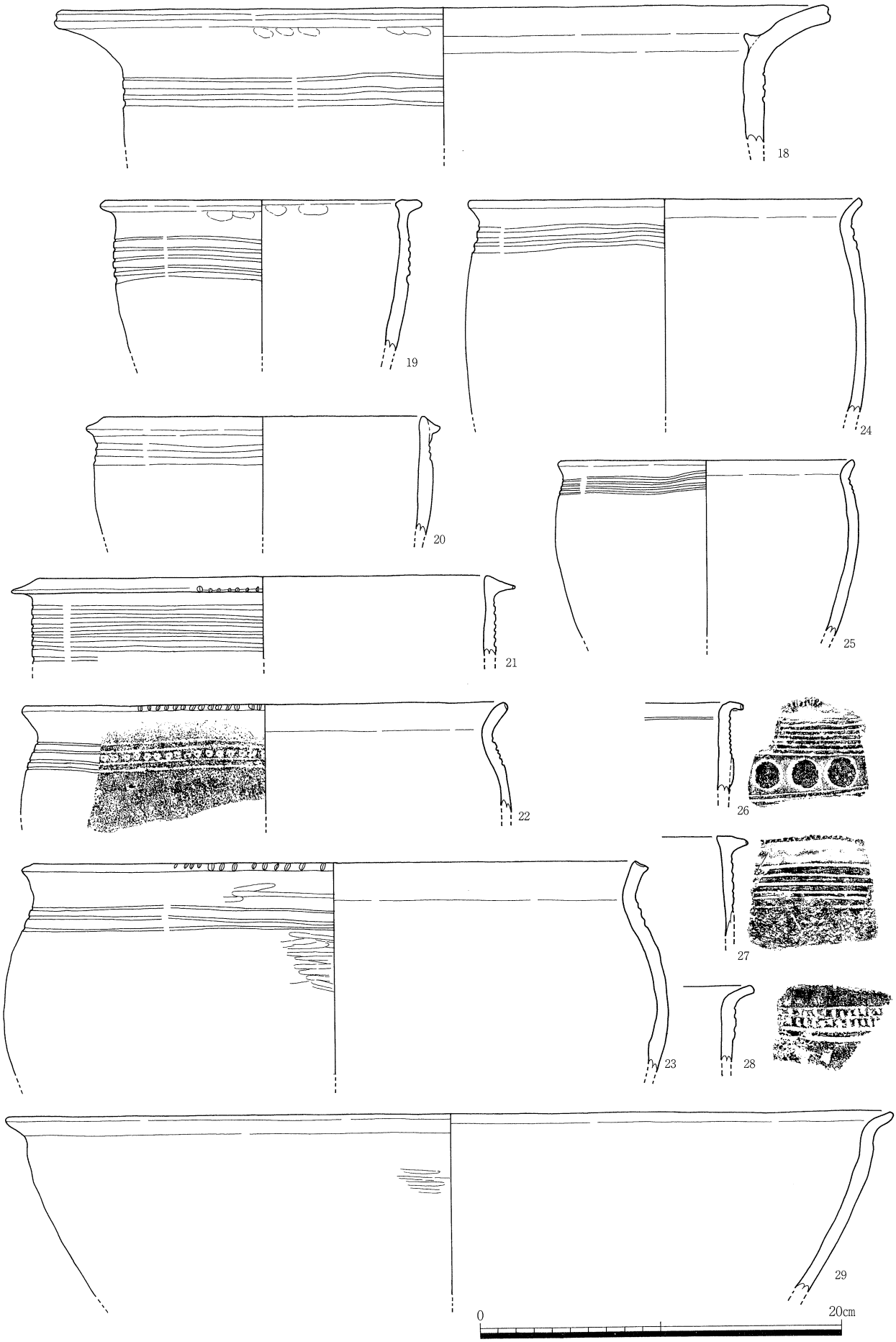


Fig039．SD091黒褐色層出土遺物（2）（S＝1/3）

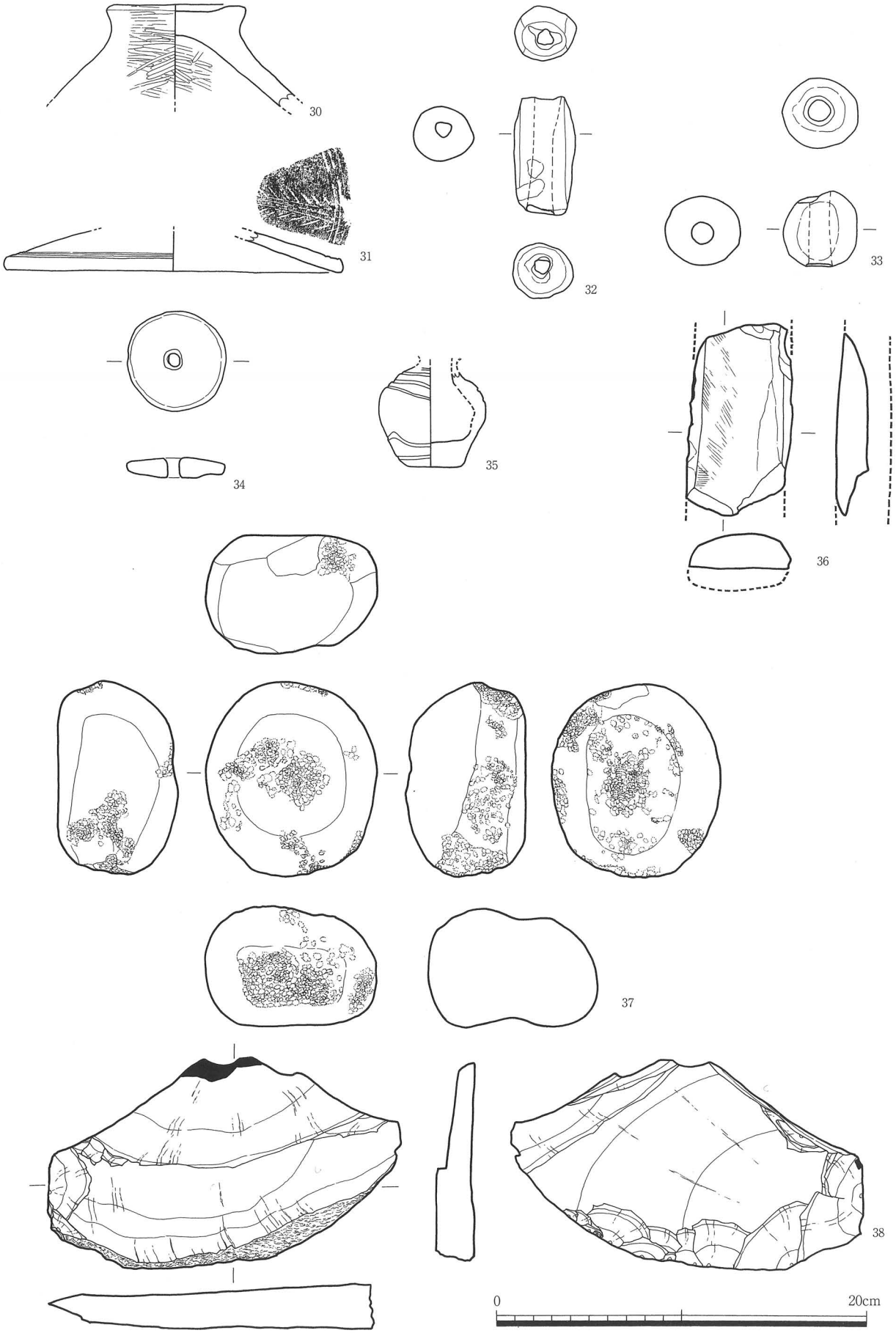


Fig040．SD091黒褐色層出土遺物（3）（S＝1/3）

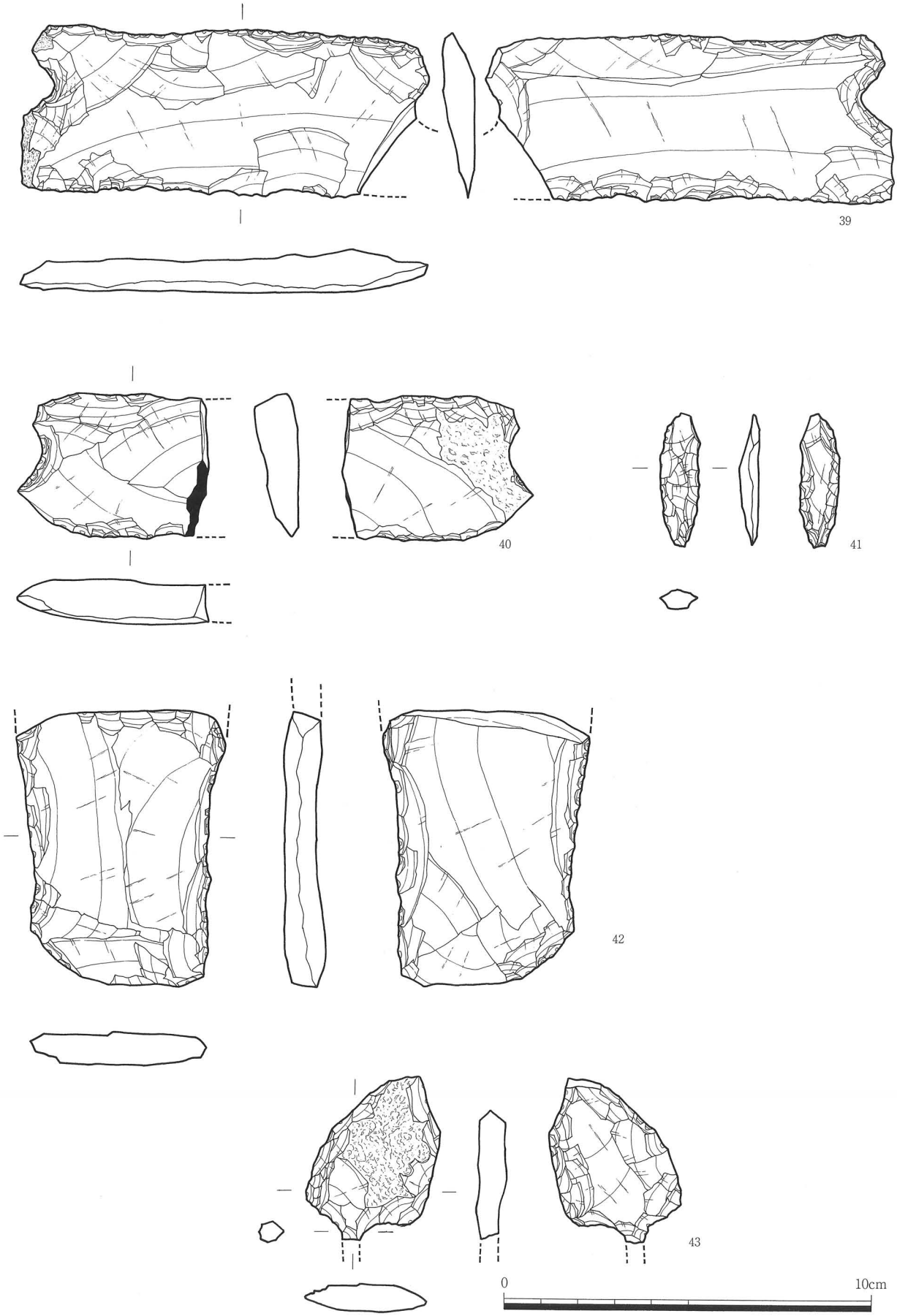


Fig041．SD091黒褐色層出土遺物（4）（S＝2/3）

は不明であるが、外面には横方向のヘラミガキの痕跡がわずかに残る。13は底径9.0cmを測り、やや湾曲する体部を有する。体部内面は表面劣化のため調整不明、外面は右上がりのやや幅の広いヘラミガキを行う。14は「く」字状に外反する口縁部を有する。口唇部に刻み目を施し、肩部には3条の沈線と、2条の刺突文を有する。表面劣化のため調整等は不明である。15は壷肩部の破片である。外面ヘラミガキの後ヘラ描きの羽状文を施す。内面調整は表面劣化のため不明である。16は壷肩部の破片である。3条1単位のヘラ描き沈線の間を縦方向の3条1単位のヘラ描き沈線によって区画し、その間を距歯文によって充填する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。17は壷肩部の破片である。3条のヘラ描き沈線と、2条の刺突文を施す。内面ユビオサエ、外面ヘラミガキを施す。18は復元口径43.0cmを測る大型のものである。直行する頸部と、強く外反する口縁部を有し、口縁部内面には1条の貼り付け突帯を有する。頸部には3条のヘラ描き沈線を有する。

甕

19は復元口径17.8cmを測り、やや内側に肥厚する逆「L」字状口縁を有する。口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整だが外面調整は表面劣化のため不明である。20は復元口径19.6cmを測り、断面三角形の逆「L」字状の口縁部を貼り付ける。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。内面ナデ調整を行い、外面調整は表面劣化のため不明である。21は復元口径28.0cmを測り、やや斜め下がりの逆「L」字状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を有し、口縁部直下には７条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。22は復元口径26.6cmを測り、「く」字状に外反する口縁部を有し、口唇部に刻み目を有する。肩部には4条のヘラ描き沈線を有し、沈線間に竹管状の刺突文を有する。23は復元口径34.5cmを測り、「く」字状に外反する口縁部を有する。口縁端部は四角く収まり、口唇部には刻み目を施す。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。内外面表面劣化が著しいが、外面には横方向のヘラミガキの痕跡がわずかに残る。24は復元口径22.9cmを測る。如意状の口縁部を有し、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。25は復元口径16.4cmを測り、短く伸びる如意状の口縁部を有する。口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施し、内外面調整は表面劣化のため不明である。26は復元口径19.0cmを測り、水平に折り曲げる逆「L」字状を呈する口縁部を持つ。口唇部には刻み目を有する。口縁部直下には8条のヘラ描き沈線とその下に貼り付ける円形浮文、さらに下に複数条のヘラ描き沈線から構成される文様帯を有する。表面劣化のため調整等は不明である。27は復元口径19.2cmを測り、やや斜め下に伸びる逆「L」字状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線と、ヘラ描きの山形文を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。28は如意状に外反する口縁部を有し、4条のヘラ描き沈線を有し、沈線間には刺突文を施す。内面ナデ調整を行うが、外面調整は表面劣化のため不明である。

鉢

29は復元口径49.4cmを測り、如意状に外反する口縁部を持つ。体部の湾曲は緩やかである。内外面表面劣化のため調整等は不明瞭であるが、外面の一部にはわずかに横方向のヘラミガキが残る。

蓋

30は甕蓋である。天井部径は7.4cmを測り、天井部の窪みは浅い。内外面比較的細いヘラミガキを密に施す。31は壷蓋である。復元口径18.2cmを測り、3条1単位のヘラ描き沈線で界線を施し、縦方向の3条1単位のヘラ描き沈線が分割する。縦方向の分割線には綾杉状のヘラ描き文がとりつく。

土錘

32は長さ6.4cm、幅3.4cm前後を測り、孔の直径は約9mm前後である。重量は63.1gを測る。孔には穿孔の様子はなく、棒状の工具に粘土をまきつけて成形したものと考えられる。外面の指頭圧痕はこの推定を肯定する。

33は長さ4.1cm、幅4.0cm前後、重量55.6gを測る。孔の直径は1.2cm前後とやや大きい。32同様芯棒に粘土をまきつける方法で成形されたものと考えられる。

土製紡錘車

34は直径5.3cm、厚さ1.1cm、孔の直径は6mmを測る。表面劣化のため調整は不明確だが、全面ナデ調整を行っていたと考えられる。

ミニチュア土器

35は底径3.3cm前後、胴部最大径5.7cmを測り、肩部には粗い5条のヘラ描き沈線を施す。内面は粗いユビオサエを施し、外面調整は表面劣化のため不明である。

石器

（磨製石斧）

36は磨製石斧残欠である。太型蛤刃石斧と考えられるが、大半を欠損し、原形は不明である。石材は溶結凝灰岩である。

（凹石）

37は長軸10.6cm、短軸9.2cmの楕円形を呈し、表裏中心部が打撃により窪む。重量は928.3gを測る。打撃の一部は側縁部にも及ぶが、溝状の窪みは見られない。

（剥片）

38は長さ20.0cm、幅12.5cm、厚さ2cm前後を測る大型の剥片である。下端部に自然面を残し、下端部分に複数の剥離面を有する。板状の素材剥片と考えられ、石材はサヌカイトである。

（打製石包丁）

39は長さ11cm前後、幅4.5cm前後を測り、刃部の一部を欠損する。重量は68.8gを測る。紐部の抉りは比較的丁寧に調整し、摩滅の痕跡はほとんど見られない。40は幅3.9cmを測り、半分以上を折損する。抉り付近の一部に自然面を残す。

（石錐）

41は長さ3.6cm、幅1.1cm、厚さ5mmを測り、頭部と錐部の境界が不明瞭なものである。全面丁寧な押圧剥離によって成形され、先端部には摩滅痕は見られない。43は頭部とわずかに錐部が残存する。頭部は長さ4.2cm、幅3.6cm、厚さ7mm前後を測り、錐部と少し角度が異なる。片面には自然面を多く残す。

（その他）

42は打製石剣もしくは石鍬の基部と考えられる。幅4.8cm～5.7cmを測る。大半を折損するため詳細等は不明であるが、折損面を除く全側縁に打痕を残す。

灰褐色層出土遺物（Fig042～044）

壷（44～48、51～56）、甕（49、50、57～65）、高杯（66、67）蓋（68～71）鉢（72）石器（73～78）

壷

44は復元口径16.0cmを測り、ラッパ状に丸く開く口縁部を有する。頸部には3条のヘラ描き沈線を持ち、内外面横方向のヘラミガキを行う。45は口縁部を欠損するが、口縁部直下に段を持ち、口縁部の屈曲が強いタイプのものであると考えられる。胎土は白色気味で、内外面とも横方向の細いヘラミガキを密に施す。46は復元口径19.6cmを測り、ラッパ状に丸く開く口縁部を有する。口縁部はほぼ水平近くまで開き、頸部には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。47は復元口径23.1cmを測り、緩やかに開く口縁部を有する。口縁端部は面を持って収まり、口唇部に1条の沈線を有する。内外面比較的密なヘラミガキを行う。

48は底径10.8cmを測り平坦な底部と直線的に開く体部を有する。内外面密なヘラミガキを施す。51は復元口径12.8cmを測り、厚手で強く外反する口縁部を有する。内外面ヘラミガキを行い、頸部には2条のヘラ描き沈線を有する。52は復元口径14.0cmを測り、比較的直線的な口縁部を有し、口縁端部は四角く収まる。口唇部には1条の沈線を有し、内外面密なヘラミガキを施す。53は復元口径11.2cmを測り、強く外反する口縁部を有する。口縁端部は若干厚みを持って丸く収まり、肩部には4条のヘラ描き沈線と竹管状の刺突文を有する。内外面比較的密なヘラミガキを施す。54は復元口径12.8cmを測り、やや屈曲の強い口縁部を有する。口縁端部は若干肥厚して丸く収まり、口縁部外面と内面上半をヘラミガキする。55は小型壷である。口径7.0cm、器高12.0cmを測る。緩やかに湾曲する口縁部を有し、頸部には厚い刻み目突帯を貼り付ける。最大径は胴部中位に位置する。外面底部付近にわずかにヘラミガキの痕跡が見られ、内面はナデ調整を行う。56は緩やかに湾曲する口縁部を有し、頸部に肉厚で、細い刻み目を持つ突帯を貼り付ける。表面劣化のため調整等は不明であるが、外面わずかにヘラミガキの痕跡が残る。

甕

49は復元口径21.6cmを測り、如意状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を施し、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を持つ。内外面ナデ調整を行う。50は復元口径21.8cmを測り、屈曲の弱い如意状の口縁部を有する。口縁端部はやや四角くおさまり、口唇部に刻み目を有する。口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有し、内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を行う。57は復元口径17.4cmを測り、薄手で、斜め上方へ伸びる如意状の口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。58は復元口径14.4cmを測り、やや口縁部の伸びが小さい如意状の口縁部を有する。口唇部に刻み目を、口縁部直下に3条のヘラ描き沈線を有するが、調整等は不明である。59は復元口径17.6cmを測り、「く」字状に外反する口縁部を有する。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を行う。60は復元口径18.0cmを測り、直線的な体部と緩やかに外反する口縁部を有する。口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を施し、外面をハケ調整する。内面調整は表面劣化のため不明である。61は復元口径29.6cmを測り、如意状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を、口縁部直下に3条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を行う。62は底径7.2cmを測り、底部に焼成前の穿孔を有する。内面調整は表面劣化のため不明であるが、外面を縦方向のハケ調整する。63は強く屈曲する口縁部を有し、口縁端部に面を持つ。あるいは鉢である可能性もある。口縁部直下に1条のヘラ描き沈線を有する。内外面ハケ調整を行う。64は63と類似するものである。口縁端部はやや丸く収まり、口唇部に刻み目を有する。内外面ナデ調整を行うが、外面調整は板状工具によるナデである可能性もある。65は突帯文系とされているものである。直立する口縁部と、断面三角形の刻み目突帯を貼り付ける。表面劣化のため調整等は不明である。

高杯

66は底径9.3cmを測り、ラッパ状に広く開く脚底部を有し、杯部は直線的に開く。表面劣化のため外面調整は不明であるが、杯部内面及び脚部内面をヘラミガキする。67は低い脚部と直線的に開く体部を有し、脚柱部に肉厚の刻み目突帯を有する。杯部内面をヘラ状工具によるナデ調整し、その他は内外面密なヘラミガキを施す。ヘラミガキは刻み目の中にまで及ぶ。

蓋

68は壷蓋である。中央部に紐穴が貫通し、つまみを取り巻くように貼り付け浮文が巡る。浮文はそれぞれ4・3・2・1個1単位で単位を構成して貼り付けられる。表面劣化のため調整等は不明である。69は甕蓋である。天井部でやや開くものである。天井部径7.2cmを測る。外面表面劣化のため調整不明、内面ナデ調整する。70は甕

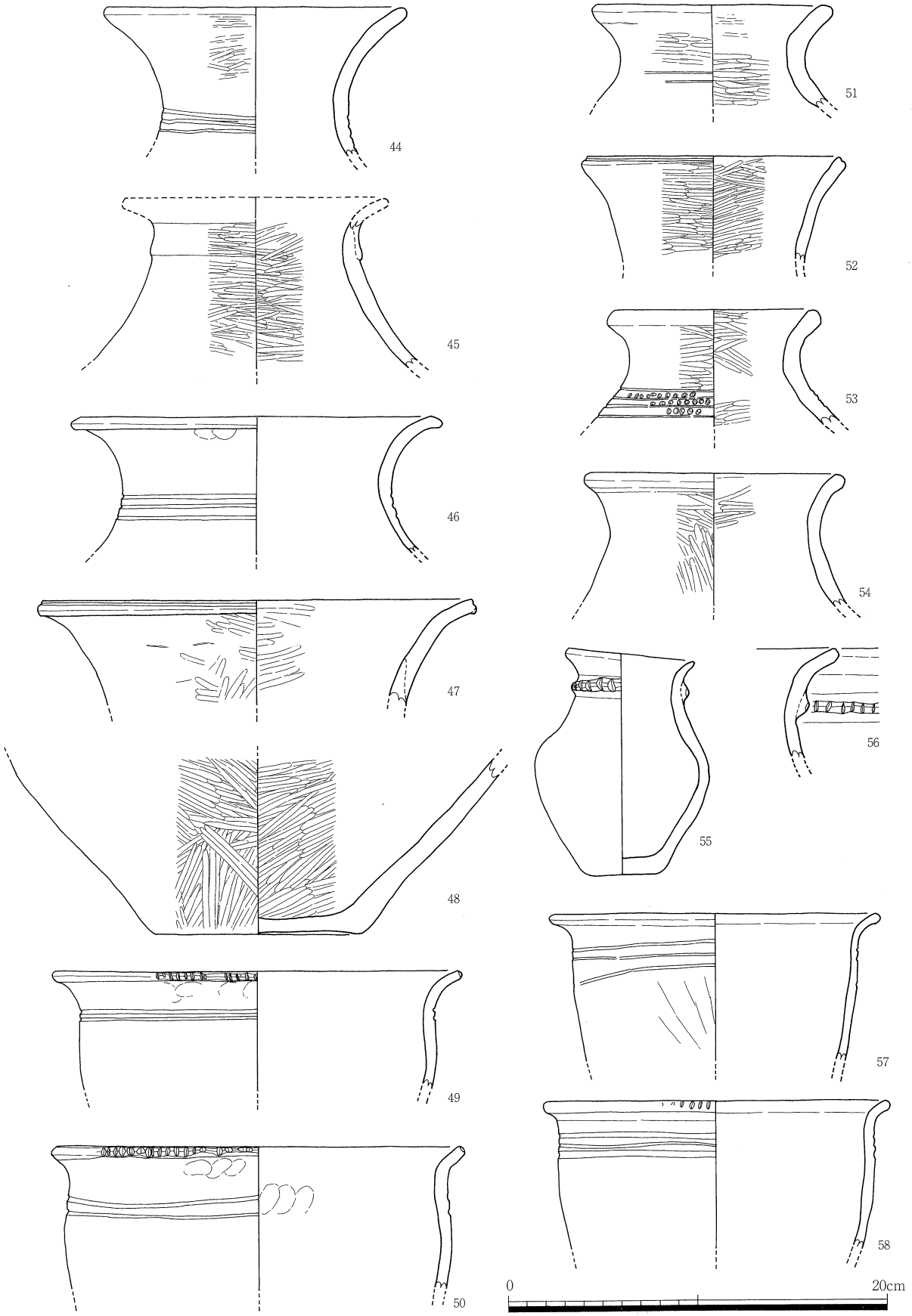


Fig042．SD091灰褐色層出土遺物（1）（S＝1/3）

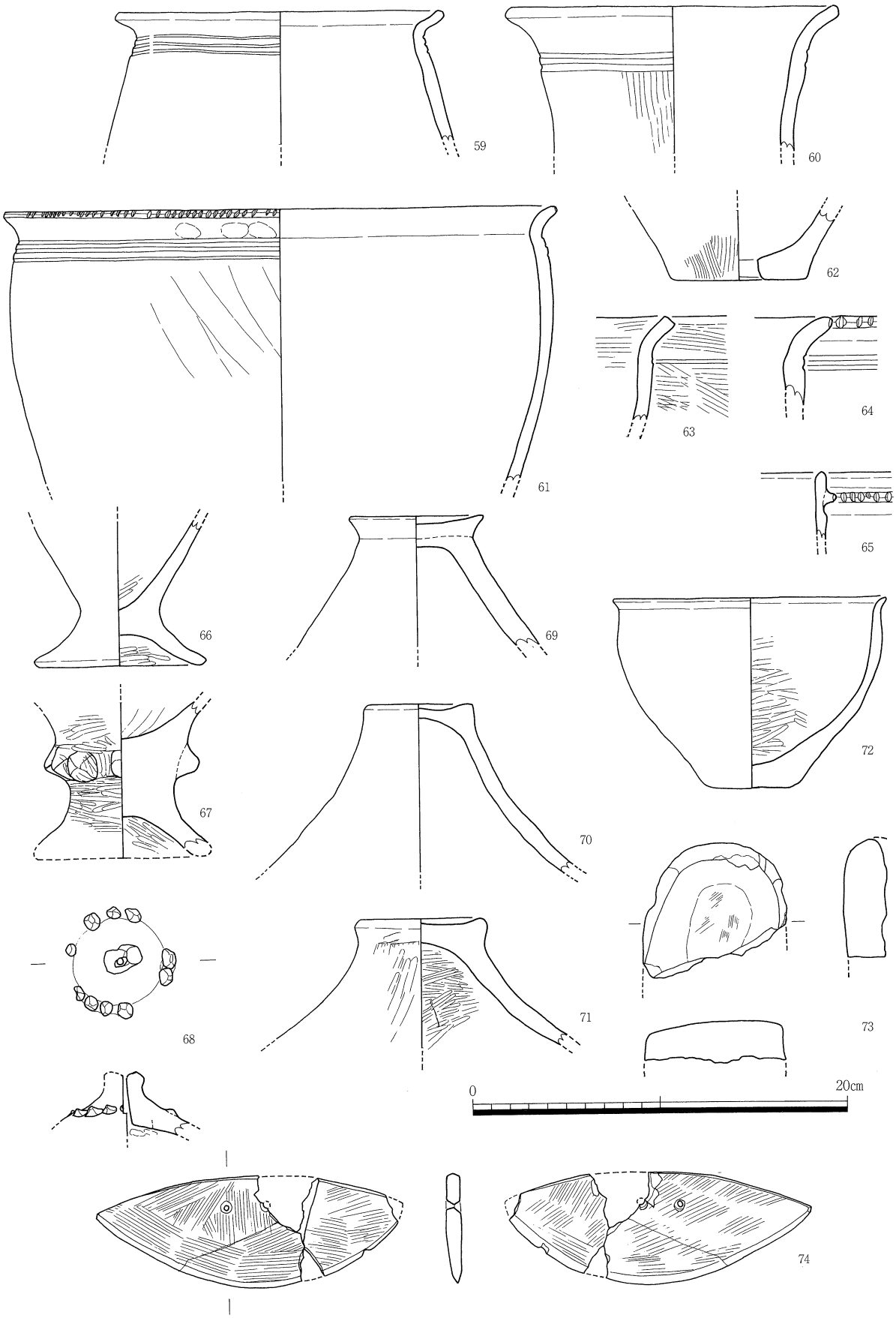


Fig043．SD091灰褐色層出土遺物（2）（S＝1/3）

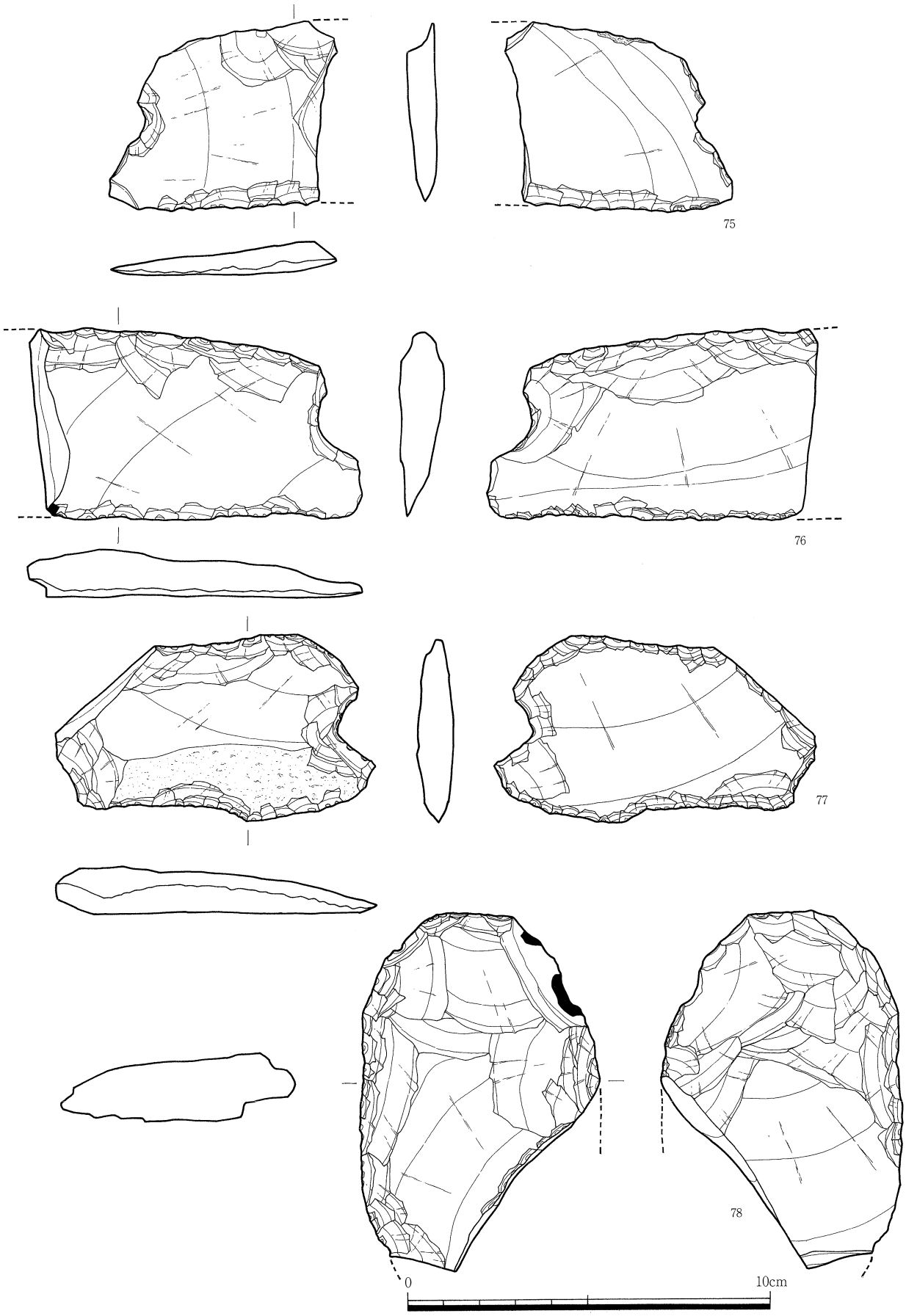


Fig044．SD091灰褐色層出土遺物（3）（S＝1/3）

蓋である。天井部径5.8cmを測り、体部の屈曲は強い。表面劣化のため内外面調整不明である。71は甕蓋である。天井部径7.0cmを測り、体部の開きは広い。内外面板状工具によるなでの後密なヘラミガキを行う。

鉢

72は小型の鉢である。口径14.6cm、器高10.1cm、底径4.8cmを測る。如意状に屈曲する口縁部を有し、胴部最大径は体部上半に位置する。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面はヘラミガキを行う。

石器

（擦石）

73は擦石と考えられる。大半を欠損し、本来の形状は不明である。中央部付近が最も摩滅の度合いが高い。石材は溶結凝灰岩である。

（磨製石包丁）

74は長さ15.8cm、幅6.0cm、厚さ7mmを測り、均整のとれた木葉形を呈する。紐部は外孔径6mm、内孔径1.7mmを測り、両面からの穿孔により成形する。研磨は非常に丁寧で、側縁部も密に研磨する。紐部に使用による摩滅等はほとんど見られない。

（打製石包丁）

75は幅5.0cmを測り、大半を折損する。抉りや全体調整はやや粗く、素材面を大きく残す。76は幅5.2cmを測り、1/2程度を折損する。抉り部に使用による紐擦れ等は見られない。77は幅5.0cmを測る。1/4程度を折損するが、折損部を研磨した痕跡があり、また刃部及び端部に打撃痕が多く残す事から、折損後何らかの再利用が行われたと考えられる。

（その他）

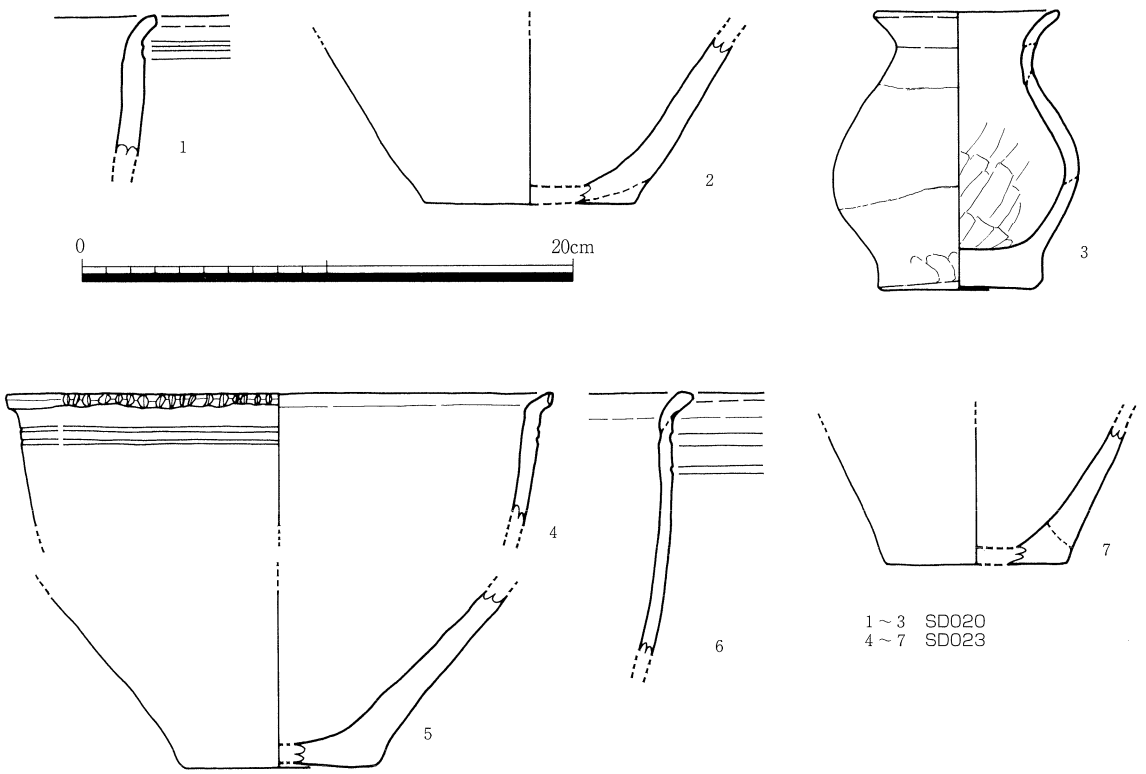


Fig045．SD020、023出土遺物（S＝1/3）

78は掻器であるが、打製石鏃の可能性もある。折損部以外を丁寧に打撃する。

区画溝出土の遺物

SD020出土遺物（Fig045、046）

甕（1）、壷（2、3）、石器（8）が出土した。

甕

1は短く外反する如意状の口縁部を持つものである。口縁部以下は比較的厚手で、口縁部直下に2条のヘラ描き沈線を有する。

壷

2は復元底径8.6cmを測り、平坦な底部と直線的な体部を有する。内面の一部にナデ調整の痕跡が残るが、その他は表面劣化のため調整は不明である。3は口径7.6cm、器高11.1cm、底径8.3cmを測る小型のものである。胴部最大径9.5cmを測り、最大径部は胴部中央よりやや下位に位置する。表面劣化のため外面調整は不明であるが、内面にはやや単位の細かい板状工具によるナデの痕跡が残る。

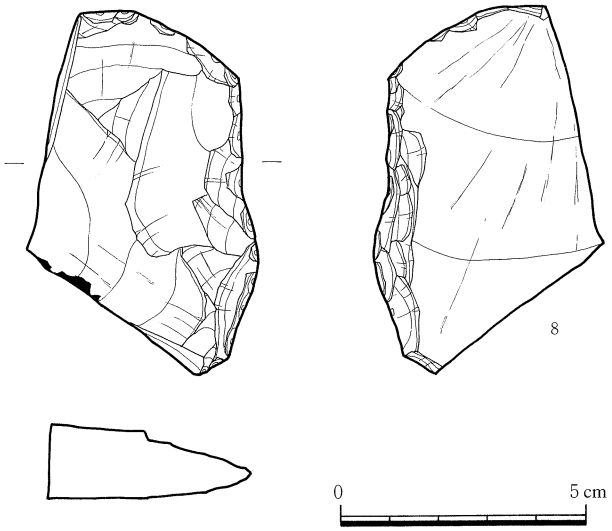


Fig046．SD020出土石器（S＝2/3）

石器

8は掻器もしくは打製石鏃である。長さ7.2cmを測り、多くの部分を折損する。上端部の一部には自然面が残る。石材はサヌカイトである。

SD023出土遺物（Fig045）

壷（5）、甕（4、6、7）が出土した。

壷

5は平坦な底部とやや広く直線的に広がる体部を有する。復元底径8.0cmを測る。表面劣化のため調整等は不明である。

甕

4は復元口径22.2cmを測り、短かく外反する如意状の口縁部を有する。口縁端部は若干肥厚し、口唇部には刻み目を施す。口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。6は若干薄手の如意状の口縁部を有し、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。7は復元底径8.4cmを測り、平坦な底部と直線的な体部を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。

SD024出土遺物（Fig047）

壷（6～14）、甕（1～4）、蓋（5）、土製紡錘車（16）、石器（15）が出土した。

壷

6は復元口径14.4cmを測り、ラッパ状に広く開く口縁部を有し、頸部には3条のヘラ描き沈線を有する。全体的にやや厚手である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。7は底径8.0cmを測り、平坦な低部と広く広がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。8は復元底径10.2cmを測り、平坦な底部と広く広がる体部を有する。外面表面劣化のため調整不明、内面板状工具によるナデの痕跡残る。9は復元底径11.0cmを測り、

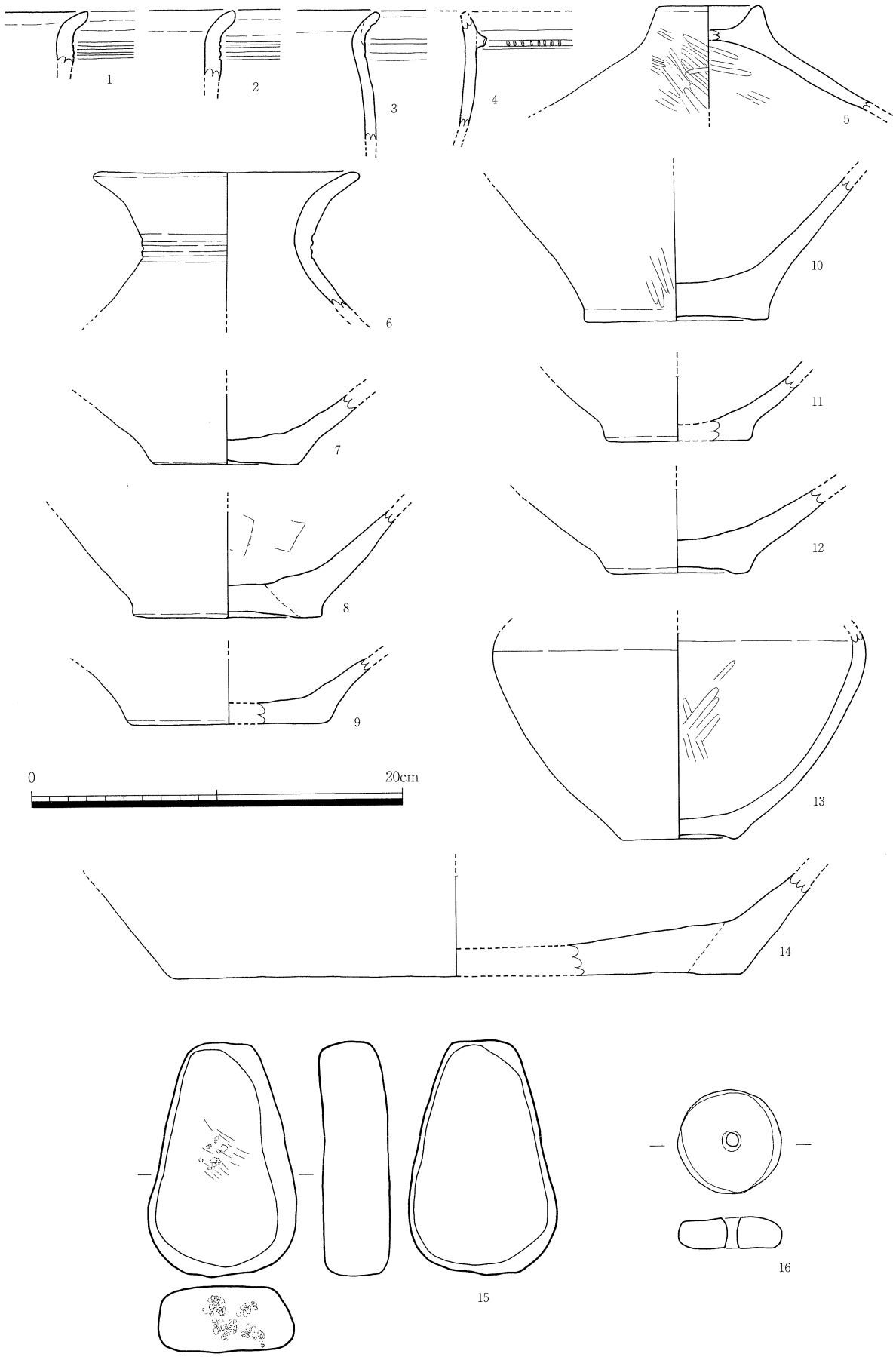


Fig047．SD024出土遺物（S＝1/3）

平坦な底部とやや広く広がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。10は底径10.0cmを測り、平坦な底部と直線的に広く広がる体部を有する。内面ナデ調整、外面縦方向のヘラミガキを施す。11は復元口径8.0cmを測る。表面劣化のため調整等は不明である。12は復元底径7.8cmを測り、やや上げ底の底部と広く広がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。13は復元底径6.0cmを測り、胴部中位付近まで残存する。外面表面劣化のため調整不明であるが、内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。14は復元底径30.8cmを測る大型の壷である。底部と体部の一部のみの破片のため器形等は不明である。表面劣化のため調整等も不明である。

甕

1は短く外反する如意状の口縁部を有し、やや厚手である。口縁部直下には最低3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。2はやや厚手で如意状の口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。3はやや薄手のもので、比較的長く伸びる如意状の口縁部を有する。口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。4は突帯文系とされている甕である。やや内湾する体部と、刻み目を持つ突帯を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

蓋

5は甕蓋である。天井部径5.5cmを測るが、天井部は歪んだ楕円径を呈する。天井部外面はやや深く窪み、内外面密にヘラミガキを行うが、天井部外面のみナデ調整である。

土製紡錘車

16は径5.5cmの円形を呈し、厚さ1.7cmを測る。穿孔は焼成前に両面から行われたと考えられ、外孔径9mm、内孔径5mm前後を測る。表面劣化のため調整等は不明である。

石器

15は泥岩製の石製品である。平面滴形を呈し、長さ12.4cm、最大幅8cm、厚さ3.5cmを測る。下端部に打撃痕を有する他、表面にかすかな打撃痕と擦痕を残す。

SD027出土遺物（Fig048）

壷（2）、甕（1）が出土した。

壷

2は底径8.4cmを測り、平坦な底部とやや開き気味の体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。内底面付近は剥離が著しい。

甕

1は復元底径6.6cmを測り、直線的に立ち上がる体部を有する。内面は被熱し赤変する。表面劣化のため調整等は不明である。

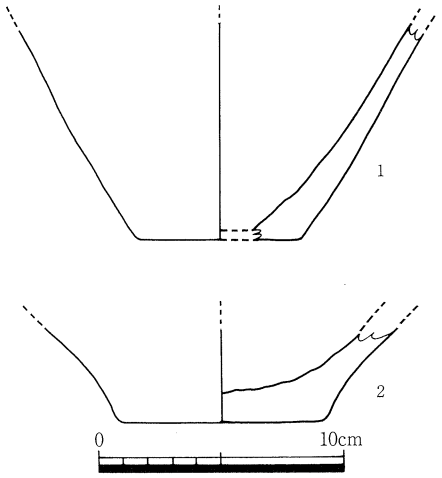


Fig048．SD027出土遺物（S＝1/3）

その他の溝出土の遺物

SD002出土遺物（Fig049）

壷（1）、甕（2）、須恵器杯蓋（3）が出土した。

壷

1は比較的直線的に開く口縁部を有し、頸部付近には3条の削

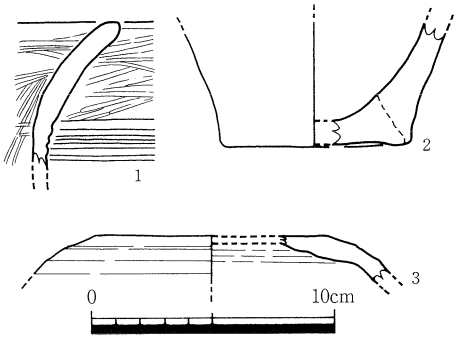


Fig049．SD002出土遺物（S＝1/3）

り出し突帯を有する。内外面比較的密なヘラミガキを施し、全体的に厚手である。

甕

2は復元底径7.8cmを測り、平坦な底部と急な角度で立ち上がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

須恵器杯蓋

3は復元天井部径9.4cmを測り、天井部を丁寧に回転ヘラケズリする。内面はヨコナデ調整である。

SD033出土遺物（Fig050、051）

壷（8～10）、甕（2～5）、鉢（6）、蓋（7）、高杯（1）、石器（11）

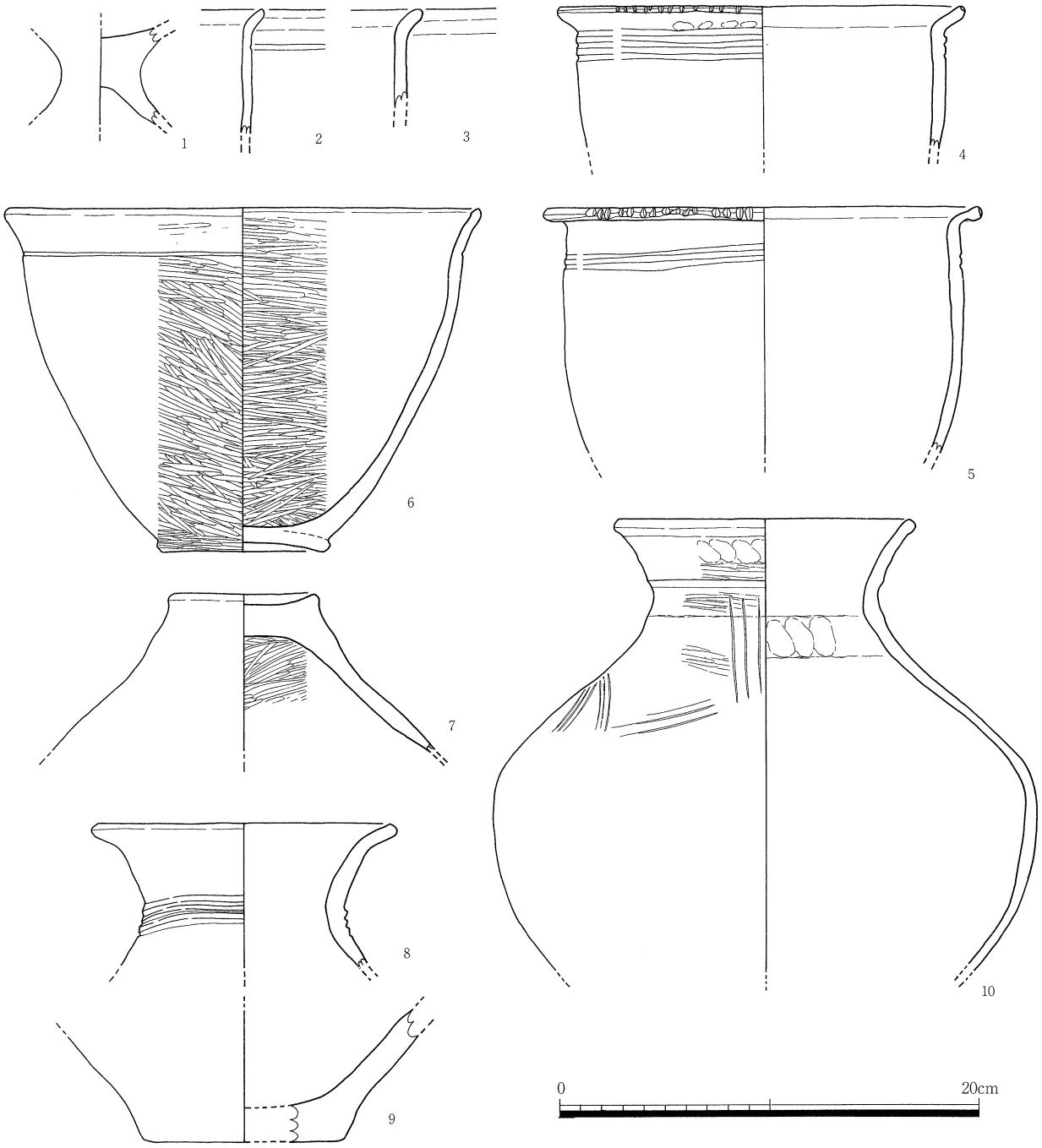


Fig050．SD033出土遺物（1）（S＝1/3）

壷

8は復元口径14.6cmを測り、ラッパ状に広く広がる口縁部を有する。口縁端部はやや肥厚して収まる。頸部には3条の沈線を有し、内外面表面劣化のため調整等は不明である。9は復元底径9.6cmを測り、平坦な底部と直線的な体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。10は復元口径14.0cm、胴部最大径26.0cmを測り、胴部最大径は肩部付近に位置する。口縁部は比較的長く斜め上方へ伸びるが、頸部直上に1段の段を有する。頸部から肩部にかけてはランダムなヘラ描き文を施す。内外面表面劣化が著しいが、頸部内面には粘土接合時のユビオサエの痕跡が多く残り、外面には横方向のヘラミガキがみられる。

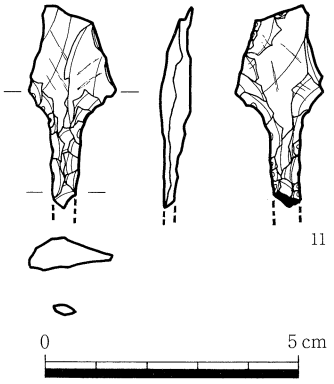


Fig051. SD033出土遺物（2）
（S＝2/3）

甕

2は直線的な体部と如意状の口縁部を有し、全体的に薄手である。口縁部直下には1条の沈線を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。3は直線的な体部と如意状に外反する口縁部を有し、2に比して若干厚手である。表面劣化のため調整等は不明である。4は復元口径19.6cmを測り、やや厚手で如意状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面はナデ調整を行う。5は復元口径21.0cmを測り、直線的な体部と如意状の口縁部を有する。口縁端部は肥厚して収まり、口唇部には刻み目を有する。口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

鉢

6は復元口径22.4cm、器高16.2cm、復元底径7.8cmを測り、わずかに外反する口縁部と直線的な体部を有する。底部はレンズ状に窪み、円板状を呈する。口縁部直下には1条のヘラ描き沈線を有し、内外面丁寧にヘラミガキする。ヘラミガキは底部外面にまで及ぶ。

蓋

7は甕蓋である。天井部復元径7.0cmを測り、湾曲する体部を有する。天井部内面に密なヘラミガキが残るが、それ以外は表面劣化のため調整不明である。

高杯

1は脚部のみ残存する。杯部、脚部ともに形態不明である。表面劣化のため調整等についても不明である。

石器

11は石錐である。長さ4.0cmを測り、頭部幅1.7cm、錐部幅6mmを測る。頭部の調整は丁寧でなく、素材面を多く残す。

土坑出土の遺物

SK018出土遺物（Fig052）

甕（1）が出土した。

1は復元底径6.4cmを測り、平坦な底部と直線的に立ち上がる体部を有する。底部は焼成後穿孔を行っている可能性があるが、破断部のため詳らかでない。表面劣化のため調整等は不明である。

SK025出土遺物（Fig052）

壷（2、4、5）、甕（3）、焼土塊（6）が出土した。

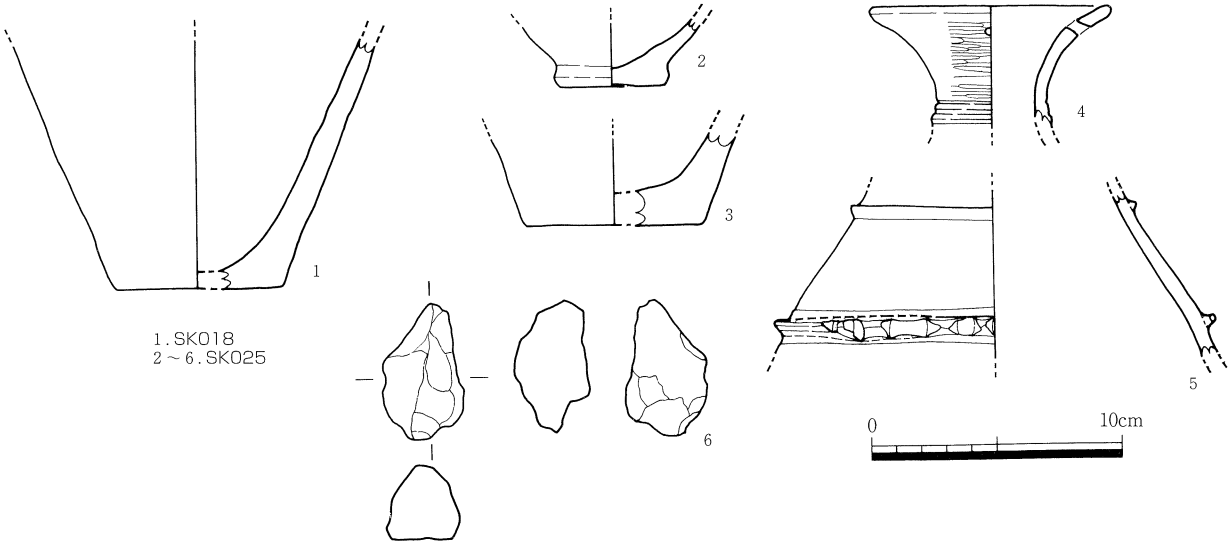


Fig052．SK018、025出土遺物（S＝1/3）

壷

2は底径4.4cmを測り円板状の底部と若干湾曲する体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。4は復元口径9.6cmを測り、強くすぼまる頸部と広く広がる口縁部を有し、頸部には2条の削り出し突帯を有する。口縁部には焼成前穿孔の円孔を穿つ。円孔は径5mm前後を測る。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面は密に横方向のヘラミガキを施す。5は体部の破片である。多重の突帯を有し、下段には指頭圧による刻み目を有する。表面劣化のため内外面調整は不明である。

甕

3は復元底径7.2cmを測り、平坦な底部と強く立ち上がる体部を有する。内外面表面劣化のため調整等不明である。

焼土塊

6は長軸5.6cm、短軸3.3cmを測り、片手で握りつぶして成形したような形態である。胎土は土器に類似し、やや精良である。

SK032出土遺物（Fig053～055）

壷（1～12）、甕（13～20）、蓋（21）、石器（22～27）が出土した

壷

1は頸部のみの破片である。頸部径11.8cm前後を測り、直行する頸部と、ラッパ状に広がる口縁部を有する。内面に2条の貼り付け突帯と、渦巻き状の貼り付け突帯を施す。表面劣化のため調整等は不明である。2も頸部のみの破片である。頸部は直行せず、緩やかに広がる口縁部を有する。頸部には7条のヘラ描き沈線を有する。3はやや立ち気味に開く口縁部を有する。内面には貼り付け突帯による浮文を有するが、どういったものなのか全体像は不明である。4は復元口径16.9cmを測り、やや強くすぼまる頸部と、緩やかに広く開く口縁部を有する。口縁端部は四角く収まり、口唇部に沈線状の窪みを有する。口縁部内面には1条の貼り付け突帯を有する。また、頸部外面には9条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。5は復元口径18.8cmを測り、直行する頸部と、広く広がる口縁部を有する。口縁部はやや肥厚して収まり、頸部には8条のヘラ描き沈線を有する。外面表面劣化のため調整等不明であるが、口縁部内面には密なヘラミガキが残る。6は7と同一個体と考えられ、直行する口縁部と、ラッパ状に広く開く口縁部を有する。頸部には4条の刻み目突帯と、1条の

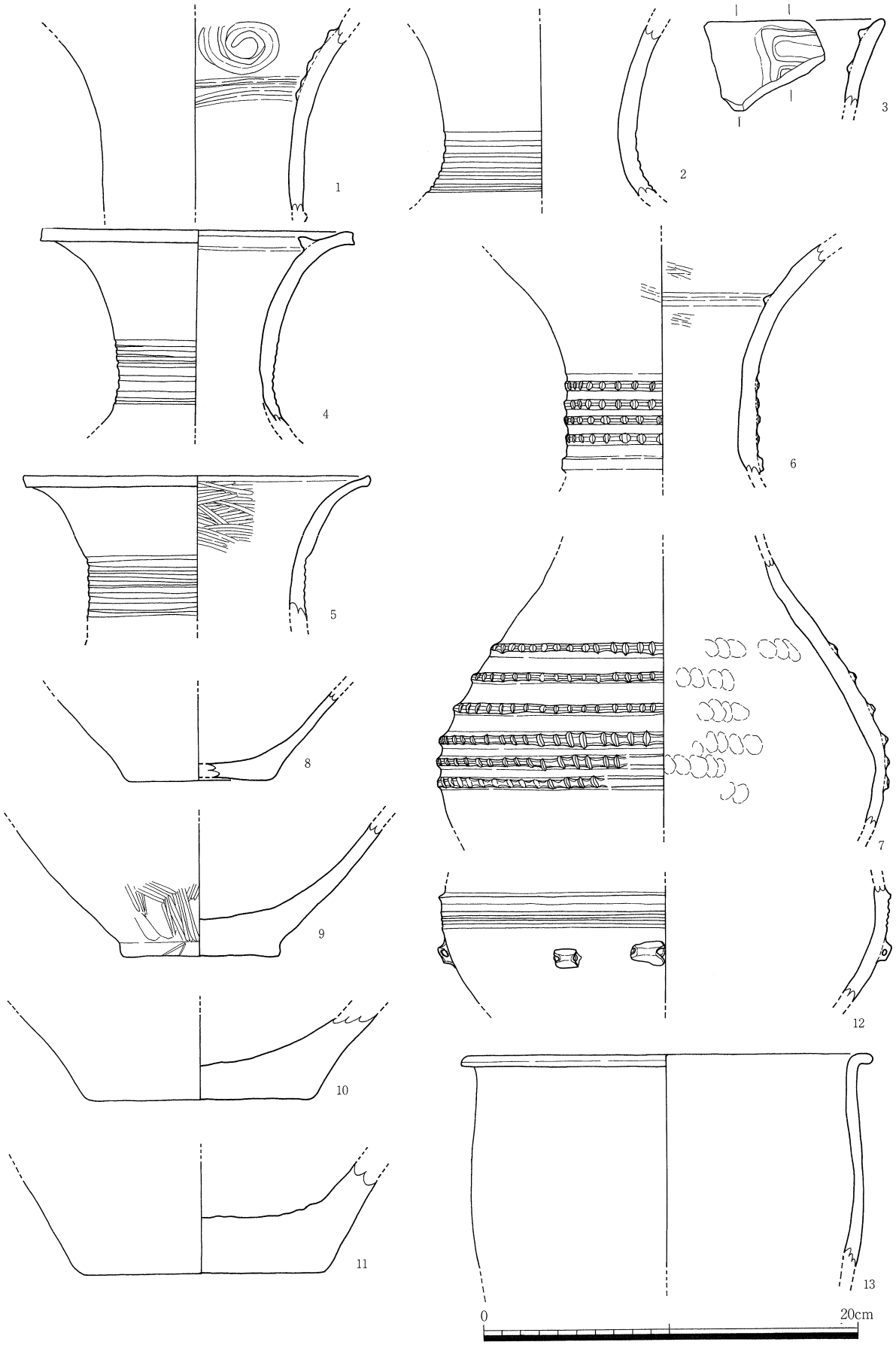


Fig053．SK032出土遺物（1）（S＝1/3）

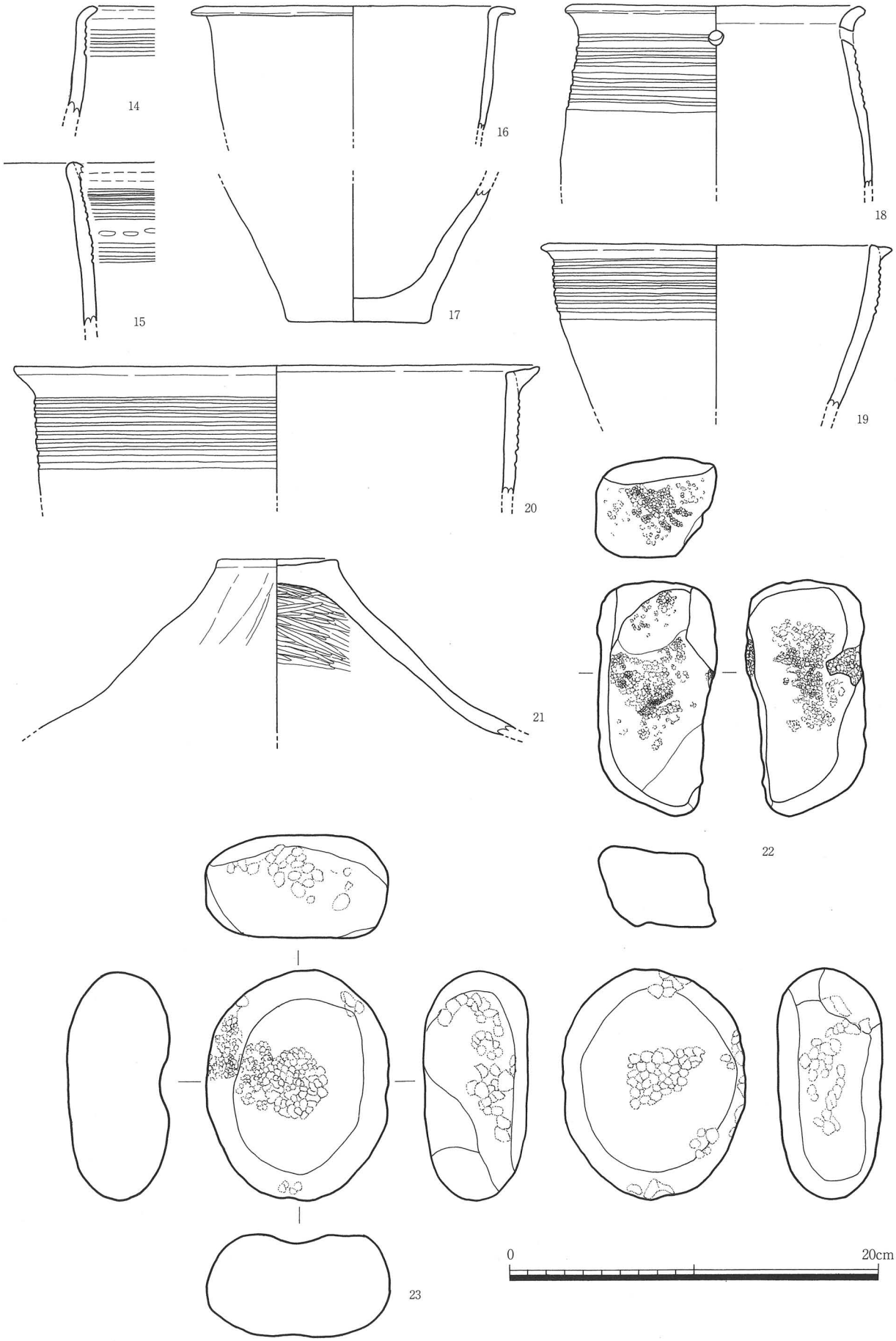


Fig054. SK032出土遺物（2）（S＝1/3）

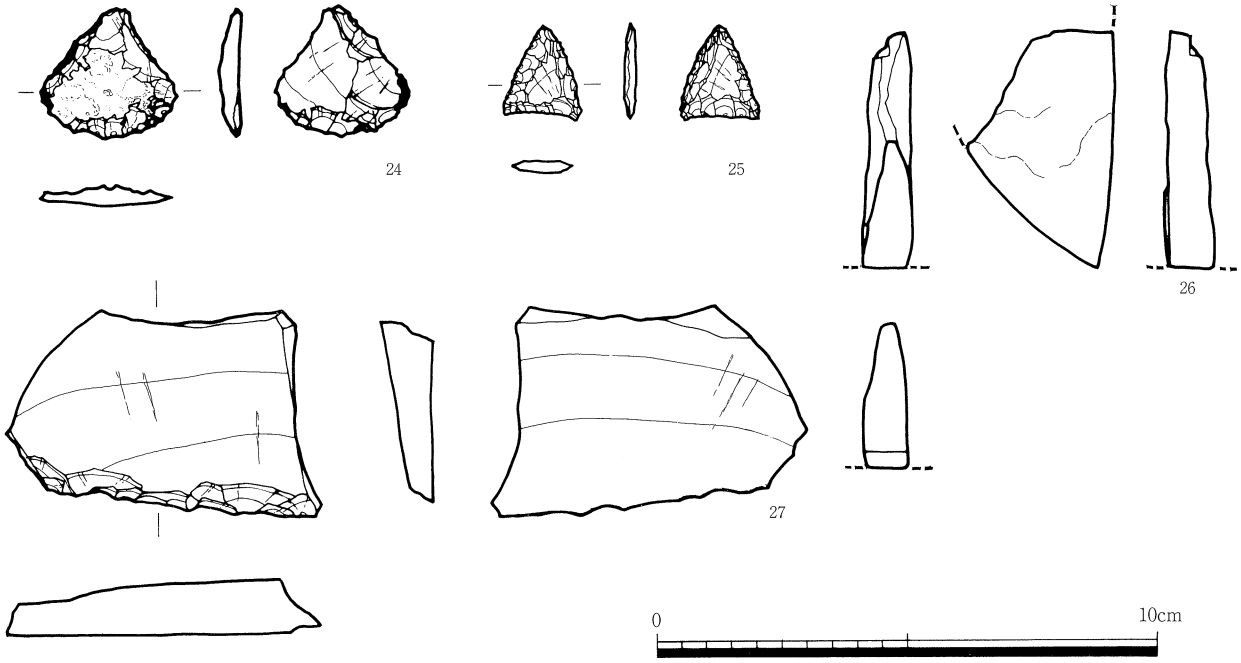


Fig055．SK032出土遺物（3）（S＝2/3）

突帯、口縁部内面には1条の貼り付け突帯を有し、内外面かすかにヘラミガキの痕跡が残る。突帯の刻みは2条を1単位として棒状工具により施文する。7は体部の破片である。下膨れの器形を呈し、胴部最大径24.2cmを測る。胴部には6条の刻み目突帯を有するが、その施文方法は3条を1単位として棒状工具により施文する。内外面表面劣化のため調整等は不明であるが、内面にはユビオサエの痕跡が残る。8は復元底径8.0cmを測り、平坦な底部と湾曲しながら開く体部を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。9は底径8.6cmを測り、若干円板状の底部を有する。表面劣化のため内面調整は不明であるが、外面には板状工具によるナデの後ヘラミガキを行った痕跡が残る。10は底径12.0cmを測り、平坦でやや肉厚な底部である。表面劣化のため内外面調整等は不明である。11は底径13.5cmを測り、非常に肉厚な底部である。内面剥落が著しく、外面も表面劣化のため調整不明である。12は器形不明である。胴部中央付近に1条の突帯と4条のヘラ描き沈線を有し、沈線直下には2つの紐孔を有する突起を貼り付ける、突起は長軸1.7cm、短軸1.0cm前後を測り、紐孔は径2mm前後を測る。

甕

13は復元口径22.0cmを測り、直線的な体部と、逆「L」字状に折り曲げる口縁部を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。14は如意状に短く外反する口縁部を有する。口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を有し、表面劣化のため調整等は不明である。15はやや内湾する体部と、玉縁状に収まる口縁部を有する。口縁部直下には6条1単位の沈線と、3条1単位の沈線を有し、沈線群の間には刺突文を施す。内外面表面劣化のため調整等不明である。16は復元口径17.8cmを測り、やや湾曲する体部と、逆「L」字状に折り曲げる口縁部を有する。内外面表面劣化のため調整等不明である。17は復元底径8.4cmを測り、平坦な底部と直線的に開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。18は短く外反する如意状の口縁部を有する。口縁部直下には10条のヘラ描き沈線と、1つの円孔が穿たれる。円孔は径7mm前後を測り、対になるものが存在したのかどうか不明である。表面劣化のため調整等は不明である。19は復元口径10.0cmを測り、外傾する体部と逆「L」字状の口縁部を有する。口縁部直下には9条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。20は復元口径28.6cmを

測り、直線的な体部と、逆「L」字状の口縁部を有する。口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

蓋

21は張り出しのない天井部と、広く広がる体部を有し、天井部径6.6cmを測る。表面劣化のため調整は不明瞭だが、外面には板状工具によるナデの痕跡が残り、天井部内面にはヘラミガキがみられる。

石器

（凹石）

22は長軸12.9cm、短軸7.5cmを測り、不整形な形態を呈する。表面に若干の研磨、裏面に打撃痕を有し、上端面にも打撃痕を有する。石材は溶結凝灰岩である。23は長軸12.5cm、短軸10.0cmを測り、円形で表面の窪みが著しい。表裏面に打撃痕を有し、打撃痕の一部は側縁部にも達する。石材は溶結凝灰岩である。

（石鏃）

24は長さ2.6cm、基端幅2.6cm、厚さ3.5mm、重量2.4gを測る平基式のものである。素材面を多く残し、未製品であると考えられる。25は長さ1.9cm、基端幅1.5cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量0.7gを測る。石材はいずれもサヌカイトである。

（柱状片刃石斧）

26は大半を欠損し、本来の形状は不明である。比較的肉厚のものと考えられ、先端部には使用の痕跡はみられない。

（掻器）

27は長さ6.3cm、幅5.2cmを測る。刃部は背面側からの打撃で作られる。刃部先端付近には自然面もみられる。石材はサヌカイトである。

SK048出土遺物（Fig056）

壷（1、2）が出土した。

1は復元口径18.8cmを測り、やや厚手でゆるやかに開く口縁部を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。2は底径9.0cmを測り、平坦な底部と広く広がる体部を有する。内面には指頭圧痕を多く残し、外面板状工具によるナデの後ヘラミガキを施す。

SK058出土遺物（Fig056）

甕（3～5）が出土した。

3は薄手で、如意状に外反する口縁部を有する。口縁部直下に1条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。4はやや厚手で、如意状に外反する口縁部を有する。口縁部直下には1条の沈線を有する。5は復元底径7.0cmを測り、平坦な底部と直線的に立ち上がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

SK078出土遺物（Fig056、057）

壷（6～9）、石器（15）が出土した。

壷

6は屈曲の強い口縁部の破片である。やや薄手で、屈曲部には沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。7は緩やかに開く口縁部の破片である。やや薄手で、口縁部直下に1段の段を有する。表面劣化のため調整等は不明である。8は緩やかに開く口縁部の破片である。口縁端部は若干肥厚し、頸部には1条の削り出し突帯を有する。表面劣化のため調整等は不明である。9は復元底径6.0cmを測り、表面劣化のため調整等は不明である。

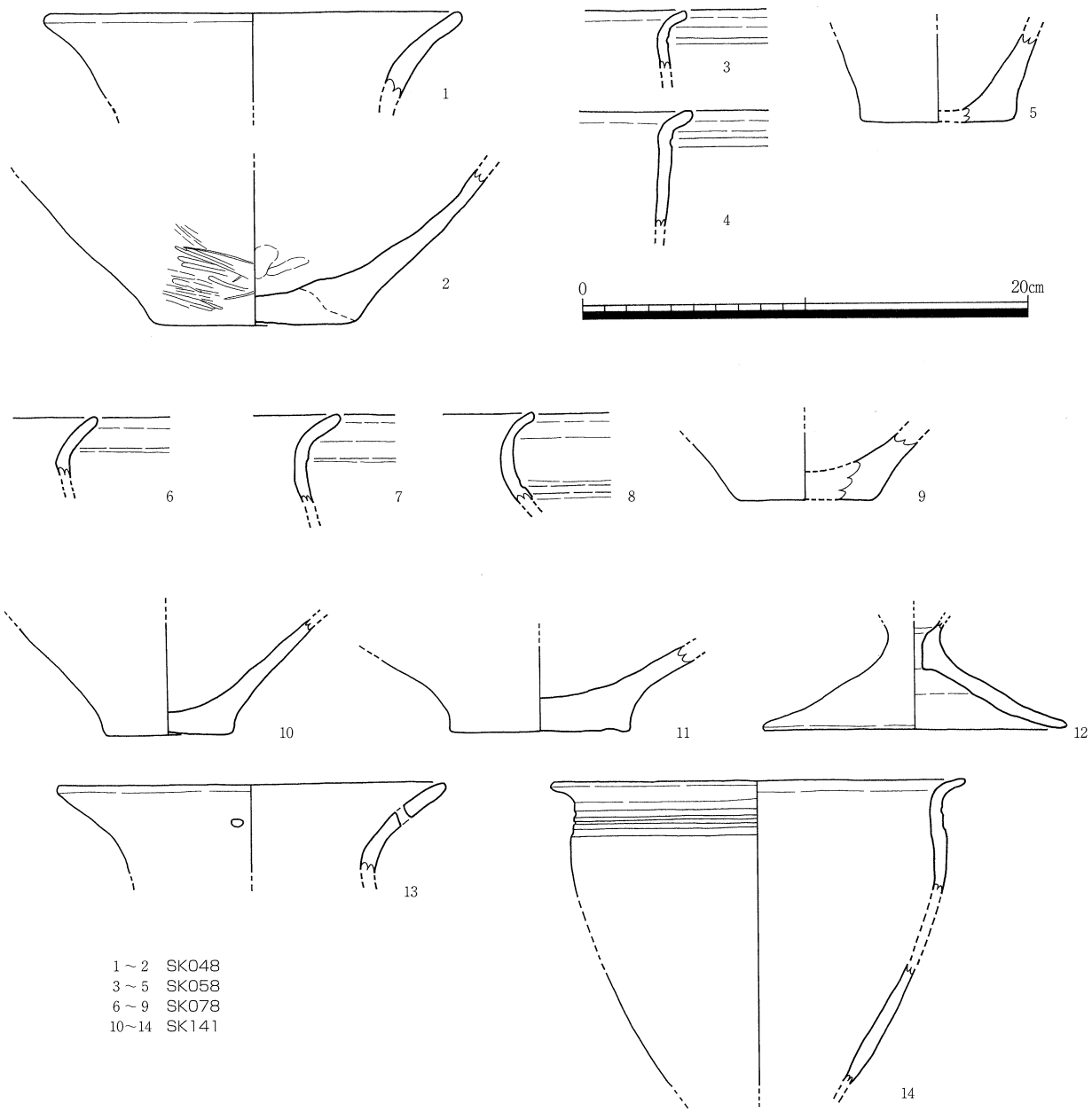


Fig056. SK048、058、078、141出土遺物（S＝1/3）

石器

15は掻器である。大半を折損し、本来の形状は不明である。あるいは石鍬の可能性もあるが判断できない。石材はサヌカイトである。

SK141出土遺物（Fig056）

壷（10、11、13）、甕（14）、蓋（12）が出土した。

壷

10は底径5.8cmを測る。若干円板状を呈する底部と直線状に開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。11は底径8.0cmを測り、円板状の底部を有す

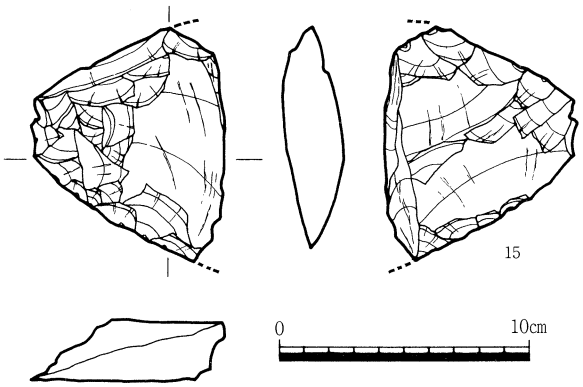


Fig057. SK078出土石器（S＝1/3）

る。外底面には籾状の圧痕を有する。表面劣化のため調整等は不明である。13はなだらかに広がる口縁部の破片である。口縁部直下には焼成前に穿孔された1つの円孔を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

甕

14は復元口径18.2cmを測る。やや薄手で、強く外反する如意状の口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

蓋

12は復元口径13.6cmを測り、ラッパ形に開くやや器高の低いタイプのものである。つまみの形状は不明であるが、中央部には円孔を1つ有する。胎土は褐色で、2mm前後の長石粒をやや多く含む。

住居址出土の遺物

SH051出土遺物（Fig058）

甕（1、2）、石器（3）が出土した。

甕

1は厚手で、短く外反する如意状の口縁部を有する。口唇部には刻み目を有し、口縁部付近には内外面ユビオサエの痕跡を多く残す。表面劣化のためその他の調整については不明である。2はいわゆる突帯文系の甕である。口唇部はわずかに外側へ肥厚し、突帯は断面三角形を呈する。表面劣化のため調整等は不明である。

石器

3は台石である。長軸13.3cm、短軸10.2cmを測り、いびつな円柱状を呈する。表面中央付近に打撃痕を有し、打撃痕の一部は溝状を呈する。側縁部は磨滅が著しいが、意図的なものとするより手擦れによる摩滅と考えられる。石材は溶結凝灰岩である。

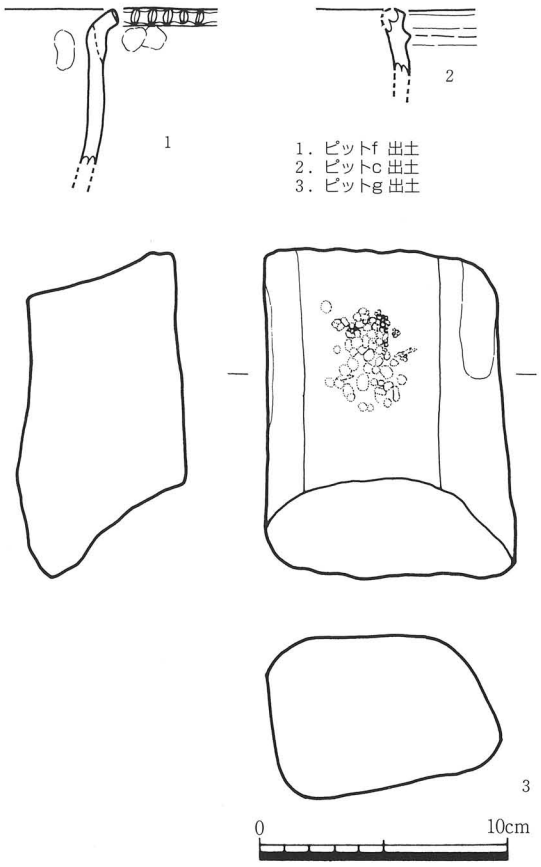


Fig058．SH051出土遺物（S＝1/3）

ピット出土の遺物

SP046出土遺物（Fig059）

甕（2）、壷（3）が出土した。

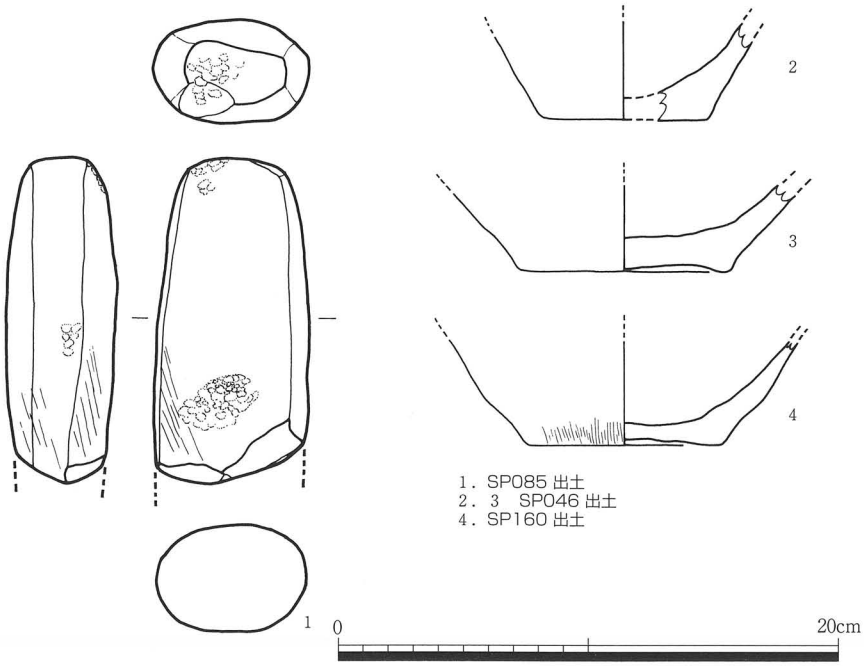


Fig059．SP046、085、160出土遺物（S＝1/3）

甕

2は復元底径6.6cmを測り、平坦な底部と直線的な体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

壷

3はやや上げ底を呈する底部と直線的な体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

SP085出土遺物（Fig059）

石器（1）が出土した。

1は磨製の太型蛤刃石斧である。長さ13.4cm、幅6.1cmを測る。基部付近はほぼ完全に残るが、刃部付近は欠損する。欠損部には打撃痕が多く残り、叩き石として再利用したものと考えられる。石材は溶結凝灰岩である。

SP106出土遺物（Fig060）

甕が出土した。口径19.4cm、器高21.5cm、底径6.2cmを測る。比較的直線的な体部と逆「L」字状の口縁部を有する。残存率は高いが、完形ではなく、一部を欠損する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等は不明である。

SP160出土遺物（Fig059）

壷（4）が出土した。復元底径7.8cmを測り、やや上げ底状を呈し歪みが大きい。内面表面劣化のため調整不明であるが、外面には細かいハケ調整を施す。

SP166出土遺物（Fig061）

石器（1、2）が出土した。

1は石鏃である。長さ1.7cm、基端幅1.6cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量0.6gを測る。2は楔形石器である。長さ2.3cm、幅2.8cm、厚さ7mmを測り、上端部に打撃痕、下端部には階段状剥離が連続する。

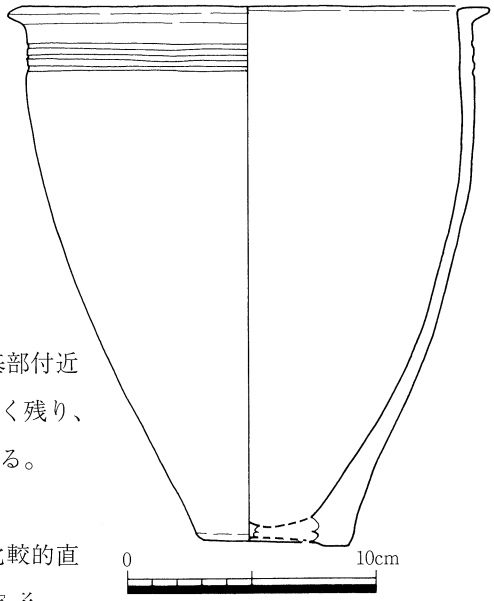


Fig060．SP106出土遺物（S＝1/3）

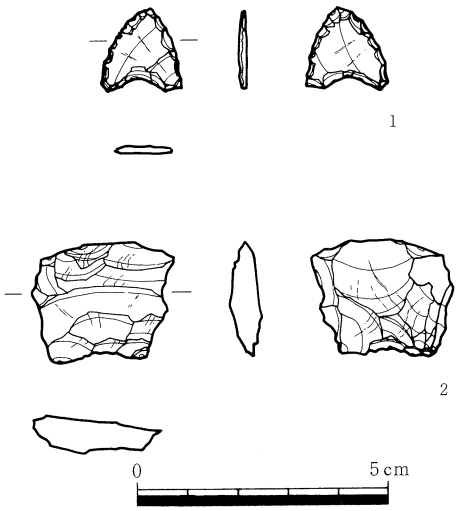


Fig061．SP166出土遺物（S＝2/3）

その他の遺構出土の遺物

SK126出土遺物（Fig062）

土錘が出土した。長軸4.0cm、短軸2.2cmを測り、重量は18.0gを測る。長軸中央部に溝が全周する。胎土は淡褐色で非常に精良である。遺構の状況等より近代のものと考えられる。

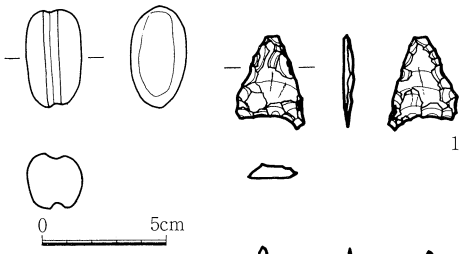


Fig062．SK126出土遺物（S＝2/3）

包含層出土の遺物（Fig063）

石鏃（1、2）が出土した。

1は長さ1.8cm、基端幅1.35cm、厚さ2mmを測る凹基式のものである。重量は0.4gを測る。2は長さ4.65cm、基端幅1.25cmを測る大型の凹基式のものである。重量2.1g前後を測り、当遺跡では他に例を見ない形態である。

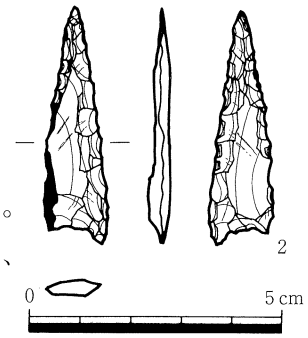


Fig063．包含層出土遺物（S＝2/3）

VII. 調査のまとめ

1. 遺構の変遷

これまでに調査の事実関係を述べてきたが、本章ではこれらについてまとめを行う。本節では遺構の変遷について整理する。遺構の変遷については、本来当遺跡独自に土器編年を整理し、これをもとに変遷を復元することが正しい方法であるが、環濠出土資料を中心とした現在の資料の状況では独自の編年を整備する事が困難なため、主に既往の土器編年をもとに整理を行う。参考とした土器編年は、同じ金蔵川流域にあたる龍川五条遺跡の資料を元に組上げられた森下英治氏らの編年観（森下1998、乗松・森下・信里2000）である。

前期Ic～IIa期

当遺跡の出現期と考えられる。まとまった資料は少ないが、SD033は比較的良好な資料である。また、SD031の機能時の埋土である暗灰色砂質粘土からは如意状口縁、無沈線の甕や肩部に3条沈線を有する壷などが出土している。SD031の掘削開始はIc段階まで遡らせることが可能かと思われる。SD031暗灰色砂質粘土出土遺物のなかには肉厚で逆「L」字状口縁を有し、口縁部直下に1条の沈線を有する甕がある。龍川五条遺跡においては逆「L」字状口縁はIIb期以降の指標となっているが、このタイプは通常の逆「L」字状口縁に先行する要素が強く認められ、IIa期の範疇におさまるものと考えられる。このことから、SD031はIc期に開削され、IIa期には機能を停止したものと考えられる。「松菊里型」住居SH051や、柵列SA050などもこの時期に属すると考えられる。

前期IIa期

遺構が幅広く展開するようになる時期である。

良好な資料に恵まれないが、2次調査SD8101や、9次調査の成果からSD005がこの段階で開削されたと考えることができる。また、SD006、080、091の資料の中にもこの段階と考えられる資料が多く見られる。これら環濠の拡大に加え、区画溝の出現もこの段階と考えられる。区画溝の機能については後述するが、一見同時期にみられた溝群にも若干の時期差を想定することができそうである。

先述のように、この段階にはSD031が人為的に埋められるという現象がみられる。これに伴って、9次調査の結果からはSD005の一部もこの段階に機能を停止したことが考えられる。前期IIa期は当遺跡における大規模な改変期と位置付けられよう。

前期IIb～IIc期

SD006、091、080が機能しており、001、003が新たに開削される。この段階では合計3本の環濠が機能していることと考えられる。しかし環濠の多くは埋没が進行し、幅を狭めていたと考えられる。環濠内部の土坑、ピットの多くもこの段階に属する。

当遺跡においては7条以上の多条化したヘラ描き沈線を持つ逆「L」字状口縁の甕が出現するIIc段階を最後に遺構が消滅する。ただ、9次調査などでは櫛描きのものが出土しており、部分的に前期最終末から中期初頭まで集落が機能していたものと考えられる。

2. 建物について

今回の調査では環濠内部において多くのピットを検出した。集落内部の構造についてはそれが通常の生活空間であったのか、特殊な非日常空間であったのか、また日常的な特別空間（倉庫など）であったのか議論が行われている。残念ながら今回の調査では建物については「松菊里型」住居1棟を検出したのみであった。当遺跡は先述のとおり削平が著しく、当初のピットの大半が消滅していると考えられる。現地の調査段階においても

Fig064. 中の池遺跡8次調査遺構変遷図

Fig065. 建物復元図

明らかに建物と認定できるものは確認できなかった。しかし、弥生時代の建物は非常に不安定な形状のものが多く、認定が難しいため図面上での再検討を行った。

建物の復元は本来調査段階で埋土の状況、可視的条件下での空間的状況をもとに検討を行ったもののみ認定可能である。したがって、図化された平面的情報からの建物復元は、机上の空論とならざるを得ないことは否めない。今回の建物復元案はあくまで1案であることを断っておく。

復元できた建物はFig65のとおりである。建物1～7が復元でき、建物の可能性のある柱列が1～3の3列復元できた。いずれも想像の域を出ないが、非常に規模が小さく、1間もしくは2間の柱間である。このうち南半の1間×1間のものは竪穴式住居の主柱痕跡の可能性もある。調査区西部のピット集中部については復元が困難であったため、主柱箇所に網掛けを行ったのみで留めた。これら復元した建物の状況と、SD091の遺物出土状況をあわせて考えると、環濠内部に居住地が存在したと考える事が妥当であろう。

3. 遺構・遺物の評価

多重環濠について

今回の調査では、外側の環濠が4重までは確認できたが、これがどこまで多重化していくのかについては調査面積の制約から不明な点が多い。ただ、これらの環濠断面はU字状を呈するものであり、その内側に更にV字状を呈する環濠が存在していることから、少なくとも5重以上となることが確定したといえよう。しかしながらこれらの環濠には微妙な時期差が存在し、多重環濠の形成については今後慎重な検討が要求されることになろう。

V字状環濠について

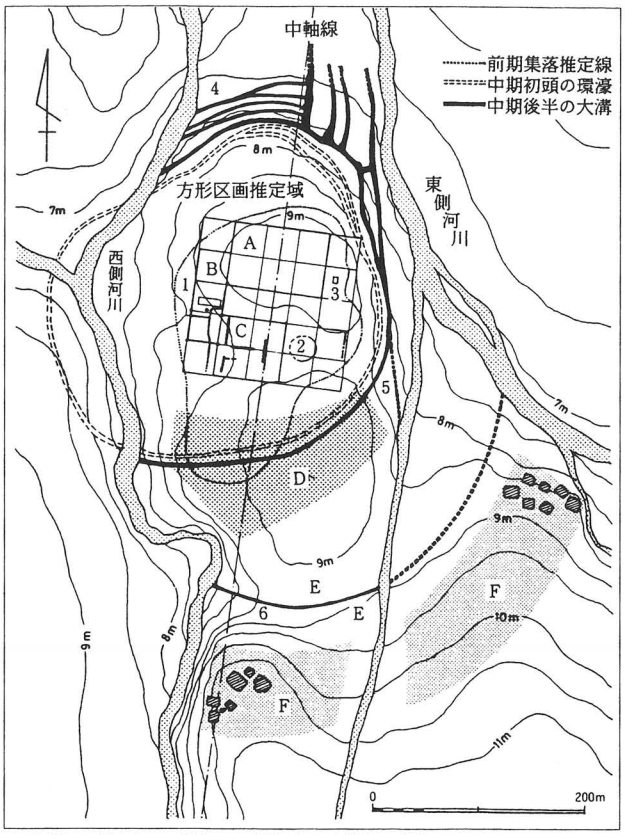
多重環濠の最内部に所在する。断面がV字を呈しており、外側の環濠とは様相を異にするものである。この環濠の内側に認められる杭痕と、環濠内堆積土が一気に内側から外側へと埋め戻されたという事実より、本来は環濠を掘削した土を、そのまま環濠内部に盛り上げて杭によって土留めをしていたということが考えられる。土を盛り上げることによって環濠の深さに加えて高さを更に高めるという意図が働いたのではないだろうか。当遺跡と同様にV字状環濠に伴って杭列が巡る事例は、岡山県小田郡矢掛町清水谷遺跡で確認されており、当遺跡が二例目の発見となる。

方形区画溝について

方形区画溝はV字状環濠の外側に存在する。住居跡周溝の可能性も考えられたが、当遺跡の削平が激しいことを勘案するならば、その可能性は少なくなるだろう。大阪府和泉市池上・曽根遺跡で複数の弥生時代中期段階とされる方形区画が検出されているが、これら区画溝は大型高床式建物などの祭祀空間と工房などの生産空間を区画するためのものとされる（乾 1996）。このようなもの

Fig066. 岡山県矢掛町清水谷遺跡の環濠、柵列、建物配置図（報告書より）

の粗型として、当遺跡の方形区画溝を考えることも可能であろう[1)]。環濠自体が既に内と外とを区分することを、可視化した施設である。当遺跡では更に環濠内部にV字状環濠と方形区画溝という二つの明確な区分が存在している。これらは緊張関係に起因する防御施設とは考えがたく、中国東北地方やヨーロッパの新石器時代初期農耕段階において、集落内の紐帯関係の強まりに起因すると考えられる環濠などの区画施設と類似したものであることが想定される。



A.首長居館　B.祭殿域　C.工房域　D.一般居住域　E.空閑地　F.墓域
1.大型高床式建物　2.円形台地　3.大型掘立柱建物　4.多重環濠帯　5.内濠　6.外濠

Fig067. 大阪府和泉市池上曽根遺跡における方形区画（乾1996より）

「松菊里型」住居について

当遺跡で検出された松菊里型住居は、一般的に韓国・忠清南道松菊里遺跡などで発見されている無文土器時代の住居跡と類似した形態のものを指す。香川県下では当遺跡例は4例目となる。当の無文土器自体は弥生時代前期前半段階が主体であり、北部九州ではこの段階に松菊里型住居も多く見られる。しかし、瀬戸内地方では弥生時代前期後半～中期にかけての段階が中心であり、北部九州とは時間差が明確に認められる。このように新しい段階のものも松菊里型に含めてしまってよいのかどうかは、後の「10型中央土坑」住居と関連する可能性もあり検討を要するだろう。

底部焼成後穿孔甕について

今回環濠より出土した土器について、底部焼成後穿孔の認められる甕の数をカウントした。底部焼成後穿孔甕については、「甑」としての利用をおこなったとする説が有力である。しかし、それならば何故土器焼成以前に穿孔をしないのかという疑問に対しては、まだ明確な回答は得られていない。弥生時代中期に至ってはじめて焼成後穿孔のものが現れるという（木下 1976）。この問題について、今回のデータだけでは何ら回答はえられない。しかし、これからこの問題について検討可能なように、中の池遺跡のような拠点的集落ではデータを蓄積していくことが必要であろう。

Tab001. 甕底部穿孔の比率

SD090灰白色層	
穴なし	5
SD090黒褐色層	
穴なし	43
穴あり	3
SD090灰褐色層	
穴なし	4
穴あり	1
SD090層位不明	
穴なし	9
穴あり	2

SD091灰白色層	
穴なし	4
SD091黒褐色層	
穴なし	63
穴なし	6
SD091灰褐色層	
穴なし	42
穴あり	5

数字は破片数。
孔の有無不明のものはカウントせず。

【註】1)これらの区画溝を弥生時代の所産ではなく、古代・中世の土地改変行為の産物であるとの解釈もある（秋山 1999）。

【引用・参考文献】

秋山浩三 1999「池上曽根遺跡「都市」方形区画論と古代中世某施設」『大阪文化財研究』16（財）大阪府文化財調査研究センター

東 信夫・角南聡一郎 2001「弥生時代前期環濠集落の内部施設」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』日本考古学協会

乾 哲也 1996「弥生中期における池上曽根遺跡の集落構造」『ヒストリア』152 大阪歴史学会

木下正史 1976「古代炊飯具の系譜」『古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂

徐 光輝 2000「中国東北地方の環壕集落について」『東夷世界の考古学』青木書店

菅榮太郎 1999「弥生時代環濠集落小論」『考古学に学ぶ』同志社考古学シリーズ刊行会

角南聡一郎 2002「高地という『場』をめぐって」『古代文化』54-4 （財）古代學協會

武田恭彰・藤江 望 2001『清水谷遺跡』 矢掛町教育委員会

寺澤 薫 2000『王権誕生』小学館

乗松真也・森下英治・信里芳紀（2000） 「讃岐地方における弥生土器の基準資料III－前期後半～中期前葉の土器を中心として－」『研究紀要』VIII （財）香川県埋蔵文化財調査センター

松本和彦 2000「「1○型中央土坑」について」『松波・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」『龍川五条遺跡II 飯野東分山崎南遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター

吉留秀敏 1996「弥生時代環濠集落の変遷」『牟田祐二君追悼論集』

VIII.附論

弥生時代前期の蓋形土器

—蓋の再発見と四国の事例—

1. はじめに

中の池遺跡第8次調査では、弥生時代前期～中期初頭の蓋形土器(以下蓋と省略する)11点が出土した(Fig069)。蓋形土器には壺用と甕用の二者が存在している。我々は今日、先行研究を学ぶことにより、こうした形状の資料が蓋であることを容易に想像することが可能である。しかし、このように現在はごく普通に蓋とされている土器は、一体いつから「蓋」であると認識されるようになったのであろう。つまり、弥生土器の蓋を発見したのはいつごろであり誰なのか。そこで本稿では、この素朴な疑問に答えるべく研究史を紐解き、蓋の発見について明らかにしてみたい[1]。また、四国地方の弥生時代前期～中期初頭の蓋について集成を試み、簡単な検討を試

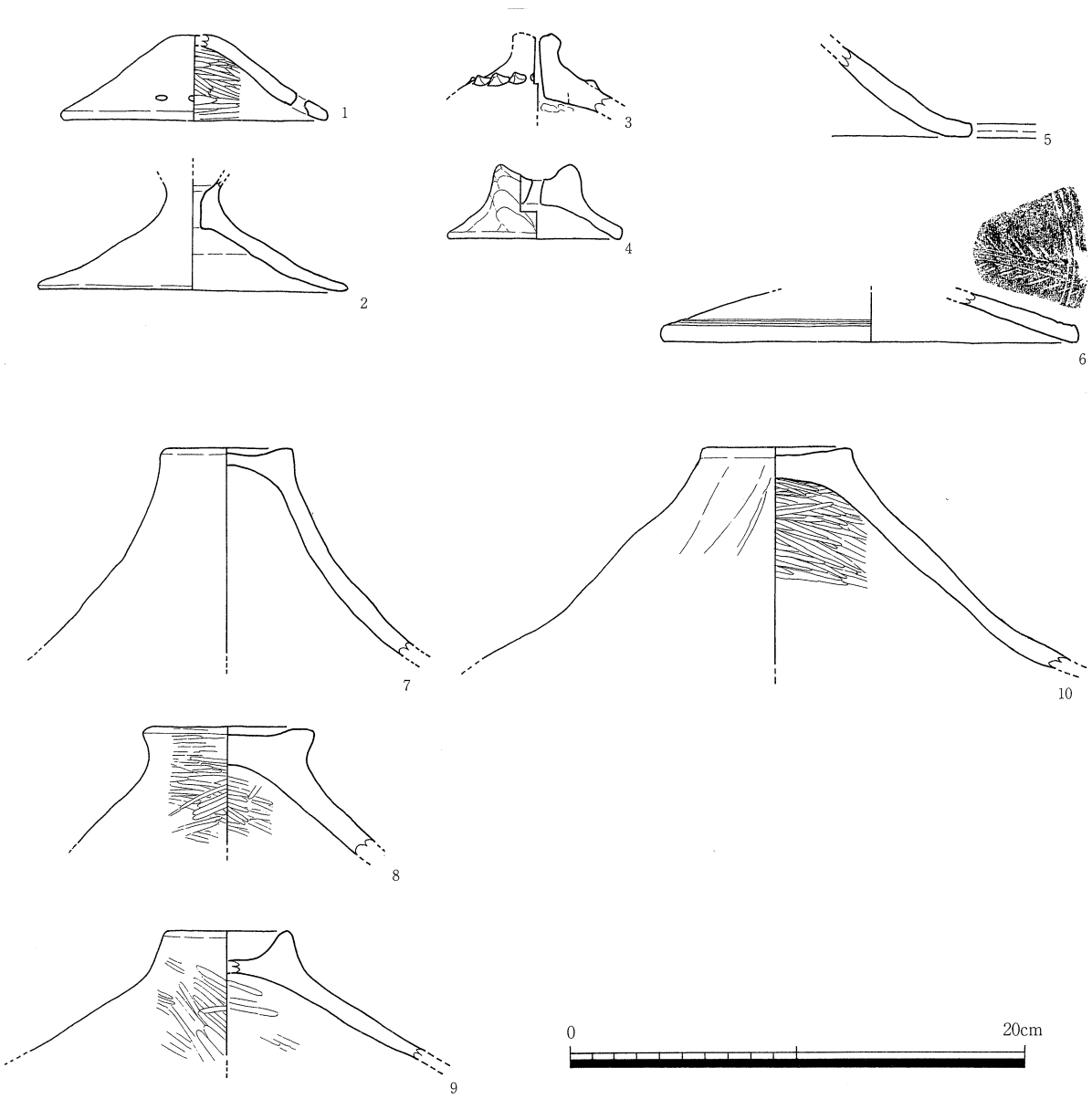


Fig068. 中の池遺跡８次調査出土の弥生土器蓋

みることによって、中の池遺跡出土資料の位置付けを簡単におこなってみたい。

2. 蓋形土器の研究略史

弥生時代前期の蓋問題を紐解く前に、まず弥生時代全体での蓋についての認識について検討しておく必要があるだろう。管見によると、弥生土器蓋がはじめて蓋として認識されたのは、鍵谷徳三郎によって名古屋市高蔵(熱田高倉貝塚)遺跡出土資料が報告された時であると考えられる(鍵谷 1908a,1908b)。写真のみの提示ではあったが、鍵谷は採集品を分類後列挙し土器類の中に「蓋形」があることを記した。

近畿地方では、高橋健自によって奈良県高市郡新沢村(現橿原市)一遺跡出土資料が報告された際において蓋がはじめて図示された(高橋 1918,Fig070)。高橋は弥生土器壺蓋を示し、「蓋の発見は従来その例稀なり。今回の発掘によって得たるは径三寸五分、鈕あり現存部縁に近く二所の小円孔あり」と記述した。

続いて翌年、濱田耕作は『彌生式土器形式分類聚成圖録』で、弥生土器の体系的な分類を試みた。この中に蓋類として先の一遺跡例と愛知県名古屋市熱田貝塚[2]出土資料の弥生時代の壺蓋を提示した(濱田 1919,Fig070)。また、台類として熱田貝塚出土の甕蓋も図示している。

森本六爾は、奈良県唐古・鍵遺跡出土資料を報告する中で、土器副体として壺蓋一点を提示している(森本 1924,Fig070)。

京都帝國大學文學部考古學研究室の島田貞彦、水野清一、小川五郎、三宅宗悦は、攝津國高槻「攝津農場」石器時代遺跡(現在の安満遺跡)を調査し、蓋形土器を報告した(島田ほか 1929,Fig070)。ここで、これまでの蓋の研究史を簡単に振り返り、これを蓋とする根拠として関東地方縄文時代遺跡より出土する蓋形土器(佐藤傳蔵による蓋形土器の集成(佐藤 1898,Fig069)、蓋付土器(八幡一郎の報告した古作貝塚の埋納土器(八幡 1928))を参考とするならば、弥生時代の類似した資料も、蓋であることは明白であるとした。特に佐藤傳蔵による集成はその後の弥生土器の蓋研究にも大きく影響を与えたと考えられる。島田らは、「近畿地方に見る彌生式系の土製蓋には、その位置を異にするけれども何れも小孔有するのは如何なる譯であらうか」とし、壺、鉢などの紐孔に注目している。

森本六爾・小林行雄によって編まれた『彌生式土器聚成圖録』では、蓋も集成されている。しかし、甕蓋に関しては、奈良県唐古遺跡、宮滝遺跡の資料は天地逆にして鉢として報告されている(森本・小林 1934)。

東海地方では吉田富夫、神林淳雄の報告がある。吉田は名古屋市西志賀貝塚出土の弥生時代前期蓋を図示し(吉田 1934,Fig070)、続いて愛知県・三重県の弥生土器を論じた際に、西志賀貝塚出土蓋などを用いて、蓋の編年を試みた(吉田 1935)。ここで弥生時代前期の蓋が初めて検討されたことになる。神林は名古屋市瑞穂遺跡出土の資料を紹介し、蓋に鈕が無く小円孔を有するもの、小円孔は無く鈕のあるものに分類した(神林 1941)。神林の分類は、前者は壺蓋、後者は甕蓋に相当すると考えられる。前者の類例として森本の示した唐古例をあげ、蓋の孔は紐孔であり対応すると考えられる土器本体にも小円孔があるとする。また、台湾民族例に土器の形をした種子入れ(恐らく木製)は、前者に近い蓋を有し蓋と壺形の部分とを紐で連結しているとする。神林は弥生土器蓋という資料の機能を類推するために、台湾原住民の民族例を用いたと評価される。神林は蓋の形態が北部九州西新町遺跡出土の甕棺用蓋(鏡山・永倉 1930)と類似することから、後者を蓋としている。

山本博は、河内国大和川河床出土の資料を報告したが、ここで蓋について触れている(山本 1941)。ここで山本は蓋がかつては土鏡として報告され図示されたことがあるとしている[3]。

小林行雄は、奈良県唐古遺跡の報告書において蓋について詳細な検討をおこなった(小林 1943,Fig071・072)。ここで弥生時代前期より壺と甕の二者が存在することを初めて明確にした。弥生時代前期には壺・蓋の形態差

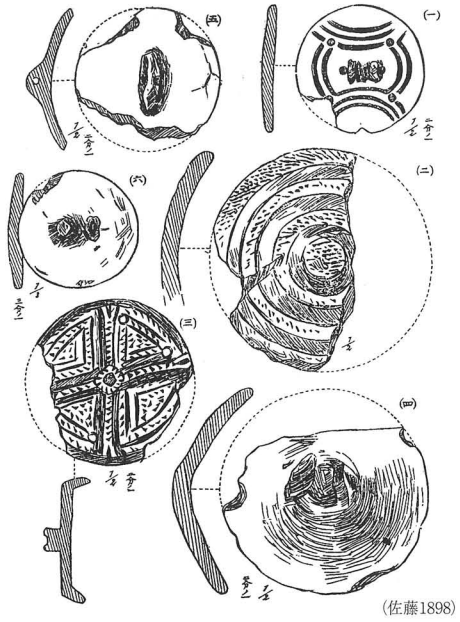
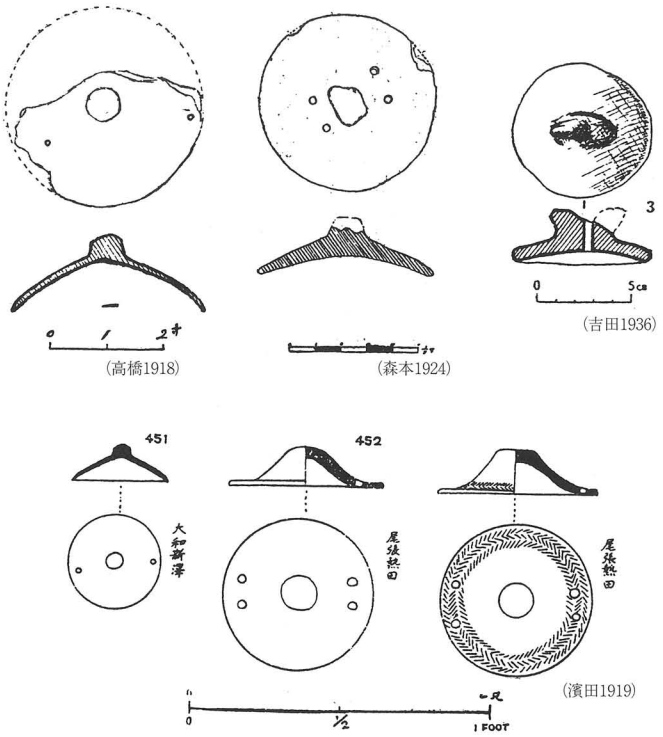


Fig069　佐藤による蓋の可能性の提示



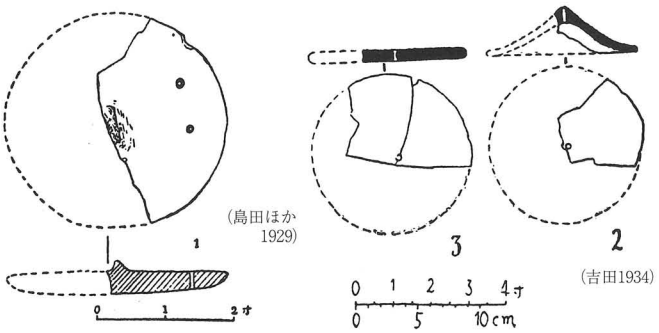


Fig070　蓋の認識過程

平面＼断面						計
						43
						3
						2
						2
						1
						1
計	4	22	12	6	8	52

Fig071　小林による蓋分類とその傾向
（小林1993）

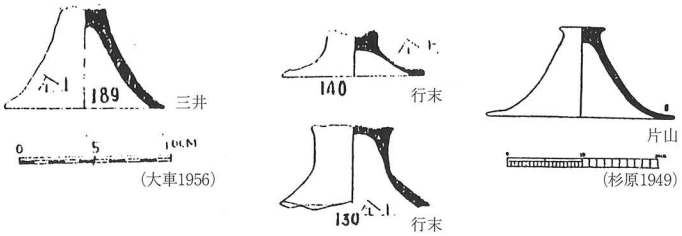


Fig073　四国における蓋の発見

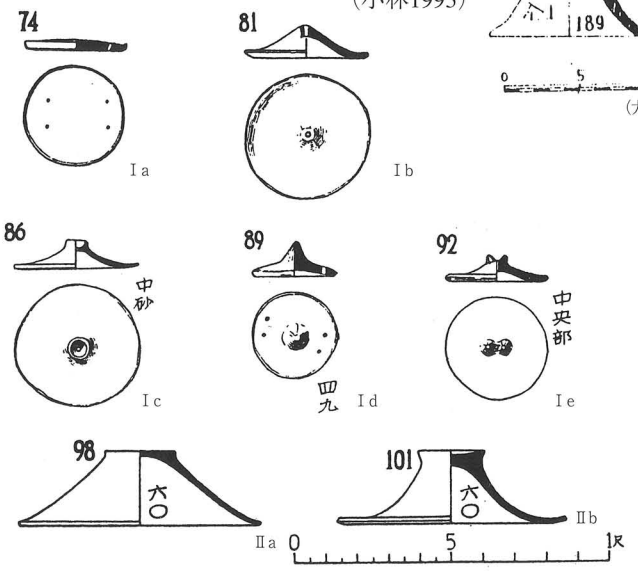


Fig072　小林蓋分類の実際（小林1943を改変）

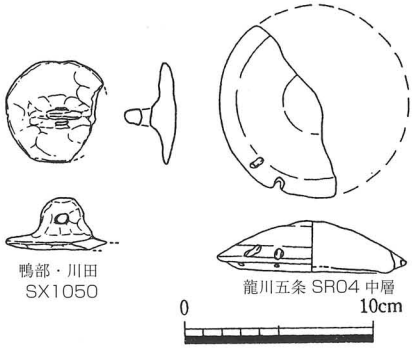


Fig074　香川における蓋の実際
（各文献より）

が判然としているのに、第三様式では両者が同一の器形となってしまう。壺蓋の孔形態は、第一様式は大部分が中央に一孔を穿つものであったが、第三様式では孔を有する限り、周辺に二孔一対を穿つ型式に統一されてしまう。小林は唐古遺跡資料によって、型式分類を試み第一様式蓋形土器型式一覧表を示した。弥生時代前期の蓋は本格的に検討されたといえよう。

愛媛県今治市阿方遺跡・片山遺跡を調査した杉原壮介は、片山遺跡出土の甕蓋1点を報告した(杉原1949,Fig073)。これが四国における弥生土器蓋の初出ではないかと思われる。香川では、六車恵一によって香川県下の弥生土器が編年された時に、綾歌郡久万玉村(現綾歌町)行末遺跡出土資料と仲多度郡多度津町三井遺跡出土資料が報告されたことに始まる(六車 1956,Fig073)。いずれも第一様式の資料であるが、この段階から香川県下では弥生時代前期段階に蓋が存在し、その後はほとんど見られないという傾向は既に看取される。

3. 四国出土事例の検討

次に本稿では四国四県出土の弥生時代前期～中期初頭の蓋についておおまかな集成作業をおこなった。この結果、全体として30遺跡で蓋を確認した。詳細は香川県では10遺跡、愛媛県では12遺跡、高知県では5遺跡、徳島県では3遺跡からそれぞれ蓋が出土している（Tab003）。

ここでは小林行雄が示した壺蓋の分類案に基づき、資料の検討をおこなってみたい(小林 1943,Fig071・072)。壺蓋は扁平な円盤形に近いもの（Ia）、次第に中高になって笠形を呈するもの（Ib）、中央部にやや著しい突起状の摘みを付したもの（Ic）、摘みが中凹みの環口状を呈するもの（Id）、摘みが双頭に分かれたものの五つである（Ie）。甕蓋は底部にあたる摘みの部分が突出した平底状を呈するもの（IIa）、摘みの部分が凹面を呈して底風に作られたもの（IIb）の二つである。今回の調査で出土した蓋資料は、壺・甕ともにあり、壺蓋は笠形を呈するものは、摘みが双頭に分かれたものがある。甕蓋は摘みの部分が凹面を呈して底風に作られたもののみである。ただし出土資料はその形態から、弥生時代中期前葉段階まで下がる可能性が高い。

この小林分類をもとに、今回扱った資料の類型ごとの比率を見てみた(Tab004)。すると、壺蓋54点に対して甕蓋421点と甕蓋の多さが目を引く。甕蓋の中でもIIa類116点に対して、IIb類233点とIIb類がIIa類の約2倍の点数出土していることがわかる。ただし、今回の作業では天井部がわずかにでも凹んでいれば、IIb類としているためこのような結果となっているのかもしれない。壺蓋は、Id類が14点と最も多く、続いてIb類12点、Ie類10点、Ia類7点、Ic類1点となっている。

これまで四国地方では、弥生時代前期の集落の大規模な調査はあまり多くはなかった。このため、蓋も集成表に見られるように一遺跡で数点のみといった程度であった。しかし、畿内拠点的集落の様相や四国では鴨部・川田遺跡の様相のように、各拠点的集落遺跡では本来、壺蓋はいくつかのバリエーションがあり、且つ甕も二種類が並存している状況であろうと考えられる。

小林分類はおおむね四国地方の資料に対しても有効であった。しかし、鴨部・川田遺跡SX1050資料のように、ループ状把手のものや、龍川五条遺跡SR04中層出土資料のように、器厚が非常に厚手のものも見られ(Fig074)、小林分類の細分が可能であることを窺わせる。

小林がかつて指摘したように、畿内では弥生時代前期壺蓋のうち笠形を呈するものは、摘みが中凹みの環口状を呈するもの、摘みが双頭に分かれたものよりも先行する形態であり、弥生時代中期中葉以降の截頭円錐状の蓋へと系譜的に連続していく。しかし、四国地方では弥生時代中期以降、蓋が客体的な存在となってしまい、その系譜をたどることが困難になっていく。この点で両地方における蓋の様相は大きく異なっている。このことは、以下のような解釈が成り立つであろう。当初遠賀川式として壺・甕ともに蓋・身が一体として成立した。

Tab003．四国出土弥生時代前期蓋集成

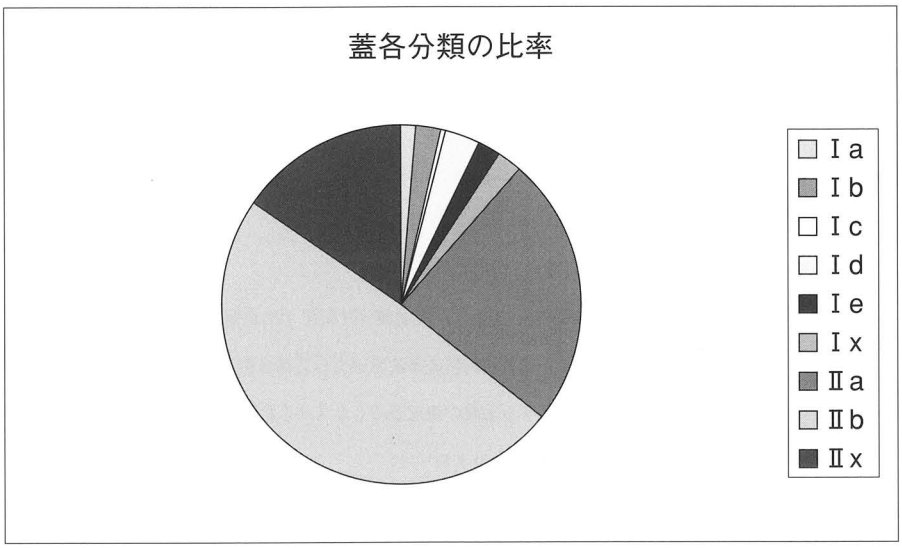
No.	遺跡名	所在地	出土遺構	分類									文献
				Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰe	Ⅰx	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱx	
1	鬼無藤井	香川県高松市	環濠								1		小川2001
2	下川津	香川県坂出市	SHⅠ01 SKⅠ07 SDⅠ03								3		藤好ほか1990
3	大浦浜	香川県坂出市	包含層								1		真鍋1988
4	中ノ池	香川県丸亀市	SD8101 SD8105 N2SD-1 N8SD-1包含層		3	1	1	2	4	7	12	5	廣瀬1982,松本1998,2000,本報告
5	龍川五条	香川県善通寺市	SK33 SK41 SK45 SD49 SD50 SR03 SR04 包含層	2	1		1			8	31	17	宮崎1996,森下1998
6	鴨部・川田	香川県さぬき市	ASD03 ASH01 ASK09 BSD01 BSD02 BSH01 BSK13 BSP07 SD01 CSD01 CSD03 CSH02 CSH04 DSH02 DSH04 DSH05 DSX01 SD1001 SD1003 SP1015 SP1030 SP1039 SP1061 SP1113 SK1002 SK1018 SK1020 SK1021 SK1033 SK1040 SK1044 SK1052 SK1059 SK1060 SK1077 SK1082 SK1094 SK1108 SK1110 SK1113 SK1114 SK1130 SK1140 SK1144 SK1168 SK1171 SK1242 SK1254 SK1259 SK1260 SK1264 SK1266 SK1275 SK1282 SK1285 SK1287 SK1289 SK1294 SK1296 SK1311 SK1314 SK1332 SK1334 SD1015 SD1017 SD1019 SD1020 SD1022 SD1026 SD1062 SD1067 SX1001 SX1002 SX1005 SX1008 SX1023 SX1024 SX1026 SX1028 SX1033 SX1034 SX1036 SX1038 SX1039 SX1041 SX1044 SX1050 SX1051 SX1054 SX1055 包含層		6		5	2	3	68	131	20	森1997,森下2000,2002
7	一の谷遺跡群	香川県観音寺市	第8号土坑 第92号土坑 土器溜状遺構								2		西岡1990
8	行末	香川県綾歌郡綾歌町						1			1		六車1956
9	三井	香川県仲多度郡多度津町								1			六車1956
10	延命	香川県三豊郡豊中町	包含層				1						片桐1990
11	久米窪田Ⅳ	愛媛県松山市	第35号土壙		1								坂本・小林1981
12	来住Ⅴ	愛媛県松山市	第1環濠 第2環濠				1			1			吉本・坂本1981
13	西野Ⅰ	愛媛県松山市	Ⅰ4区環濠								1		長井1979
14	石井東小学校構内	愛媛県松山市	SK11									1	梅木ほか1998
15	姫原	愛媛県松山市	SD35								1		相原ほか1998
16	古市	愛媛県松山市	SR1							1	1	1	栗田ほか2000
17	斎院烏山	愛媛県松山市	SD01							2	1	2	梅木ほか1994
18	岩崎	愛媛県松山市	SDV202 SKV427 SKV212 SKV314 SKV448 SKV464 SKV309 SKV272 SKV487 SXV305 SXV401 SXV403 SDⅥ104 SDⅥ105 SKⅥ183 SKⅥ179 包含層				2	1	1	3	6	6	宮内ほか1999
19	道後町	愛媛県松山市	SD01 包含層								3	1	寺嶋ほか2002
20	阿方	愛媛県今治市	SR15 包含層	4			1	3	1	4	28	1	真鍋ほか2000
21	片山	愛媛県今治市								1			杉原1949
22	矢田八反坪	愛媛県今治市	SR18				1		1		2		真鍋ほか2000
23	柳田	高知県高知市	SK22								1		森田1994
24	田村遺跡群	高知県南国市	Loc.16SX1 Loc.16SX2 Loc.16SX3 Loc.17SD4 Loc.44SD1 Loc.44SD2 Loc.44SK6 Loc.10BST1 Loc.10BSK38 Loc.10BSD5 Loc.10BSD7 包含層				1			16	4	15	出原・角谷ほか1986,森田・下村ほか1986
25	西見当	高知県南国市	SD01 包含層							2			出原ほか1983
26	国見	高知県中村市	ST1							1			曽我1994
27	下分遠崎	高知県香美郡香我美町	ユニット1 包含層								3	2	出原1987,高橋・出原1989,出原1994
28	庄・鮎喰	徳島県徳島市	SD-301					1					松永ほか1985
29	庄	徳島県徳島市	SK0029 SD107 SK2002	1							1	1	湯浅ほか1996,北條1998
30	南蔵本	徳島県徳島市	SK04		1								勝浦ほか1999

○分類については次のように表記した。
壺蓋　Ⅰa(扁平な円盤形に近いもの)　Ⅰb(次第に中高になって笠形を呈するもの)　Ⅰc(中央部にやや著しい突起状の摘みを付したもの)
　Ⅰd(摘みが中凹みの環口状を呈するもの)　Ⅰe(摘みが双頭に分かれたもの)　Ⅰx(破片のみで分類できないもの)
甕蓋　Ⅱa(底部にあたる摘みの部分が突出した平底状を呈するもの)　Ⅱb(摘みの部分が凹面を呈して底風に作られたもの)
　Ⅱx(破片のみで分類できないもの)

各地域に受容された段階では、蓋・身がセットではじめて土器であるというイメージが固定化している。しかし、徐々に在地化していく過程で、畿内地方のようにそのまま蓋・身セットという感覚が持続するエリアと、四国地方のように蓋という要素が欠落しても土器であるという認識が形成されるエリアというように地域色が顕在化していく様子が認められる。四国地方内でも、香川県のよ

Tab004．四国出土土器蓋の比率

Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰe	Ⅰx	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱx
7	12	1	14	10	10	116	233	72



うに比較的畿内地方と類似した様相を示す所もあれば、高知県のように甕蓋資料が圧倒的であり、壺蓋については不明であるような所もある。以上のように蓋の在り方からも、小地域性を抽出することが可能ではないか。つまり、蓋という地味な資料からも弥生社会の一端を読み取ることが可能なのだ。

4. おわりに

中の池遺跡で出土した蓋を契機に、弥生土器蓋が再発見される過程を確認し、四国地方出土の弥生時代前期蓋資料を集め、その傾向を若干みてみた。現在、考古学では「常識的」知として定着した事項についても、近現代社会の中でどのような形で認識され、解釈が試みられたかを確認しておくことが、考古学と現代社会の関係性という意味を考えていく上で重要ではなかろうかと考える。そのような試みの一つとして本稿を付してみた。

【謝辞】本稿を成すにあたって、坪井清足先生、三好孝一氏、出原恵三氏のご教示を得た。記して感謝したい(本文中敬称略)。

【註】

1) 考古学の歴史とは、つまり「学」としての成立をみた近現代史の一部である。このように理解するならば、学史研究とは近現代史研究の実践ということになろう。

2) 熱田貝塚は現在の高蔵遺跡に相当すると思われる。但し、濱田の集成図に提示されたのは二條公爵蔵となっているものである。

3) 土鏡と報告された事例については、山本が具体的に何を指してそう言っているのかが特定するに至らなかった。山本自身が蓋と古墳時代の土製模造鏡とを混同していた可能性もある。

【引用・参考文献】

相原浩二ほか 1998『和気・堀江の遺跡』Ⅱ 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木謙一ほか 1994『斎院の遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木謙一ほか 1998『石井・浮穴の遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小川 賢編 2001『鬼無藤井遺跡』 高松市教育委員会

鏡山 猛・永倉松男 1930「筑前福岡市發見の甕棺」『考古學』1-5・6 東京考古學會

鍵谷徳三郎　1908a「尾張熱田高倉貝塚實査」『東京人類學會雑誌』23-266　東京人類學會

鍵谷徳三郎　1908b「尾張熱田高倉貝塚實査」『考古界』7-2　考古學會

片桐孝浩 1990『延命遺跡』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

勝浦康守ほか 1999『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』9 徳島市教育委員会

亀島重則ほか 1997『田井中遺跡発掘調査概要』Ⅵ 大阪府教育委員会

神林淳雄 1941「名古屋市昭和區瑞穂町附近の彌生式遺物(一)」『考古學雑誌』31-9 日本考古學會

栗田茂敏ほか 2000『古市遺跡・下苅屋遺跡2・3調査』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小林行雄 1943「第四章 土器類」『大和唐古彌生遺跡の研究』 桑名文星堂

小林行雄 1959「ふた 蓋」『図解考古学辞典』 東京創元社

駒井正明・本間元樹ほか 1997『田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次)』 (財)大阪府文化財調査研究センター

坂本安光・小林一郎 1981『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

佐藤傳蔵 1898「本邦石器時代遺跡より発見せる土製の蓋及蓋らしきもの」『東京人類學會雑誌』143 東京人類學會

佐原 真 1976「蓋－蓋形土器」『日本の美術』125 至文堂

島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦1929「攝津國高槻「攝津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類學雑誌』44-7 日本人類學會

杉原荘介 1949「伊豫阿方遺跡・片山遺跡調査概報」『考古學集刊』2 東京考古學會

曾我貴之 1994『国見遺跡』 中村市教育委員会

高橋健自 1918「高市郡新澤村大字一石器時代遺跡」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』Ⅴ 奈良県

高橋啓明・出原恵三1989『下分遠崎遺跡』Ⅰ 香我美町教育委員会

出原恵三 1987『下分遠崎遺跡試掘調査概告』 香我美町教育委員会

出原恵三 1994『下分遠崎遺跡』 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

出原恵三ほか 1983『西見当遺跡発掘調査報告書』南国市教育委員会

出原恵三・角谷和男ほか1986『田村遺跡群』3 高知県教育委員会

寺嶋信三ほか 2002『道後町遺跡』 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

長井数秋 1979「西野Ⅰ遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 愛媛県教育委員会

西岡達哉ほか 1990『一の谷遺跡群』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

濱田耕作 1919「彌生式土器形式分類聚成圖録」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』3 京都帝國大學

松永佳美ほか 1985『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会

松本豊胤 1998『中ノ池遺跡』Ⅰ 丸亀市・松本考古学研究所

松本豊胤 2000『中ノ池遺跡』Ⅱ 丸亀市・松本考古学研究所

六車恵一 1956「譜岐彌生式土器聚成図録」『文化財協会報』特別号1 香川県文化財保護協会

廣瀬常雄 1982『中の池遺跡発掘調査概要』 丸亀市教育委員会

藤好史郎ほか 1990『下川津遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

北條芳隆ほか 1998『庄・蔵本遺跡』1 徳島大学埋蔵文化財調査室

真鍋昭文ほか 2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

真鍋昌宏ほか 1988『大浦浜遺跡』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

宮内慎一ほか 1999『岩崎遺跡』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮崎哲治 1996『龍川五条遺跡』Ⅰ (財)香川県埋蔵文化財調査センター

三好孝一ほか 1991『河内平野遺跡群の動態』Ⅱ (財)大阪文化財センター

森 格也 1997『鴨部・川田遺跡』Ⅰ (財)香川県埋蔵文化財調査センター

森 威史 2001「Ⅱ調査の概要」『高蔵遺跡』 静岡人類史研究所

森下英治 1998『龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

森下友子 2000『鴨部・川田遺跡』Ⅱ (財)香川県埋蔵文化財調査センター

森下友子 2002『鴨部・川田遺跡』Ⅲ (財)香川県埋蔵文化財調査センター

森田尚宏 1994『柳田遺跡』 高知県埋蔵文化財センター

森田尚宏・下村公彦ほか1986『田村遺跡群』2 高知県教育委員会

森本六爾 1924「大和に於ける史前の遺跡(三)」『考古學雑誌』14-12 日本考古學會

森本六爾 1934「煮沸形態と貯蔵形態」『考古學評論』1-1

森本六爾・小林行雄 1938『彌生式土器聚成圖録』 東京考古學會

山口麻太郎 1932「ふた」『考古學』3-1 東京考古學會

八幡一郎 1928「最近発見された貝輪入蓋附土器」『人類學雑誌』43-8 日本人類學會

山本 博 1941「續大和川床出土の彌生式遺物に就いて」『考古學雑誌』31-7 日本考古學會

湯浅文則ほか 1996『庄遺跡』Ⅰ (財)徳島県埋蔵文化財センター

吉田富夫 1934「尾張國西志賀貝塚發見の土器に就いて」『考古學』5-1 東京考古學會

吉田富夫 1935「尾三地方史前土器の一二の種類」『考古学評論』6-1

吉田富夫 1936「尾張國發見の彌生式土製品」『考古學』7-8 東京考古學會

吉田富夫 1937「伊勢國の彌生文化」『考古學』8-6 東京考古學會

吉本 拡・坂本安光 1981『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』「 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

Fig74. 中の池遺跡8次調査遺構配置略図（1/400）

Tab005．中の池遺跡8次調査遺構一覧表（1）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
001	SD001	環濠		D13
002	SD002	溝	須恵器を含む。003→002	D14
003	SD003	環濠	003→002	D16
004	SD004	溝	中世以降の落ち込み？	E17
005	SD005	環濠		E18
006	SD006	環濠		E19・20
007		ピット	弥生	F23
008		ピット	弥生	F24
009		ピット	弥生	F24
010		ピット	弥生	F24
011		ピット	弥生	F24
012		ピット	弥生	F24
013		ピット	弥生	E25
014		土坑	弥生	F25
015		土坑	弥生	C26
016		土坑	弥生　017→016	C26
017		土坑	弥生　017→016	C26
018	SD018	土坑	弥生	F26
019		土坑	弥生	F26
020	SD020	溝	方形区画溝　028→020→022	D・E・F・25・26
021		土坑	弥生	G27
022		土坑	020→022	G27
023	SD023	溝	方形区画溝	D・E28
024	SD024	溝	方形区画溝	E・F28～30
025	SK025	土坑	弥生　竪穴状の施設	D30
026		ピット	弥生	F25
027	SD027	溝	方形区画溝　S-024の続き	G27
028		ピット	弥生　028→020	E26
029		ピット	弥生	F28
030		ピット	弥生	D28
031	SD031	環濠	V字環濠　031→057	D～G・30～38
032	SK032	土坑	弥生前末～中初（阿方式含む）　033→032	G・H・28・29
033	SD033	溝	033→032	G・H・28・29
034		ピット	弥生	G31
035	SD035	溝	方形区画溝	F・G・31・32
036			欠番	
037			欠番	
038		土坑	弥生	H31
039	SD039	溝	中・近世の条里溝	H・I・30・31
040		土坑	弥生	J31
041		ピット	弥生	G32
042		土坑	弥生　043→042	E34
043		土坑	弥生　043→042	E34
044			欠番	
045		ピット	弥生	E35
046	SP046	ピット	弥生	K35
047		土坑	弥生	F35
048	SK048	土坑	弥生	F34・35
049		土坑	弥生	G34
050	SA050	柵	柱穴ａ～ｋにより構成される　弥生	E・F・31～38
051	SH051	住居跡	松菊里型住居　ピットａ～ｊによって構成される	G・H・I・36・37
052	SA052	柵	柱穴ａ～ｅにより構成される　弥生	E～H38
053		土坑	054→053	G37
054		土坑	055→054→053	G37
055		土坑	055→054	G37
056		溝	中・近世の条里溝	H～J31・36
057		土坑	弥生　031→057	F37
058	SK058	土坑	弥生	L36・37

Tab006. 中の池遺跡8次調査遺構一覧表（2）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
059		土坑	弥生	L37
060		ピット	弥生	M37
061		土坑	弥生	L36
062		土坑	弥生	K・L・37
063		井戸	近世	J・K34
064		ピット	弥生	K35
065		ピット	弥生	K34
066		土坑	弥生	L37
067		溝	方形区画溝となるか？　弥生	L35
068		落ち込み	弥生	K36
069		ピット	弥生	L36
070		ピット	弥生	L36
071		ピット	弥生	E25
072		ピット	弥生	F26
073		ピット	弥生	D27
074		ピット	弥生	H28
075		ピット	弥生	H28
076		土坑	弥生	J36
077		土坑	弥生	J35
078	SK078	土坑	弥生	J・K35
079		土坑	弥生	K35
080	SD080	溝	S-090、S-091と上層は一体化　080→081	I・J・43・44
081	SD081	溝	中・近世の条里溝　080・149→081→132・133	H・I・J・44
082		土坑	弥生	J・K35
083		土坑	弥生　083→165・166・167	J・K37
084		土坑	弥生	K35
085	SP085	ピット	弥生	J37
086		ピット	弥生	J36
087		ピット	弥生　092→088　130→088	J36
088		ピット	弥生	J36
089		ピット	弥生	J37
090	SD090	環濠	弥生　090→122・123・124・125	F～L4・42
091	SD091	環濠	弥生	E～M・38・40
092		ピット	弥生　092→088	J37
093		ピット	弥生　094→093	J37
094		ピット	弥生　094→093	J37
095		ピット	弥生	J37
096		ピット	弥生	J37
097		ピット	弥生	J37
098		ピット	弥生	J37
099		ピット	弥生	I37
100		ピット	弥生	I37
101		ピット	弥生	I37
102		ピット	弥生	I37
103		ピット	弥生	I37
104		ピット	弥生	I37
105		ピット	弥生	I37
106	SP106	ピット	弥生	I37
107		ピット	弥生	I37
108		ピット	弥生	I37
109		土坑	弥生	I37
110		ピット	弥生	I37
111		ピット	弥生	I37
112		ピット	弥生	I37
113		ピット	弥生	I36
114		ピット	弥生	J37
115		ピット	弥生	J37
116		ピット	弥生	J36

Tab007. 中の池遺跡8次調査遺構一覧表（3）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
117		ピット	弥生	I37
118		ピット	弥生　118→119	I37
119		ピット	弥生　118→119	I37
120		ピット	弥生	I37
121		ピット	弥生	J36
122		ノツボ	近代　090→122	G42
123		ノツボ	近代　090→122 126→123	G42
124		ノツボ	近代　090→124	F42
125		ノツボ	近代　090→125	F42
126	SK126	井戸	近世　126→123	G42
127		ピット	弥生	J37
128		ピット	弥生	J37
129		ピット	弥生	J36
130		ピット	弥生　130→088	J36
131		ピット	弥生　131→168	J37
132		井戸	近世　081→132	H43
133		井戸	近世　081→133	H43
134		土坑	近世	I43
135		ピット	弥生	K37
136		ピット	弥生	K37
137		ピット	弥生	K37
138		ピット	弥生	H40
139		ピット	弥生	H40
140		ピット	弥生	I43
141	SK141	土坑	弥生	J32
142		土坑	弥生	I32
143		井戸	近世	J33
144		ピット	弥生	I37
145		ピット	弥生	K36
146		ピット	弥生	K36
147		ピット	弥生	J36
148		ピット	弥生	I33
149		土坑	弥生　149→081	H44
150		ピット	弥生	I38
151		ピット	弥生	I38
152		ピット	弥生	I38
153		ピット	弥生	I38
154		ピット	弥生	I38
155		ピット	弥生	I38
156		ピット	弥生	I38
157		ピット	弥生	I38
158		ピット	弥生	I38
159		ピット	弥生	I38
160	SP160	ピット	弥生	J38
161		ピット	弥生	J38
162		ピット	弥生　162→170	J38
163		ピット	弥生　170→163	J38
164		ピット	弥生	J38
165		ピット	弥生　083→165	J37
166	SP166	ピット	弥生	J37
167		ピット	弥生　083→167	J37
168		ピット	弥生　131→168	J38
169		ピット	弥生	J38
170		ピット	弥生　162→170→163	J38
171		ピット	弥生　173→171	J38
172		ピット	弥生　173→172	J38
173		ピット	弥生　173→172・171	J38
174		ピット	弥生	J38

Tab008．中の池遺跡8次調査遺構一覧表（4）

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
175		ピット	弥生	K38
176		ピット	弥生	K38
177		ピット	弥生	K38
178		ピット	弥生	K38
179		ピット	弥生	K38
180		ピット	弥生	K38
181		ピット	弥生	J37
182		ピット	弥生	J37
183		ピット	弥生	J37
184		ピット	弥生	J37
185			欠番	J37
186		ピット	弥生	J38
187		ピット	弥生	I38
188		ピット	弥生	I38
189		ピット	弥生	J38
190		ピット	弥生	J38
191		ピット	弥生	J37
192		ピット	弥生	J37
193		ピット	中世	E19
194		ピット	中世	E19
195		土坑	中世か？	E19
196	SP196	ピット	弥生　094→196	K36

Tab009. 中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（1）

カクラン・出土地不明

種別	器種
弥生土器	壺（阿方系）、甕（前期）
石器	サヌカイトチップ、剥片、 二次加工ある剥片、楔形石器、 石核

表土

種別	器種
弥生土器	壺、甕、大型壺、 壺（肩部に山形文）
須恵器	ＴＫ４３前後
土師器（古代～）	大型甕
国産陶器	近世陶器椀、皿、鉢、灯明皿、擂鉢
染付	近世肥前、中国産
石器	サヌカイトチップ、剥片、 打製石包丁、楔形石器
瓦類	中世平瓦
土製品	焼土塊

調査区２表土

種別	器種
弥生土器	壺、他

黄褐色層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、壺（阿方系）、大型壺
須恵器	甕
国産陶器	近世陶器
石器	サヌカイトチップ、剥片、石核、 掻器、石鏃

S-001

種別	器種
弥生土器	甕口縁部、壺（阿方系）
石器	サヌカイト剥片

S-002

種別	器種
弥生土器	壺、甕
須恵器	杯蓋
石器	サヌカイト石核、剥片、 打製石包丁
土製品	焼土塊

S-003層位不明

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石製品	サヌカイト剥片、石核、楔形石器、 打製石包丁、　石鏃、掻器
土製品	焼土塊

S-003茶褐色層

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石製品	打製石包丁

S-003黒褐色層

種別	器種
弥生土器	細片

S-004

種別	器種
弥生土器	壺
石器	サヌカイト剥片、石鏃

S-005茶褐色層

種別	器種
弥生土器	壺
石器	サヌカイトチップ

S-005黒褐色層

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片、石核
土製品	焼土塊

S-005層位不明

種別	器種
弥生土器	甕、大型壺口縁部
石器	サヌカイト剥片
土製品	焼土

S-005灰褐色層

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片、掻器

S-006茶褐色粘土層

種別	器種
弥生土器	甕、壺蓋、壺
石器	サヌカイト剥片、楔形石器、チップ、 打製石包丁、二次加工剥片、 磨製石包丁
土製品	焼土

S-006黒褐色砂質粘土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢
石器	サヌカイト剥片、石核
土製品	焼土塊

S-006層位不明

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片、楔形石器

S-007

種別	器種
弥生土器	細片
石器	片岩製板材（石斧か）

S-008

種別	器種
弥生土器	細片

S-009

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、安山岩礫

S-012

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	焼土塊

S-014

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石器	サヌカイト石核、剥片
土製品	焼土塊

Tab010. 中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（2）

S-015

種別	器種
弥生土器	細片

S-016

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片
土製品	焼土

S-017

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片

S-018

種別	器種
古式土師器	甕
石器	サヌカイト剥片

S-019

種別	器種
弥生土器	壺（刻目、突帯有）、壺（阿方系）
石器	サヌカイト剥片

S-020

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片
土製品	焼土

S-021

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片
土製品	焼土

S-023

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片
石器	サヌカイト剥片
石製品	砂岩
土製品	焼土

S-024

種別	器種
弥生土器	甕、壺、蓋、鉢
石器	サヌカイト剥片、楔形石器、 安山岩剥片、安山岩製砥石、 砂岩すり石？
土製品	土製紡錘車、焼土

S-025層位不明

種別	器種
弥生土器	壺（阿方系）
石器	サヌカイト、剥片

S-025黒灰色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺
土製品	焼土

S-025灰白色層

種別	器種
弥生土器	壺

S-026

種別	器種
その他	炭

S-027

種別	器種
弥生土器	壺、甕

S-028

種別	器種
石器	サヌカイトチップ

S-029

種別	器種
古式土師器	把手

S-030

種別	器種
古式土師器	細片
石器	サヌカイト製板材

S-031黒褐色粘質土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	安山岩礫、サヌカイト二次加工剥片
	掻器
土製品	焼土

S-031暗灰色砂質粘土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、壺蓋
石器	サヌカイト剥片、二次加工剥片、掻器 棒状石製品
土製品	焼土

S-031黄白色粘土層

種別	器種
弥生土器	壺
国産陶器	摺鉢（近世）
石器	不明石製品
土製品	焼土
金属製品	鉄滓

S-032

種別	器種
弥生土器	壺（門田系）、大型壺、多孔甕
染付	肥前（明らかに混入）
石製品	凹石、柱状型片刃石斧、サヌカイト 石鏃、石鏃未成石核、剥片、
	チップ、二次加工剥片
土製品	焼土
その他	獣骨

S-033

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	サヌカイト剥片、石錘
木製品	炭

S-034

種別	器種
弥生土器	壺

S-035

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片

Tab011．中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（3）

S-037ピットa

種別	器種
石器	サヌカイト剥片

S-038

種別	器種
弥生土器	壺、甕、細片
国産陶器	近世

S-039

種別	器種
弥生土器	壺
石器	サヌカイト二次加工剥片

S-040

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイトチップ

S-041

種別	器種
石器	石鏃

S-042

種別	器種
弥生土器	蓋

S-043

種別	器種
弥生土器	甕

S-045

種別	器種
弥生土器	甕（逆「L」有）
石器	サヌカイト剥片

S-046

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-047

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-048

種別	器種
弥生土器	壺、甕
土製品	焼土塊

S-049

種別	器種
弥生土器	壺底部、細片

S-051ピットa

種別	器種
石器	サヌカイト剥片

S-051ピットb

種別	器種
石器	サヌカイト剥片

S-051ピットd

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片
土製品	焼土

S-051ピットe

種別	器種
弥生土器	細片

S-051ピットk

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-053

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイトチップ

S-054

種別	器種
弥生土器	甕（逆「L」有）
石器	サヌカイト剥片

S-055

種別	器種
弥生土器	甕（逆「L」有）
石器	サヌカイト剥片

S-056

種別	器種
弥生土器	細片
土師器（古代～）	釜
石器	サヌカイト剥片、石鏃、

S-057

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト二次加工剥片、 安山岩角礫
土製品	焼土塊

S-058

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石器	サヌカイト剥片、チップ
石製品	砂岩円礫

S-059

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-060

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-062

種別	器種
弥生土器	壺底部
石器	サヌカイトチップ、剥片

S-063

種別	器種
弥生土器	壺底部
土師器（古代～）	釜（脚部）
石器	サヌカイト剥片

S-064

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイトチップ

Tab012. 中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（4）

S-065

種別	器種
弥生土器	細片

S-067

種別	器種
弥生土器	細片

S-068

種別	器種
弥生土器	細片

S-069

種別	器種
石器	サヌカイト剥片

S-070

種別	器種
弥生土器	細片

S-071

種別	器種
弥生土器	細片

S-072

種別	器種
弥生土器	細片

S-073

種別	器種
弥生土器	細片

S-074

種別	器種
弥生土器	細片

S-075

種別	器種
弥生土器	細片

S-077

種別	器種
弥生土器	甕、壺、細片
石器	サヌカイト剥片、掻器
土製品	焼土塊

S-078

種別	器種
弥生土器	壺
石器	サヌカイトチップ、剥片、打製石包丁
土製品	焼土塊

S-079

種別	器種
弥生土器	器種不明、細片
石器	サヌカイト剥片、石核
土製品	焼土塊

S-080黒褐色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺

S-080最下層

種別	器種
弥生土器	壺

S-080茶褐色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石器	サヌカイトチップ、剥片、掻器、安山岩剥片、石包丁？

S-081

種別	器種
弥生土器	壺底部、甕口縁部
石器	サヌカイトチップ、剥片、砂岩焼石、磨製石斧

S-082

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片
土製品	焼土塊

S-083

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、台石

S-084

種別	器種
弥生土器	細片
石器	石鏃未製品

S-085

種別	器種
石器	磨製石斧

S-086

種別	器種
弥生土器	細片

S-087

種別	器種
弥生土器	細片

S-088

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-090層位不明

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石器	剥片、打製石包丁
土製品	焼土

S-090灰白色層

種別	器種
弥生土器	甕、鉢、壺、壺（阿方系）
石器	サヌカイト打製石包丁、剥片、凹石、石鍬
土製品	土製円盤
金属製品	不明鉄製品（混入？）

S-090黒褐色層

種別	器種
弥生土器	甕、甕（阿方系）、壺、壺（阿方系）、ミニチュア土器壺
石器	剥片、二次加工剥片、石核、石英片、凹石、楔形石器、磨製石包丁、石鏃、石鏃未製品、凝灰岩石核、石棒？、柱状片刃石斧
その他	骨（獣骨）

Tab013．中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（5）

S-090灰褐色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺、鉢
石器	楔形石器、剥片、掻器、二次加工剥片
土製品	焼土
木製品	木片

S-091灰白色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石器	打製石包丁未製品、楔形石器、 サヌカイト板状素材、磨製石斧
土製品	焼土

S-091黒褐色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺、鉢、蓋、ミニチュア壺
石器	サヌカイト二次加工剥片、楔形石器 石核、石錐、凹石、磨製石包丁、 磨製石斧
土製品	土錘、土製紡錘車、焼土

S-091灰褐色層

種別	器種
弥生土器	壺、蓋、大型壺、小型壺
石器	二次加工剥片、楔形石器、剥片、 打製石包丁、石鏃、磨製石包丁
木製品	木片

S-090・091黒褐色層

種別	器種
弥生土器	甕、壺
石器	サヌカイト剥片、楔形石器
石製品	緑泥片岩、石核、サヌカイト凹石、 環状石斧、サヌカイト板状素材

S-092

種別	器種
弥生土器	甕（逆「L」有）、細片
石器	サヌカイト楔形石器、剥片

S-093

種別	器種
弥生土器	細片

S-094

種別	器種
弥生土器	壺
石器	サヌカイト剥片

S-095

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイトチップ

S-096

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-098

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイトチップ、剥片

S-099

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-100

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-101

種別	器種
弥生土器	細片

S-103

種別	器種
弥生土器	細片

S-104

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-106

種別	器種
弥生土器	甕（逆「L」有）
石器	サヌカイト剥片

S-107

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、チップ、石鏃

S-108

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-109

種別	器種
弥生土器	甕、細片

S-111

種別	器種
弥生土器	細片

S-113

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-114

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、チップ

S-115

種別	器種
弥生土器	底部細片
石器	サヌカイト剥片

S-116

種別	器種
弥生土器	細片

Tab014. 中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（6）

S-117

種別	器種
弥生土器	甕、細片
石器	サヌカイト剥片

S-118

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、チップ

S-119

種別	器種
弥生土器	細片

S-126

種別	器種
土製品	土錘（近現代？）

S-127

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-128

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト石核

S-129

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-130

種別	器種
弥生土器	細片
石器	打製石包丁、サヌカイト剥片

S-131

種別	器種
弥生土器	細片
石器	チップ

S-133

種別	器種
須恵器	甕

S-134

種別	器種
弥生土器	壺底部
土製品	焼土

S-135

種別	器種
弥生土器	細片

S-136

種別	器種
石器	サヌカイト剥片、二次加工剥片

S-137

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石製品	安山岩製不明製品

S-141

種別	器種
弥生土器	甕、高杯、壺
石器	サヌカイト剥片

S-142

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト石核

S-143

種別	器種
瓦質土器	器種不明（中世）
石器	二次加工のある剥片

S-144

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイトチップ

S-145

種別	器種
弥生土器	細片

S-146

種別	器種
弥生土器	細片

S-147

種別	器種
弥生土器	細片

S-148

種別	器種
弥生土器	細片

S-150

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-151

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-152

種別	器種
弥生土器	甕（前期末）、細片
石器	サヌカイト剥片

S-153

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、チップ

S-155

種別	器種
弥生土器	甕

S-156

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、チップ、石核

Tab015. 中の池遺跡8次調査出土遺物一覧表（7）

S-157

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-159

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-160

種別	器種
弥生土器	壺

S-162

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-164

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-165

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、二次加工のある剥片、チップ

S-166

種別	器種
弥生土器	細片
石器	石鏃、サヌカイト剥片、楔形石器

S-167

種別	器種
弥生土器	細片

S-169

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、石錐

S-170

種別	器種
弥生土器	高杯、細片
石器	サヌカイト剥片、チップ

S-171

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片、二次加工剥片

S-172

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-173

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-174

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト石核、剥片

S-175

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-177

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-179

種別	器種
弥生土器	甕（逆「L」有）、壺
石器	サヌカイト剥片、磨製石斧

S-180

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-181

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-182

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト製楔形石器、剥片

S-183

種別	器種
弥生土器	細片

S-185

種別	器種
弥生土器	細片
石器	サヌカイト剥片

S-186

種別	器種
弥生土器	細片

S-187

種別	器種
弥生土器	細片

S-188

種別	器種
弥生土器	甕、壺、細片

S-190

種別	器種
弥生土器	甕底部
石器	サヌカイト製楔形石器、剥片

写真図版

現地説明会風景

遺物写真に付した数字は
Fig.番号－遺物番号
の順である。

調査区全景（西から）

１区全景（南東から）

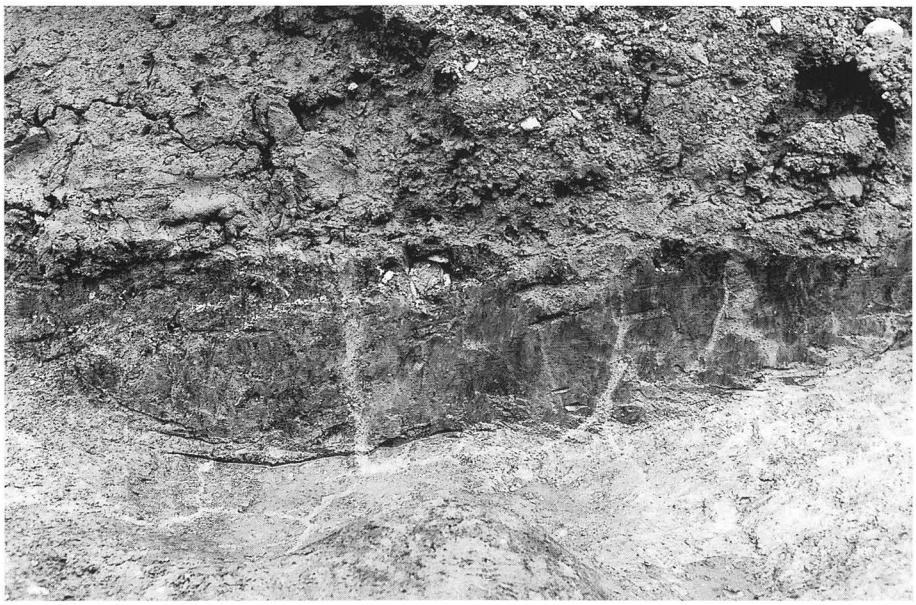
Pla.2

調査前風景（東から）

SD001完掘状況（南から）

SD001土層断面（南から）

SD003完掘状況（南から）



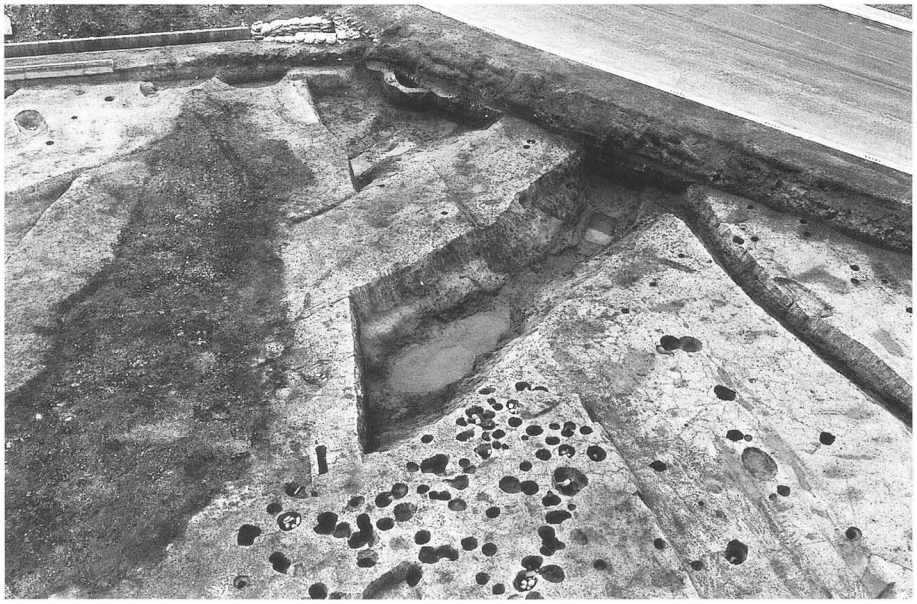
SD003土層断面（南から）

SD005遺物出土状況（南から）

Pla.4

SD005土層断面（南から）

SD006完掘状況（南から）



SD091完掘状況（東から）

SD091土層断面(北から)

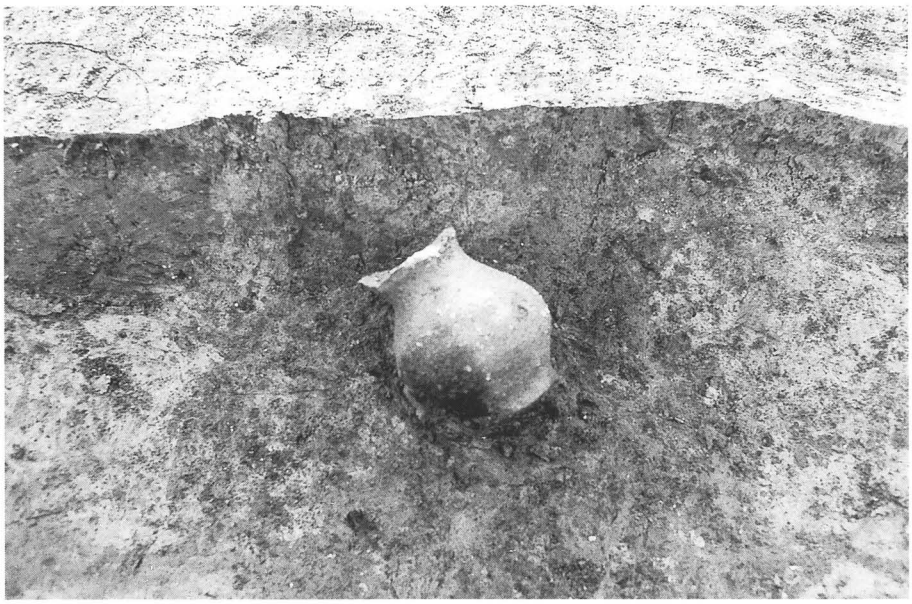
SD090土層断面（北から）

Pla.6

SD090土層断面（南から）

SD080土層断面（北から）

SD080と090切り合い土層断面（東から）



SD020遺物出土状況（北から）

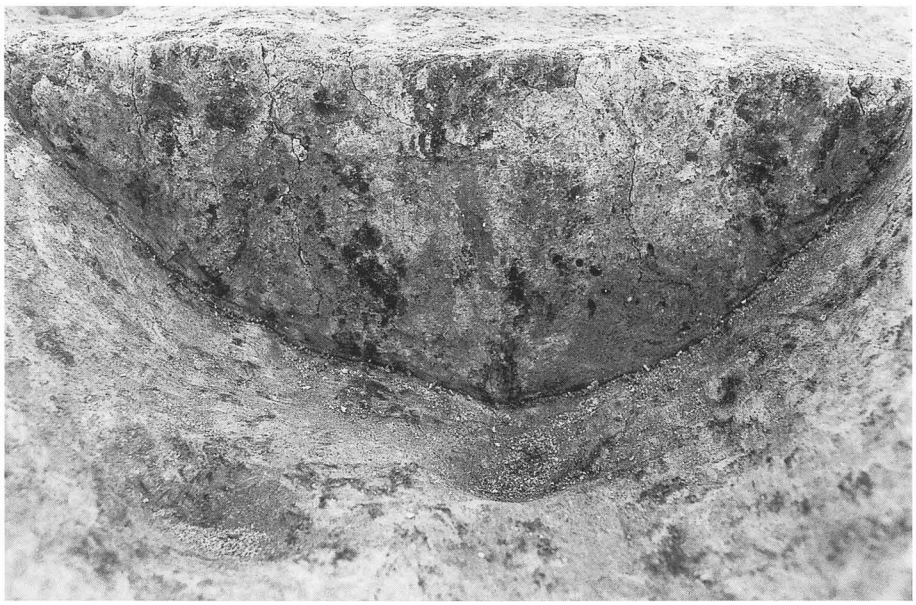
SD020土層断面図（南から）

SD023土層断面（南から）

Pla.8

SD024土層断面（南から）

SD035土層断面（南から）



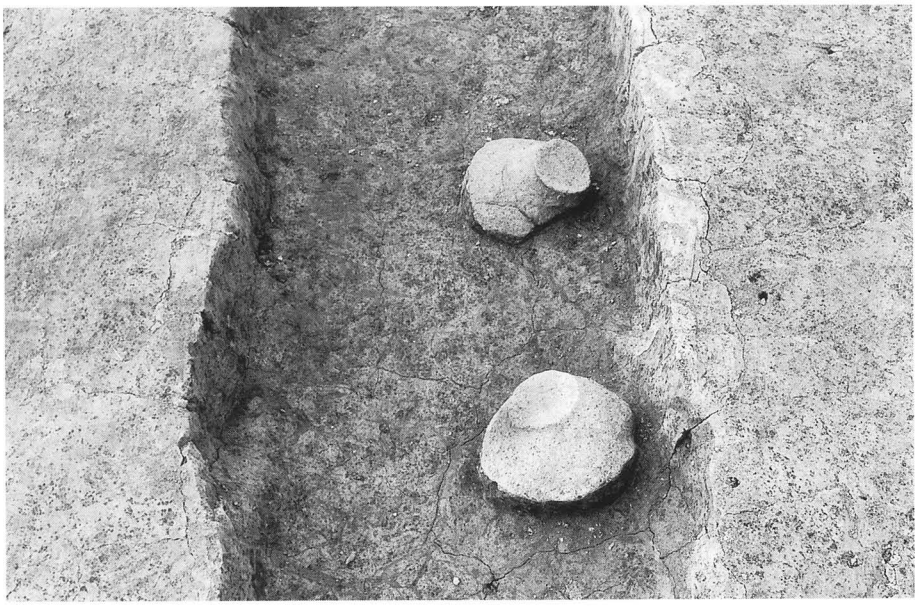
SD067土層断面（西から）

SD002完掘状況（南から）

SD002土層断面（南から）

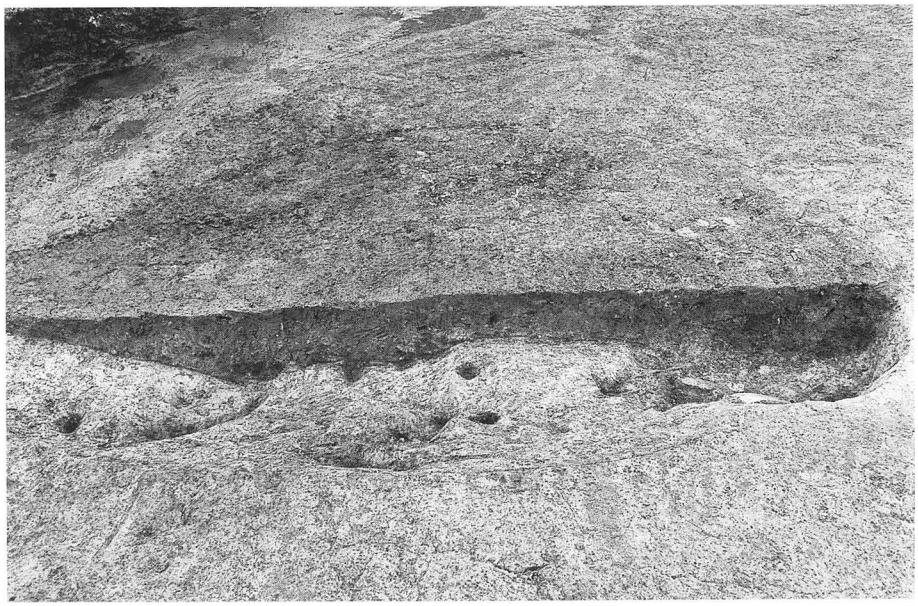
SD033土層断面（南から）

Pla.10

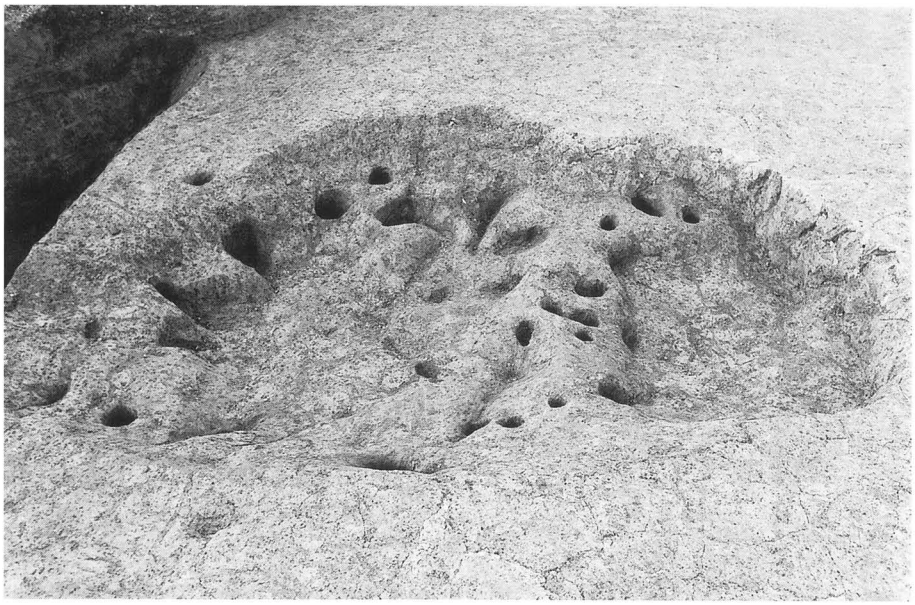


SD033遺物出土状況（南から）

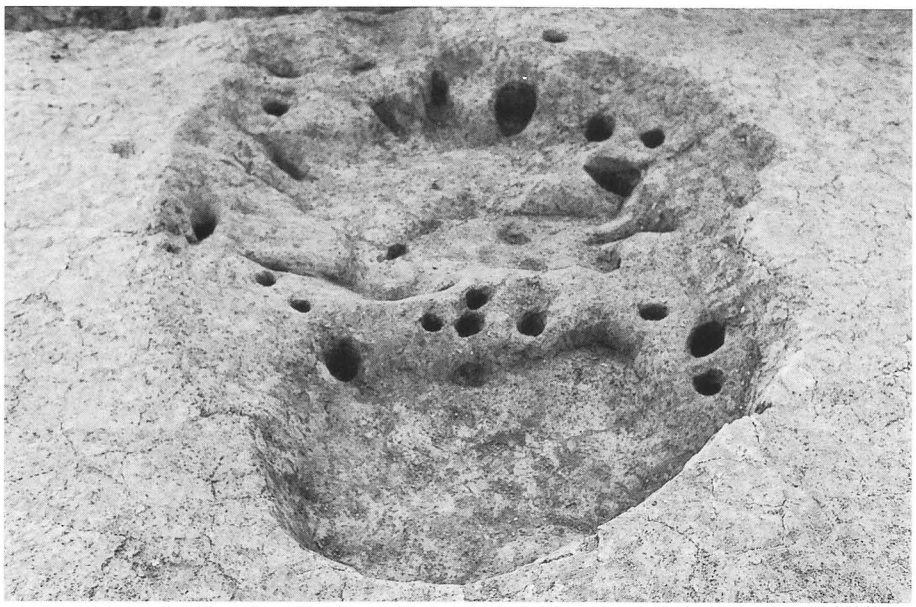
SK018土層断面（北から）



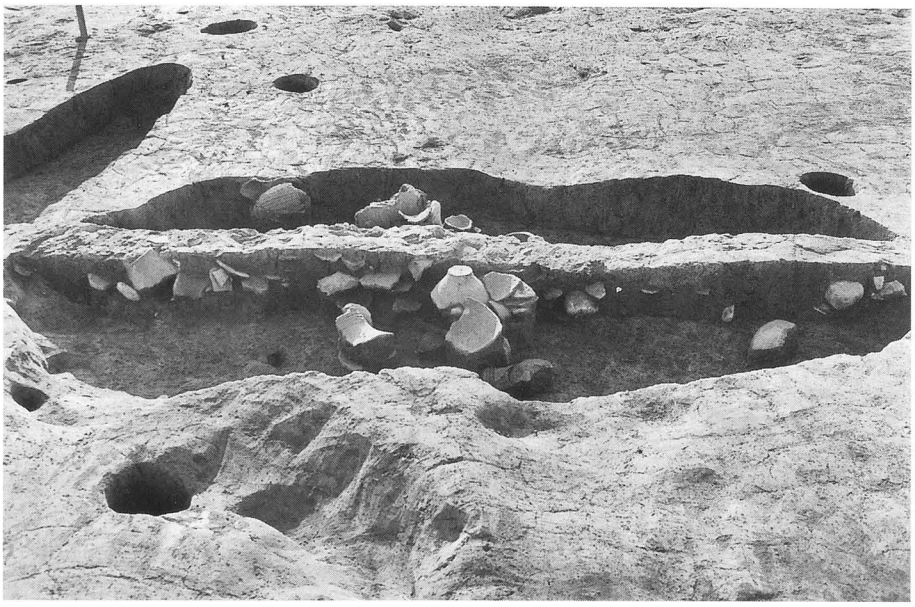
SK025土層断面（南から）



SK025完掘状況（南から）

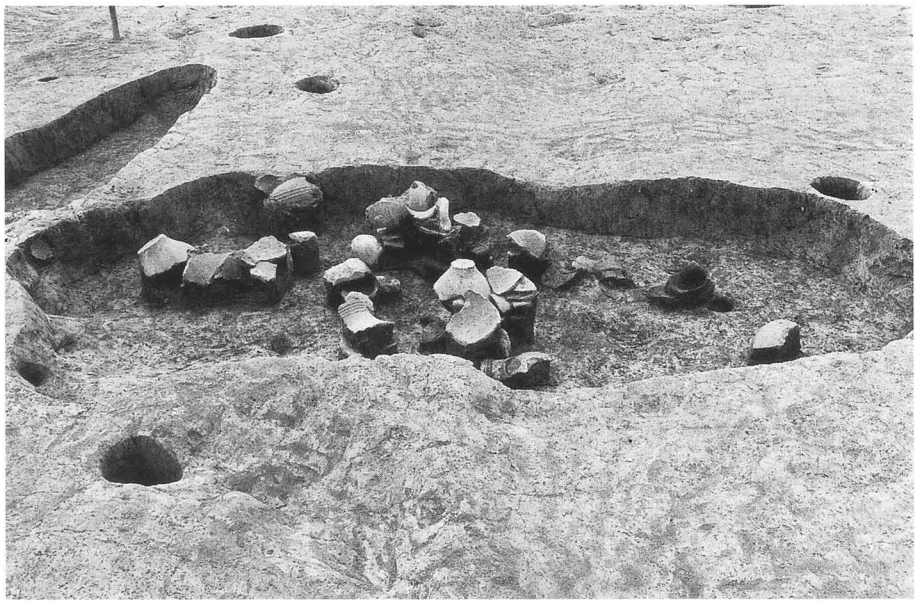


SK025完掘状況（東から）



SK032土層断面（南から）

Pla.12



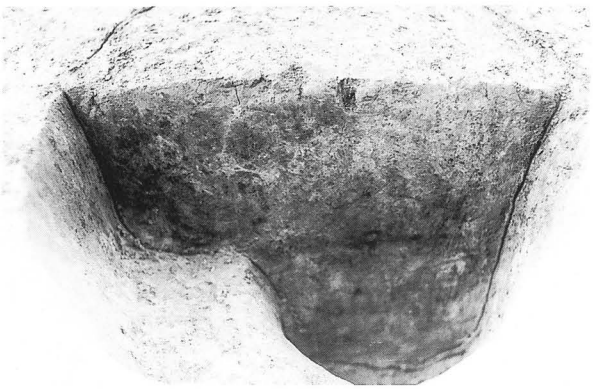
SK032遺物出土状況（北から）

SK032獣骨出土状況（南から）

SK048土層断面（南から）

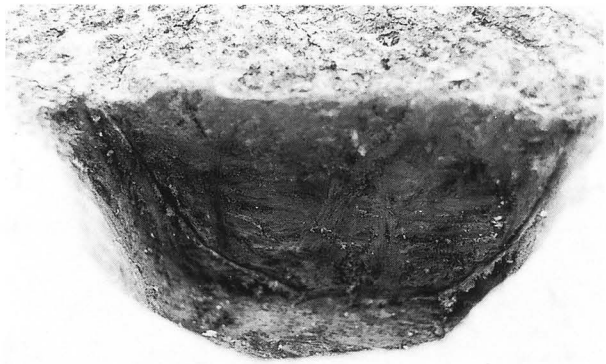
SK058土層断面（南から）

SK141土層断面（東から）



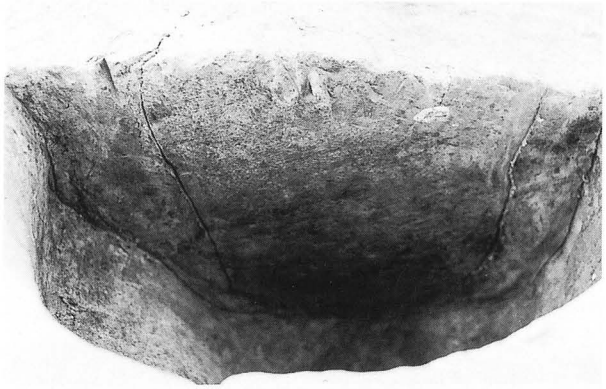
SH051ピットa（南から）

SH051ピットｂ（南から）



SH051ピットc（南から）

SH051ピットd（南から）



SH051ピットe（南から）

SH051ピットf（南から）

SH051ピットg（南から）

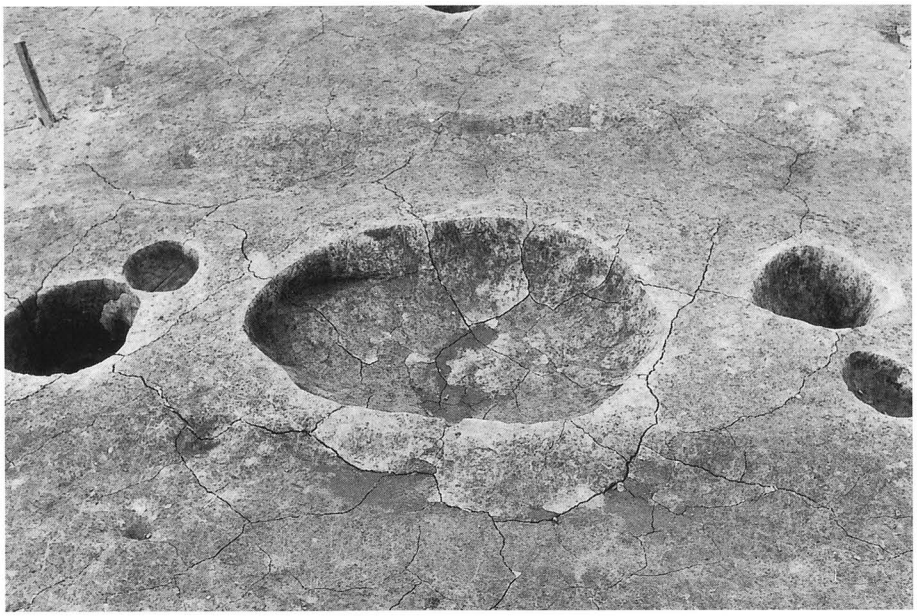
SH051ピットh（南から）

SH051ピット i （南から）

SH051ピット j （南から）

SH051ピットk（南から）

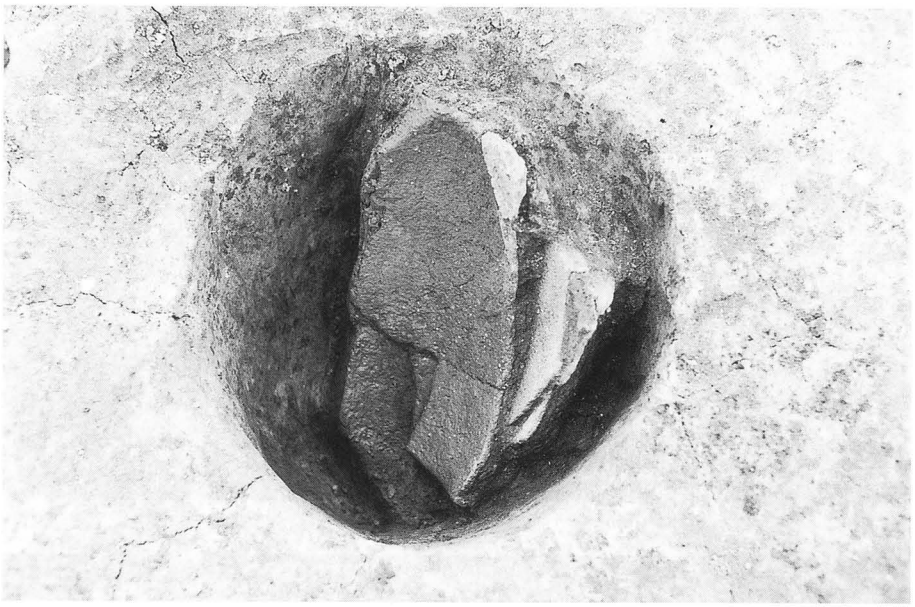
SH051ピットc遺物出土状況（南から）



SH051ピットg完堀状況（南から）

SP092遺物出土状況（南から）

SP094遺物出土状況（南から）



SP106遺物出土状況（南から）

SP107遺物出土状況（西から）